335-63

佐藤藤太著

宗教問題解決

京都下鴨 統一團出版部

明治
31 11 6
内務

哭菊園

京都下鄙　第一圖書部

丸新新太著

献むで此小冊子を

日野國明君に献ぐ

序

明治三十九年の秋、嵐山大悲閣に於て某の會を開いたことがある。何れも例の顔ぶれであつたが、珍らしくも新顔が一人交つて居た。癖であらう、時々、長い首を右に傾け、右手の甲を左の掌に重ねて、それを膝の上に支へるのであるが、腕の長いせいか双の肩が耳の邊まで押し上げられるかの如く見ゐる。始めから默り通うして、變な人間だと思はれた。僕は、凄みを帶びた暗い影を見る樣な氣がした。

其後此暗い影がをり〳〵僕の前に立ち塞がるやうになつた。其度毎に僕は一種不快の念を禁じ得なかつたことを記憶する。何故なれは、當時の僕は、今まで四邊に紛囂を極めて居つた群衆が全く消え、天地相接するところ萬里の曠野に獨立せる心地し、夜が明けた樣な、明月がスーッと海上に躍出でた樣な、何とも云へぬ剛爽な而かも何處かうら悲しい樣な氣分で居たのだ。で、大悲閣の會合に於ても永生の自覺といふを述べた次第だが、此影に遇ふと、何だか僕の胸裡に潜ひ現世的な而して高壓的なキーを押さるゝ如く感じ、僕が空想的超越的樂地に刺を挿まるゝ樣な痛みを覺ゐしむるからであつた。且つや、其の索莫として諸友の間を潜ぐり廻るさまを見ては、悪魔の影では

あるまいかと思はれたこともある。

此の暗い影といふのが卽ち佐藤君なのである。

所が妙なものである。程經て同君と學校の庭前に會したとき、芝生の上に横はりつゝ、白雲の飛ぶを見、千草の戰ぐを眺め、互に之に對する感想を語り合つたが、心頭ハタと相照すものがあつた。而して其閃きが眞個刹那的のものに過ぎなかつたにせよ、如何にも鮮かに、如何にも心奥から輝やいた樣に思はれた。僕が同君に對し胸襟を披くに至つたのは實に此投合ありてより以來のことである。

ある日の夕暮、君と共に田中村を過ぎり、小川のほとりに出た、秋天洗ふが如く、氣流るゝに似たり。僕一超して如來地に直入せる如く、空蕩々地、虛豁々地、常寂の妙趣恍として醉ふに堪えた、已にして潛かに謂らく、われに定形なくまた拘泥なし、例へばこの水の如く、無音川の默として笹舟を浮ぶることもあらう、谷川の小石に咽びて空山の寂寥に泣くこともあらう、澎湃怒濤、巖礁に吼えて天地を呪ふこともあらう。潭と澄み、淵と積もり、其他千變萬化するも只是れ境に隨つて轉ずるのみだと、急に同君を顧みて、『どうも山に遯れたくなつたなー』と語つた。すると君は、『内の方には充分堀り込んだやうだが、どうだネ、もちつと外に穴を穿けちや』と言つて、

僕が更に、『内だの外だのつて何だネ』と詰ると、君は大宇宙と答へた。此瞬間僕が如何にジャンプしたかは知る人は知るであらう。

爾來、僕は幾度か佐藤君と語り、論じ、又共に事を謀つた。而して常に僕が君の体で、君が僕の心であるやうに感ぜらるゝのであつた。さきには忌はしき影、惡魔の化身とまで思はしめた君が、如何なれば、かくもアットラクチーブのものとなつたであらうか、是れ蓋し君の宗教が然らしめたのである。

今や宗教論の流行頗る盛である。而かも宗教の何たるかは毫も明にせられないのである。彼等は宗教の嘗つて存在せること、又存在し得べきことを喋々するのみで、何處を敲いて見ても宗教必要論の外には音が出ない。醍醐上味の眞諦に至りては卽ち靈山萬里である。此の如くにして所謂宗教の一半は之を倫理に侵され、他の一半は之を藝術に削られ、其立脚地すらも喪失せんとしつゝあるではないか。此時に當り、佐藤君が奮つて獨特の宗教論を試みんとするは痛快と云はねばならぬ。機宜に適した處置だと思ふ。不幸、未だ之を讀むの暇なかりしと雖も、親しく君の宗教を見、又之に關する議論を聞き、大に啓發せられたる僕は、此著必ずや天下を益するものたるべきを疑はぬのである。宗教は生命である、眞劍の生活である、從つて記憶必ずしも宗教を作

るものではない、想像必ずしも宗教を作るものではない、技巧必ずしも宗教を作るものではない、若し當代の識者其迷誤を覺醒せずんば、宗教問題は永へに解決せられまい。かく言へばまた宗教には名あつて實なきものにあらざるかを疑ふ向もあらうが、其處が卽ち懸りて問題の存する所である。佐藤君の此著、また必ずや之を論じ盡くして居るこゝと思ふ。

世界、民衆十幾億、今彼等をして一齊に唱歌跳舞せしむべき合圖のキーを求めて居る。知らず何處を押すべきであるか、又知らず、何人が之を押すであらうか。王氣天を衝くが如き日東の山河、千載の時機に際して英靈の精魂を凝らしめぬであらうか。僕は此著を讀み、妄評を草して序に代へんとしたのであるが、憾むらくは其意に任せざりしことを。僕は寧ろ佐藤君に對する僕の經驗を述べ、以て衷心より此書を江湖に薦むることを喜ぶものである。

明治四十一年十月二十五日

猪股勳

はしがき

此小論文は『活人』第一號以下に連載し初めたるものなるが、此度必要に迫られて急に之を一小冊子となすこゝなれり。

猪股兄のものせられたる『統一團の組織』てふ一文は、本書の總論として恰好のものなるにより、兄に乞ふて之を卷初に收めたり。統一團の綱領を掲げたるも亦此旨に外ならず。

本書を公にするの意は、宗教事を憂ふるのあまり、何等かの疏通解決の其間に行はれんことを切望するがためなり。同憂の士の一顧を得れば幸甚。生は又世の宗教事に冷淡なる人々の注意を喚起したき心地す。

此書の印刷は生にとりて興味深きものなりし、校正は勿論、自ら一字二字は拾ひ、時々紙取りの眞似もし、運轉手の邪魔もし、起臥を共にして其頁數の進むを悅び、また原稿に追はれたる事もあり。此は中々面白き經驗なりし。世の筆とる人は時々此樂みを試みられて

は如何。

本書發行のために力を添へられたる、統一團及伏見十六會幷に十六會附屬印刷部の諸君の好意を感謝致候

明治四十一年十月下旬

佐藤生

目次

統一團綱領

統一團の組織

小引

第一章　教界の現況

第一節　佛教

第二節　基督教

第三節　諸教の通弊

第四節　諸教一帶の衰頽

第二章　各人の解釋と處置

第三章　教祖教の特質

第一節　信奉の諸態

第二節　諸態の小評

第三節　內外の両特質

第四節　教祖教大觀　四四
第四章　現代の宗教問題　四九
第五章　一段の解決　五三
第六章　宗教の新時期——個人教期　個人教の形態一班　七一
第七章　個人教の論據（上）　七九
第一節　人間の生命其物の性質此を保證す　七九
第二節　一切教祖教の本性此を豫想す　八一
第三節　諸教祖先覺の眞意又爰にあり　八二
第四節　諸教の眞修業者是を首肯す　八五
第五節　教界近時の趨勢また此を指せり　八六
第六節　諸教以外の得道者此を證明す　八九
第八章　個人教の論據（中）　九九
第七節　宗教の本義亦此を促す　九九
第九章　個人教の論據（下）　一二一
第八節　爰に大宇宙乃至神明の保證あり　一二一

第九節　狹義且强義の『宗教』てふ觀念また此を需む　一三〇
第十章　今一層の解決（上）　一三九
第一節　今人の宗教觀の多く誤れる所以　一四〇
第二節　宗教心、幷に宗教の成立　一四一
第三節　宗教心理學及び宗教哲學　一五六
第四節　宗教の形態と內容　一五八
第五節　各人の宗教事　一六二
第六節　新宗教團體　一七七
第十一章　今一層の解決（中）　一七九
第七節　諸教自身は如何に處すべきなるか　一七九
第八節　宗教と教育との關係——宗教々育　教育の一進步　一八七
第九節　多數民衆の教養　一九九
第十節　宗教と道德との關係　二〇五
第十一節　宗教と科學及哲學との關係　二〇九
第十二節　文學及藝術と宗教との關係　二一三

第十三節　宗教と經濟との關係　二一七
第十四節　宗教と社會改善　二二一
第十二章　今一層の解決（下）　二二九
第十五節　此解決轉化の意義　二二九
第十六節　文明の一轉歩　二三四
第十七節　宗教と東西洋　二四一
第十三章　結論　二四九

目次終

統一團綱領

各自特有の宗教を砥礪向上し、併せて同胞の靈的性能を啓發し、

現代文明の趨勢を商量參酌し、以て自他の經濟的狀態を上進し、

心物一如の見地に立ちて人類社會の改善を期す。

統一團の組織

猪股勲

明治四十一年二月十一日、我統一團は組織せられた。何がために組織せらたでわらうか。

曰く、心物一如の見地に立ち、精神的物質的両方面より人類社會の改善を謀らんとするのである。

地に落ちた種子が光線に當たり、雨露に浴して、生長するが如く、人間は教養に培はれ、境遇に生長するものである。而して前者が扶疎たる枝葉を大ぞらに翳ざして花を開き實を結ぶ如く、後者は靈活無碍の世界に至上生活又は極致生活の境涯を拓く。此の如きほ實に自然の恩寵である。然るに其實際に就いて之を見れば、幾人かよく斯の天賞の果を結び得たる。微妙なるは人の生命かな。心物両界に姿を映し、内外二境に影を投ず。之を以て人苟も自己の全部を網羅し、遺憾なく其の生長を遂げんと欲せば、内なる我卽ち心的自己を發展向上せしむると共に、外なる我卽ち物的自己を改良進歩せしめねばならぬ。而して前者は教養の丹精によりて成り、後者は境遇の開拓により

て來る。猶ほかの光線雨露及び土壌の肥瘠によりて草木の生長を見るが如きものだ。然るに世間精神的方面に從事する者は物質的方面を閑却し、物質的方面に關係ある者は精神的方面を遺忘する者が多い。否そればかりではない、互に輕侮し、嫉視し、妬忌し、相反撥して其の觸接せんことを是れ恐るゝの狀がある。斯くの如くんば如何でか能く人をして完全なる生長を遂げしめ、又自ら遂ぐることが出來やう。見よ、教會寺院の傳道が全く皮相に止まるのも、正直なる信徒が相行ゐて不健全なる消極主義に苦しみつゝあるのも、若しくは日曜限りの信者の多くなるのも、僞善者流の殖ゑるのも、又昔から年寄りの佛いぢり、お寺參は幾婆氣歩なき閑人の閑事、道德家ではうす馬鹿の箏調と相場の決まつて居るのも、何れか精神的事業の失敗を示さゞる。若し夫れ物質的方面の事業が滔々失敗せる跡に至りては、誰れ人も見聞するに厭いて居る位であらう。あたら意義ある財富と、才能とが如何に多く埃溜の裡に捨てられたであらうっかくて心物両者、各そが本來の意義を發揮するの期なく、文明長へに片輪の跡を止め去つたのは、惜しみもなほ餘りあるではないか。

此缺陷を救濟せんがために我統一團は組織せられたのである。心物一如の道理は、誰れ唱ふるとなく、誰れ和するとなく、一蜂蜂中に數々の聲をなすや、万蜂之に和して

亂飛するが如く、同志期せずして起つたのである。心的側面より云へば、内は以て各自特有の宗教を砥礪向上し、外は以て同胞の靈的性能を覺醒教養せんとするのである。物的側面より云へば近世文明の趨勢を考量參酌して自他の經濟的狀態を上進せんとするのである。故に前者に立ちて觀察すれば純然たる宗教的教育的運動と見ゐ、後者に立ちて觀察すれば純然たる經濟的社會的運動と見ゐるであらう。然れども吾人謂らく是れ一にして二にあらずと。之を一身我より見るも、將た社會我より見るも、心物両界、内外二境に投影せる生命の本體に肉迫し骨髓に透徹し、依て以て眞正全我の生長を全うせんがためには、其現はれたる姿を追ひ影に從ひ、二道爭ひ進むの外仕方はないが、両者に籠むる深き意味をわぢはひ來れば、全く一に歸する。

以下少しく吾人の所謂宗教、經濟につき、所見を述べて見やう。其の所謂宗教とは、人間或る時期に到達した場合の内なる我卽ち心的自己其物をいふ。元來宗教といへば、儒教であるとか、佛教であるとか、基督教であるとか、其他各種の成形教を指し、甚だしきに至りては、信仰箇條や、禮拜儀式其物だと思ふて居る者も少くない。併し、之は大なる誤謬と云はねばならぬ。宗教の要素は決してかゝる教義や典禮などの裡に存するものではない。全く教祖等其人の境涯である。吾人が至上生活若しくは極致生

活と稱するのも矢張こゝの意味だ。

然らば、各自特有の宗教を砥礪向上せしむると自稱する吾等同人が已に、かれら諸教祖の境涯に到つて居るかといふに、そんなことを窮むる必要はないと思ふ。たとひ其處に到ちずとも、吾等は吾等なりに各自の宗教を抱持し得るといふまでのことである。よく種子の例を引く樣だが、其生長未だ十分ならず、從つて、花を開き實を結ぶの程度に達せずとも、某の木、某の草といひ得ると同樣、各人其折〳〵の境涯を宗教と稱するに於て何の不可か是れあらんやだ。但し某の木、某の草と見分の付くまでには、若干日數を經過することを要する如く、苟も宗教と名の付くからには、少くとも之を延ばせば極致生活に進み得べしてふ自覺の發生以後たることを要する丈は明かである。或る時期に達した心的自己が宗教だと、前にいふたのもこれがためである。之より以上になると呼吸の通ずる所、脈搏の響く所、見聞覺知底、即今是れ宗教である。人間由來性質境遇を異にす。何ぞ宗教の異なるを怪しまん。形狀姿勢は申すに及ばず、其の質に於ても量に於ても、全然各自特有のものであるべき筈だ。然るに之を劃一し、万人を强ひて同一宗教に囚へんとするが如きは不量見の甚だしき者と云はねばならぬ。

這個、離すことも捨てることも出來ない各自特有の宗教即ち內なる我であればこそ本

氣にも眞劍にもなるなれ、誰れか好んで勝手もわかぬ他人の形式に自己を律せんとする者があらうぞ。櫻桃杏李爭ひ發く所に艶陽の賑かさはある。吾人も各自持前の花を咲くが天の意に叶ふものではなからうか。

教養に依りて心的自己を生長せしむるといふ所よりして、從來の成形教に對する吾人の態度は明かであらう。云ふまでもなく、之に捧ぐる敬意と感謝は他の學問藝術等に對するのそれと同じ意味である。若し夫れ靈界の歸趨を示し至極の境涯に蹴つけし諸教祖の功績に至りては、眞個に極星の光芒長へに燦たるに似たらんか。感恩の情、親愛の心、止めがたいものがある。但し、茲にも一言すべきことは、彼等大悟底の境涯すらも、無限の進化中、一階段を占むるに過ぎぬと信ずることである。

之を要するに、吾人は飽くまでも宗教權威の壓を自己の上に認め、之を培養するに各自其好む所を以てせんとするにある。佛教可なり、基督教可なり、儒教可なり、哲學可なり、科學可なり、藝術可なり、其他手に從つて自由に攝取し、以て內なる我を發展せしむればよいのだ。何宗の門徒、何教の信者でなければならぬなどいふ卑劣の考を起さず、殊に從來の所謂宗教家の如く、救濟の門、解脫の鍵は、獨り其宗にのみ存すとする樣の陋見に陷つてはならぬ。かくて何等拘束なく緊縛なく、各囚へられざる

信仰を吐露して祗礪向上を期し、各自特有の宗教を完成して至上極致の生涯に到達せうとするが吾人一面の主趣である。

更に外なる我、又は物的自巳の生長に就きては、境遇の發展を意味するものであるから、之を完うするためには、必ずや經濟的狀態を改良進歩せしめねばならぬ。此點に關しても吾人の理想は極めて高遠なることを信ずる。世人が驚き且つ走る社會主義無政府主義の所謂最上理想と雖ども、獨り其美を擅にすることは出來まい。然れども是は理想上の話だ。頭は天を貫くことも容易だが、足は地を離るゝこと能はざるを奈何。故に方法手段に至りては最も着實を尊ばねばならぬ。之に於ては近世文明の特長を採用し、最新の研究、緊要の組織に參酌し、現に着手し得べき點より始めて、序を追うて完全を期する積りである。此方面は他の同人が能くに相違ないから、是で措く。

同胞の靈的性能を啓發せんとするのは、各自特有の宗教を得た者には如何にしても止むに止まれぬ衷情の願である。這般の消息は知る人は知るであらう。而して吾人は聊かにても自己の宗教を強ひんとするの念なく、單に覺醒教養の機緣を與へんとするものなることは前述の主趣より明かであらう。

日月の輝き、星辰の運ぐる、風の吹き、雨の降る、其他あらゆる自然現象より、學問

藝術其他生活境遇等百般の人事現象に至るまで、何れか自他を生長せしむるの因たらざる。是に於てか、宗教的經濟的両方面より分け入るとき、吾人が着手すべき問題は、實に廣汎であらう。悲しめる寡婦の涙を拭ふ樣な所から、世界の平和に貢献するまで吾人が活動の領域を逃れるものはあるまい。研究の方から云ふても、實施の方から云ふても、小は細微を極め、大は無限に亘るに相違ない。

二月十一日は紀元節である、皇祖建國の日である。滾沌濛々、陰鬼の號叫するが如き黑闇々の天地に踴躍して八紘に光被せる朝暾！依つて以て眼前に展開せられたる太古の曉色！崇高である。雄大である。剛健である。莊美である。簡朴質實、生々潑々、神祖冷嚴の姿に凝りて、精氣流れんとするの慨あるではないか。

此日を卜して統一團を組織したのは、新文明の前途に對して聊か信ずる所があるからである。

宗教問題の解決

佐藤藤太著

小引

星疎らにして松黑く、寒光影を追ふの此大天地を指し、是れ我宗教なりと云はんには、一切無得、何等疑問の殘存するなし。若又、渾然たる性格、其呼吸は宇宙の心に通ふの人を呼んで、是れ卽ち宗教なりと稱せば、もはや餘す處の宗教問題なるもの有るなし。されど此等は達人獨得の處にして、此を世上一般に望むべきにあらず、人類普通の問題としては今一段の思議を要す。

宗教問題が其解決を得ざる事久し。科學を起し産業を盛にし、政法を整へ交通を便にし、諸般の問題を自家の程度相應に解決し來れる近世文明も、此に向つては未だ適當なる解決を加ふる能はず。げに此問題は猶近世文明の謎、訊、また耻辱にして、廿世紀の須らく解決せざるべからざる處のものなり。其解決や單に宗教てふ一現象上の事にあらずして、其影響する處實に社會の諸制度諸現象に及び、其極終に近世文明の眞

意義を發揮し、此をして歸趣あり統率あらしむるに至る所以の重大基本事たるなり。今此に一歩を着けんとするに當り、先づ教界の現況を画見せしめよ。

第壹章　教界の現況

我邦の劣等なる宗教現象を顧みるに、巫祝、神水、占卜、裸參り、神棚、擂斷ち、御籤、死靈怨靈、狐落し、方位、お札お守、油懸地藏、願かけ、お百度等。淫祠邪道の語も所詮此を代表し得ざるほどなり。されど此等は既に警察てふ俗權の干渉しつゝある程のものなれば、吾人當面の問題以外に措くを便なりとせん。たゞ此種のものをも今日猶宗教現象中に計へざるべからざるかと思へば、何となく情なき感の迫るを覺ゆるのみ。

第一節　佛教

我國最大の宗教たる佛教に就いて見るに、其が深遠幽玄なる哲理と經驗とを藏せること、幷に其が過去日本の靈的生活に偉大なる貢献をなせし事は、衆の齊しく是認する處なり。此と同時に其が現に活宗教としての生氣と活動とに乏しく、少くも德川治下百年間既に樂隱居として高臥せし事、又斯教の妙處精粹をば邦人既に此を吸收して國

民的血肉となしたれば、今俄に有形佛教を本邦より取去るも國民はもはやさまで苦痛を感ずまじき事、幷に此飽滿の狀態こそ卽ち寺院をして僧侶の畫寢所たらしめたる所以にして、此を見て單に僧侶の怠慢を責むるが如きは事の本末を辨へざる業なる事、是れ亦世人の諒知せる處なり。今日に於て高僧智識が法悅流露の天地を有し、幾多の善男善女が信仰の盤石上に安立せること、爭ふべくもあらず。されど其大勢を觀察すれば、團體としての佛教が其至寶精髓と共に千載の汚濁弊害を蓄積具帶せること、又自他の俱に認むる處なり。輪廻轉生の說は二千年前の思想としては妙ならんも、今日は到底許容すべくもあらず。其の人世を厭離せんとするの根本傾向は不健全の甚しきものにして、僧が俗よりも俗なるの醜態は卽ち此不健全不自然より來る一結果に外ならず。罪障解脫の發足點は、基督教の罪惡觀と等しく、非常に有力なる念願動機たると共に、其物既に幾多害惡の潛藏を豫算せり。地獄極樂の說は童話としても痛激なるべく、其印度的なる奇談怪說は宗教よりも寧ろ文學の部類に屬するならん。其の經典尊崇の極は、嗤笑すべき凡百の愚習を起せるにあらずや。その政權に媚び國教たるを冀ふの態、古今何ぞ其醜を一にするや。最も唯心的の宗教にてありながら、何ぞ千百の大小神祇を併祠するの愚を演じて、以て民を惑はすぞ。何故に陋劣なる教門宗派

心を今日に禁じ得ざるか。今日俗間の佛教信仰を見よ、佛とは卽ち死人の謂なり、教內第一の觀念は斯く淺ましき姿に陷りて、僅に佛門維持の具となれり。僧侶諸氏は何故に正覺者の本義を明にして以て、先づ其本尊の救濟より始めざるか。今日の寺院を看よ、其が國民と直接交涉する所以の道二あり。一は祖先崇拜の民心に循ひて葬送追弔をなし、一は其境內に鬼子母神、帝釋、稻荷、太師、毘沙門、摩利支天、及其他の小祠を設けゝ以て參詣人を繫ぎ、賽錢を得るにあり。眞摯なる佛教家は此を如何に觀ずるか。是れ佛教が土俗傳襲の信仰に媚びて僅に其命脈を維持せるの現況を餘蘊なく暴露せるにあらずや。此二者は是れ佛教敗北の紀念品なるにあらずや、卽ち團體としての佛教は敗北の紀念品によりて微かに其餘命を保ちつゝあるなり。

爾餘の弊を數へんは寧ろ狂者の後を追ふに似たり。日夕吾人の前に演ぜらるゝ佛徒の舉動、是れ唯黨派心の餘焰のみ、自家の腹を肥す策略のみ、その殊勝なるものにて寺院伽藍の修復のみ、その大經綸と稱するものにても畢竟教勢挽回卽ち團體としての勢力を獲得するにあるのみ。これ等の教門宗派は所詮社會より、國民の教化救濟の機關と目せられずして、單に既存の怪物厄介物として過せられつゝあるにあらずや。卽ち現佛教は日本社會全體よりも生命乏しきにあらずや、社會よりも遲れたるにあらずや。

社會の活躍と佛門の衰々とを比較せよ、佛門は寧ろ此健全體の一部に生ぜる腫物の如き觀あるにあらずや。佛教が社會を導きつゝあるか、乃至社會が佛教を持餘しつゝあるか。此をしも活宗教と稱するを得べきか。宗教とは社會民心を啓發指導するものなりとは、僧侶諸君の常に口にする處なるが、日本は果して此半死の老人に導かれつゝありや。若し世に、列車に曳かるゝ荷厄介の機關車なるもの存し得べくんば、佛教は正に其なり。

堂塔果して何のために存せる、美術上の價値を外にしては、是れ畢竟僧侶の隱居所にあらずや。今人は爰よりして其の慰安啓發を得つゝありや。寺領院財は即ち僧侶を養ふためのものにして、其幾許錢が果して人民教化のために割かれたりや、淨財由來斯かる性質のものなるか。僧侶が金錢を集むること、妓婦幇間よりも猶巧にして、乞兒よりも陋なり。現佛教界の傑物とは、巧に信徒を籠弄して其の山なす借金を始末せしむる者の謂なり。彼果して人民教養の事に指を染めたりや。最も公共的泰他的なるべき者却りて最も自營に忙はし、是れ其の體形老癈して不具者となりたればなり。此間の事、吾人は憤慨と冷淡と失望とを退けて、靜思熟察徐ろに頽廢の由來を徹底尋求し、以て眞個の活路を發見すべき責務あるにあらずや。

予は宗教の熱愛者なり、基督教黑住教と等しく佛教を尊重敬愛す。その忌憚なく積弊を列擧したる所以のものは、たゞ其復活を切望するがためのみ。予は信ず、佛教衰頽の最大原因は其某々制度にあらず、其僧侶の不勉强にもあらず、其內容教理の某々調點にもあらずして、實に其が教祖教たるの特質、即ち立教の基礎其物の上に存せる事を。僧侶寺院の不始末、宗門の偏執、佛門の衰頽、其他凡百の弊害は悉く此根本事實より派生せるなり。其細說に至りては後段を俟ちて更に此を明にせん。

第貳節　基督教

基督教が現時最も活々せる宗教なること、何人も皆肯首せん。世界の大宗教と云へば佛耶兩教を擧ぐべく、宗教界の花役者と云へば十指悉く基督教に集まるべし。其十字架の齎らせられざる邦國なく、其聖典の飜譯なき國語は到底生存競爭に耐へ得ざる處のものなるべし。ナザレの一工匠の遺教は小亞細亞埃及に入り、希臘に及び、羅馬帝國を其領地となし、全歐洲に施き、米大陸を席卷し、亞弗利加を繞り、印度より支那日本を襲ひ、濠洲又其版圖たり。其が歐洲文明の骨髓となり、血肉となり、人類に大貢獻をなせしこと、誰か此を拒むべき。但だ其過去の効罪を數へ、此を褒貶せんこと

は本論の要旨にあらず。予の特に指す處は、該教の現況如何、殊に其が如何に積弊に累はされ、如何に行悩みつゝあるかを視、以て其間よりして若干の條理と解決の暗示とを得んとするにあり。

歐米の天地、基督教の浸潤せること、其由來遠く且深し。既に國民性に織込まれたるのみならず、現時猶社會の一大勢力たり。しかも其權威また昔時の盛觀なく、其鼎の輕重が人心無意識の底に問はれつゝあるは事實なり。天主教希臘教は古物的韻致と豊富なる宗教的風味とを有すると共に、お寺參り式、お宮詣式に墮して、佛教中の卑俗分子にも劣らざるほど虚儀迷信に富む。直言せば、是れ墮落せる基督教にして而も改悛の見込甚乏しく、幾多變教の志士此がために暗涙に咽びつゝあるなり。此を評して以て、天主教などの方新教よりも却りて宗教らしと云ふが如きは、是れ畢竟局外閑散子の浸言のみ。基督教にして若し眞に希羅両教のみならんには、其使命は既に過去に盡きたりと斷ずべきなり。新教諸派に於ても、其思想方面の既に失敗に終れるは蔽ふべからざる事實にして、舊教義系已に色褪せて新教義未だ成らざるは、是れ卽ち現下の窮態にあらざるか。該教が老境に入る事の比較的遲きは、其が生活教にして日常生活に近く、以て現世と離隔すること較少なきによる。近時第二流の人物が教職に就くこと

と少なく、神學生には特別補助あるに拘はらず入學者次第に減じつゝあり、而も其原因を以て現代の財貨主義に歸するが如きは皮相の見たるを免れず。教會出席は多く習慣的となり、たゞ人前を繕ふ一虚禮と化しつゝあり。教壇の聲は人心の至與所と社會の骨髓とに貫徹する能はず、説教は三十分以内に縮められつゝむり。最近に起れる新分派新運動卽ちザイオン派、救世軍、土曜及再臨派、青年會、エヴンゼリスト、リヴイヴリスト等を見よ。斯教の何となく惰勢を來し沈滯の氣色ほの見ゆるに耐得ずして、是れ畢竟純福音が混和物によりて稀薄にせられたると、牧師傳道師の不熱心なるとに由來すとなし、斯くは純福音を以て其標語となし、活動を以て其旗幟となし、恰も運動宗教の觀あるに至れるなり。故に可憐の處あると共に、血迷ひ、神經過敏の嫌あるを免れず。殊に所謂純福音は井底觀に過ぎずして、現教會が何故に奮起し得ざるかの眞因に至りては其見解全然誤れるなり。

其他『アダム失墜――キリスト救濟――天國地獄』の大思想系、斯教主一の大教義系は今日既に事實上破棄せられたるもの、此を譬喩的に解して以て其失敗の跡を掩はんとするが如きは、陋劣至極、宗教の面目を汚す此より甚しきはなし。特殊天啓、神の約束等の觀念は今日既に男らしく其毀却を自白すべきものなり。聖書觀は佛典觀と等

しく、教祖教には固有のものとして自他共に此を許せども、常識あるものは實際もはや其絶對權威を認めざるなり。

以上要するに、基督教が現時最も生命ある宗教たることは爭ふべからざるも、是れ畢竟比較上の事にして、「宗教」の聖坐よりは既に〳〵辷落ちつゝあるなり。齊、魯、遲速はあれど何れも已に秋に遭へるなり。佛教にして若し埃及ならんには、基教は恰も羅馬に似たり。盲信者にあらざるかぎり誰か能く、該教が將來の新文明を產出すべしと豫期し得んや。其千百の弊害慘毒に至りては歐洲史上に溢れ、先に佛教について畢げたる處のもの多くは移して以て基教に宛つるを得べく、若し然らざるものも該教の前途に横たはる道標と見て可ならん。

第三節　諸教の通弊

世界最優の宗教たる佛耶兩教に於て既に以上の如し、其他は推して知るべきなり。人間萬事何事か圓滿無瑕なるを得ん、不完全は宇宙萬有の通性なり。何種の現象も既に一個の制度組織をなせるかぎり、其起るや社會の必要ありて存し、世は其効益を享けたるなり。此と同時に其の制度組織たるにより必ず幾多の不便弊害の伴なふべきは、

吾人の夙に諒とする處、何ぞ必ずしも獨り宗教をのみ咎むべけんや。其長所は益々此を助長し、其缺陷をば漸次匡正補足し、以て益々進境あらしむべきのみ。たゞ教祖教に於ては其特異の性質よりして、萬人の否認する處も容易に變更改易するを得ざるなり、隨つて宗教問題は爾餘諸問題に於けると同一筆法を以て此を解決するを得ざるなり。故に吾人は深く思を潛め以て其諸弊のよりて來る所以を究めざるべからず。蓋し救濟解決の端緒は常に弊害其物の内に潛在すればなり。今左に二三の通弊を擧げん。

一、自教を以て唯一の眞宗教となす。

佛教然り、基督教然り、回教は勿論然り、儒教又天下の至道を以て自ら居り、神道も神ながらの大道を以て自任す。蓋し教祖達得の境は皆深遠玄妙なるものなりし故、教祖自らも此を至極の地と自覺したるべく、況して其隨信者が此を唯一の神人と感じ、其教を至上の勝法と認めんは、至當の事なり。況して史的智識に乏しく、交通不便なる古代に於てをや。而も此唯一眞教の一觀念は幾多の迷信誤謬を生出し、教の内外に禍する所以のものなり。

二、自教を以て宇宙經營の主要機關となす。

自教祖は現未に亘る大主權者にして、來世の禍福苦樂の岐るゝは一に其救濟を受くる

と否とにわりとなすは、諸教々義の一骨子なり。此思想こそ即ち、他教を以て悪魔外道となす所以のものにして、千百の迷妄悪虐此より生ずるなり。各國史上の宗教戰爭、迫害、慘殺は多く此思想の産兒なり。

三、教門宗派の偏執。

此よりして如何に非宗教的なる罪悪の演出せらるゝかは、世人睹聽の熟せる處。

四、同一信條を強ふ。

未開幼稚の民が此に依て稗益する處ありしは眞也、而も此特質はやがて人類の思想を束縛し、其發達を妨げたること、文明史上に明なり。此に反して今日の實際を見るに、世人多くは其信條を信受遵守せず、其不可なるものをば措いて問はざるなり。即ち此點に於ては教祖教の特質は既に破毀せられたるなり。

五、宗教其物改善する能はず。

宗教ほど他に改悛を迫るものなく、又宗教ほど自ら改悛せざるものなし。此不改善こそ教祖教の最悪特質にして、其致命傷たるなり。此特質よりして斷ずれば、教祖教の前途には唯闇黒あるのみ。

六、立教の根據其物既に『宗教』の本義と矛盾せり。

教祖教成立の所以既に摸倣他借の義を含めり、然るに『宗教』の本義は『本來』、『自生』、『第一義』のものたるにあり。故に教祖教は其根本義に於て自ら準備的、庇護的、過渡的の特質を有し、以て次に宗教の一新形相の生じ來るべきを豫告せるなり。猶此點に關しては特に述ぶる處あるべし。

第四節　諸教一帶の衰頽

啻に佛耶の二大教が衰運に向へるのみならず、將又諸教が幾多の弊害を具備せるのみならず、一切の成立教は實に一齊に頽勢に傾き、幾多愛教の志士の發憤畫痒するに拘はらず、大勢日に非にして、復收拾挽回すべからざるものゝ如し。甲衰へて乙興り、丙倒れて丁此に代るは、社會日常の事。若し夫れ某々教のみの非運ならんには、此は是れ其等諸教に特存せる原因より來れるものとして、さまで吾人の驚愕と憂慮とを惹くに足らざるべし。しかも今日の事は實に、諸教推しなべての衰頽たるなり。是れ豈に輕々に看過すべきものならんや、はた又一教一派に適する處の因緣を以て此を解說し去るべけんや。

或は最近世の多産多財と財貨慾とを以て其原因ならんと揣摩するあり。或は理性乃至

科學の發達と教育の普及とを以て其素因となすものあり。此等の所見皆若干の眞理を含むと雖も、此を以て諸教衰頽の眞因となすに至ては、何やらん物足らぬ心地するなり。彼の諸教の舊見に倣ふて、末世澆季をかこつが如きは畢畢兒戲のみ。

若し夫れ諸教の衰勢を自覺せざるほどの迂濶漢あらんには、彼は史を繙いて昔時の宗教隆盛期を回顧すべく、また死屍累々たるが如き諸教の寺院を訪ね、更に若し惰力てふ一大支柱を取去りたらんには何れの教派か猶能く存立し得べきかを想像せよ。下愚の社會に於て迷信の甚しく行はるゝを見て、諸教衰退の大勢を疑ふ者あらんか、精神の發達せる社會が如何に此を憂慨嫌惡しつゝあるかの事實を顧み、更に進歩發達せる人士が此等迷信に惟らざるの事實は抑々迷信の前途の如何に成行くことを示せるかを反省せよ。

此衰頽の大勢に關し、吾人は今爰に其因由を詮索せざるべし。たゞ此大勢の事實たることを認知し得れば足れり。蓋し諸教の悲況は、熱心なる傳道者こそ最良く之を感じ居るなれ。

以上吾人は先づ諸教の現況を知らんため、遠慮なく其短處弊害を摘發し、其非運を直言せり。是れ眞乎の解決には必ず正直なる檢察の先だつべきことを感ずればなり。各

教の過去と其内容經驗とに對して如何なる尊敬を拂へるかは、下文自ら之を明にせん。

第貳章　各人の解釋と處置

吾人は宗教の現況を見て、此を如何に判ずべきか、將又吾人自らは如何に此間に處すべきなるか。先つ今人實際の態度如何を顧みん。

世には、宗教とし云へば忽ち御祈禱お禁厭を聯想し、以て宗教性はよし人間不可避の性情なりとするも、是れ畢竟蒙昧無知者の專有なれば、人智開け、其情緒優雅に、其意志剛健となれば、自然に之を蟬脫するを得べく、隨つて人類の進步發達と共に宗教事は漸次減少消滅すべきなりとなす論者あり。此種論者にも僅少の論據あり、しかも此は貝殼牛皮の廢棄よりして社會通貨の絕滅を斷せんとするの類にして、其宗教的經驗及智識は到底御幣擔ぎ連及び貝殼貨幣の蠻人と大差なき人々なれば、今日の宗教事を思議するに際しては先づ埒外に置くが穩當ならん。

次に一種の論者あり曰く、宗教は所詮道德治安の要具にして、道念微弱なる蠻人及半開人には修身克己のため必要なれども、其精神既に發達し、公德心の堅固となれる人

々には最早其用なかるべく、ために宗教の前途は唯暗黑あるのみと。加之幾多成立教か過現の人類に及ぼせる迷信弊毒は痛く此種の人々の感情を害し、益々宗教に對する輕侮嫌惡を強からしむるなり。然れども此輩又道德治安以上の妙境に觸れず、且つ宗教性を誤解せる者なれば、所詮宗教事を云々する資格なかるべし。

予輩は如上無用論者の短見を惜むと共に、世の宗教家及び必要論者に對して遺憾なき能はず。『宗教』の必要てふ事は必ずしも某々教の必要を保證せず、況して其弊害短處の併取をや。彼等は自教を推薦する前に、須らく先づ其教の弊毒を除去すべき責務あり、少くも之を自白すべきを以て宗教的態度となす。必要論の聲の下に、自教の全部是れ必要なり眞理なりと曲庇するが如きは甚しく非なり。宗教家にして若し自教を推薦する前に其積弊を洗滌する能はず、乃至之を自白する能はざらんか、彼等は切實に其然る所以を省察し、以て眞率に處決する處なかるべからず。此點に於ては宗教家幷に一般世人は『詮方なき事』として推緩想容すること度に過ぎたり、即ち彼等は實際上あまりに宗教を輕侮せり。

近代に至り諸教の思想方面多く乎負となるや、世人則ち此方面を輕視して曰く、宗教は經驗なり、其思想教義の點は敢て顧るに足らずと。されど看よ、諸教祖の現はれし

時は其經驗を語ると共に又某種の思想所信を主張せしにあらずや。將又新教派の生じ、信仰復興の起りし際は皆其教の某々特殊教義を强唱堅持して以て蹶起せしにあらずや。一般人事に於けると同しく宗教事に於ても又、思想は多く先驅者たり。故に若し今日の實際を公平に評すれば、思想方面の輕視は畢竟、其方面は劣敗に終りて到底今人の顧る處とならざるにより、其教の猶用ふべきことを示さんため特に其方面を輕視する、無意識の順應に外ならざるなり。但だ宗教の本領が靈的經驗にあること云ふまでもなし。

我邦一部の人士は近來頗る宗教に留意するに至れり。『宗教の必要』、是れ確に時代の聲なり。今日の如く可なり進歩せる時代に於て新に一宗教を受容するの實驗は、吾人の特に注目すべき價あり。先づ多數人士は切りに靈的渴望の動くものあれども、さて教會寺院に出入するも好ましからず、現宗教にも慊らざる節あり、斯くて密かに彼此教の經典を繙き、其妙味をば嘗めながらも、終に某々教の信徒たる能はざるなり。又此までに至らずして終に自家の靈性を閑却し去る者は一層多し。更に又幾度か或教門に就けども、其弊に耐得ずして中止したる者甚多く、此事の特に新來の基督教に多きは固より自然の數なり。次に世人の未だ深く注意せざる處なれども、所謂教會卒業者

なるものは實に夥しき比例なり。彼等は大抵數年にして教會に飽き、特別任務を負はせられたる者の外は多く卒業者となり了るなり。其是非は措いて問はず、事實は事實なり、而して此は宗教事を省慮する者の必ず看過すべからざる處なり。以上新に教門に關はる人々の現ずる實蹟をば、吾人は如何に觀ずべきか、此奇象は果して何事を暗示するか。此に對する世上識者の見解は多く部分的眞理を包含すれども、未だ眞相に貫徹せるものあるを見ず。又如上脱離者の擧ぐる聲は『宗教改革』の叫にあらざれば即ち、『宗教も大概なものなり』との嘲なり。

一方には又教會寺院に屬しながら、其教の不可なる部分をば不問に附する、極めて穩健怜悧なる態度あり。現宗教にして千載の穢垢を帶べる間は、此は止むを得ざる處なりとするも、教祖教の本質に反するは云ふまでもなく、立教信奉の根底に於て既に暗々裏の推移をなせるを認むべし。ともあれ此種信徒の態度は曖昧姑息たるを免れず。現教派内にある者たりとも、其教の某々個所に對する變革の希望を有せざるは稀なり。しかも其教祖教たる特質よりして、扨如何ともなす能はず。爰に於てか、其宗派の改革を望むあり、新宗派出づるならんと豫測するあり、或は新宗教の起らんことを希ふあり。蓋し新ルーテル、新法然、乃至新佛陀新基督の出現を願ふは、教門の内外を問はず、現代憂世の士の通情なり。靈界の偉人を渴望するには、何人か異存あらん。但だ如何にして新宗教の起り得るかは一大疑問にして、よし此難關を越え得るも其が教祖教の通弊を帶ぶべきは逆睹するに難からず、殊に幾百年後には現在諸教の如き桎梏羈絆を人類に加へて以て、此を苦しめなん。然らば現代最奥の聲たる『ルーテル再來』、『釋尊再臨』の要求も又、一新教祖教を望むかぎりに於ては未だ達見と稱するを得ざるなり。彼の見神者幷に自稱神佛者に至りても、是れ實に時代要求の一表徴として、予は其意義を認むるに躊躇せず。されど彼等が各々一新教祖教を創めんとするの跡あるを見ては、予は其見の甚透徹せざるを惜まずんばあらず。其結果を視よ。

世に綜合宗教を唱ふる者あり。說者にして果して眞面目ならんには、幾多宗教の長所を抽取り、科學藝術よりも其材を得て、一新教義を提供するも妙ならん。たゞ斯くの如くにして果して一教祖教の成立すべきや否。

最後に宗教事冷淡者に就かん。現教會及寺院への出入を厭ふには相當の理由あらん、耶佛教中には不滿足の處もあらん。されど自家の宗教事其物に冷淡なるに至りては、斷じて非なり。此點に於て現代は危險なる迷路に陷入れり、是れ其最大不幸にして、邦人は殊に其弊をうけたり。現在諸教が人をして反動的に爰に至らしめたる其罪固よ

り淺からず、しかも無信者其人の失脚過誤も又毫も恕すべきを見ず。此不幸に對しては滿腔の同情を捧ぐると共に、其失態迷妄に至りては皷を鳴ちして之を責めざるべからず。是れ寔に其人と其社會との精神的死活問題なればなり。

以上要するに、宗教事に對する今人の解釋と處置とは皆其に戸惑ひの姿にありて、其混沌不透徹なること毫も宗教其物の現況に讓らず。然らば吾人は到底此間よりして新活路を開示せらるゝの望なし。故に吾人をして轉じて、教祖教其物の性質を伺はしめよ、是れ或は一縷の光明を吾人の前に投ずるを得んか。

第三章　教祖教の特質

基督釋尊以前よりして今日に至るまで宗教界は教祖教の世にして、今人すら猶宗教と云へば直ちに祖法若くは祖名團體の事なりとして毫も怪まざるほどなり。其特質に關しては學者の研究稍其歩を進めたるもの〻如し。

所謂教祖教卽ち祖名團體は教祖其人に對する尊信歸依によりて起れる者なり。否寧ろ斯かる團體は教祖を神視するによりて始めて生出し得たる事、古今の事蹟明に此を證せり。基督は復活せる神者、佛陀は絶對者の顯現なり。若し單なる尊信歸依ならんには、一鎭護神として奉祀せらるゝに止まり、敢て大團體を起さゞりしならん。神視の一事や是れ實に教祖教の根本義にして、其諸他の特質は多く此より派生せるなり。故に教祖教の特質を考察せんには、必ず此を念頭より離すべきにあらず。

第一節　信奉の諸態

教祖教信徒の信奉態度に大要四種あり、祖法遵奉、教祖摸倣、教祖神視、教義信受是

なり。

（イ）、祖法遵奉。

教祖開示の思想を受容し、其訓戒を守り、以て我精神を高め其生活を潔くせんとす、是れ此種信奉の常態なり。此内又自ら二樣の別あり、一は祖言を戒律として嚴守せんとし、他は其精神思想に副はんとす。信徒にとりては教祖は卽ち精神的立法者、無上命令者なり。此種態度を指して以て祖法教と稱せんは當れり。

（ロ）教祖摸倣。

教祖の行動及心事を摸倣し、或は其證得の妙境に達せんとするが此態度の特色なり。教祖の地位は主として人の師表たるにあり、中にも妙境到達の摸範たるに至りては、其使命功蹟共に至大なり。摸倣教の名は此に相應しからん。

（ハ）、教祖の神視。

教祖神視は一教成立の最上要件なれば、此態度は蓋し教祖教の生粹を得たるものなり。教祖を以て至上絕對者の權化、人類唯一の救濟主、未來世界の支配者なりと信ずるに至りては、此態度の精神は餘蘊なく發揮せられたり。此は教祖教の中堅にして、或人々が稱して以て最も宗教的なりと爲す處のものなり。祖法教及摸倣教の根底は多く爰にあり。單なる摸倣教は教祖教としては淡白に過ぎん、今の教祖教に力なき一原因は正に爰にあり。但だ其救濟策如何は全く別問題に屬す。

（ニ）、教義信受。

既に教祖を神視して其無上權威を認む、爰に於てか教祖を中心とせる一大思想系、卽ち宇宙觀及人生觀の生ずるは必至の勢なり。『マホメット唯一預言者――天國か地獄か』の如き此例なり。救濟解脫の念願と教祖神視と宇宙觀懷抱の欲望とは相合して終に教義教を作るなり。故に教義教中には人類思想上の一大要求ありて其根底に存せり。教義系にして一たび成立せんか、教義は一教内の至要物となり、一宗教と云へば卽ち直ちに教義系を指し、至上神佛も教祖も畢竟此教義系の一節目たるに至るなり。一教の信奉とは所詮其教義を信受するの事となり、『某教を信ずる』の語は此に最も適切なるを見る。其が煩瑣的臭味を帶び、特に中世式なること云ふまでもなし。一宗教の歷史中、教義教は普通最後に起るものにして、教祖の死後幾代の後に成るを常例とす。此は教祖教の外的特質の最も發展せるものにして、形態に於て最も完備せるものなり。

第二節　諸態の小評

一教内に此等諸種の信奉態度存すると共に、一人の態度亦此四者間に轉移するのみならず、多くは四者を兼具せり。蓋し四者兼具にして始めて教祖教の外的特質を完備せりと云ふべきか。たゞ人々によりて多くは四態中の何れかに偏せるは蔽ふべからざる事實なり。四者各々其特性を有し、何れも向上の一路たるに足ると同時に、其間亦甲乙なきにしもあらす。

戒律教は教祖教中最低の形態ならんか。嚴肅敬虔の情味誠に掬すべきものありと雖も、其根本義は上古の戒律精神即ち奴隷的服從思想にありて、嬉々悅樂の情趣乏しく、宗教的自在の氣韻を缺げり。此は幼稚なる人々の信仰態樣にして、詮力なき事ながら、釋尊及基督などの遺教としては餘りに低く、偉人の志を沒する事甚し。其意義及使命は謹嚴の精神を養ひ、敬虔の情の苗代たる點にあり。此は教祖教の幼稚園か。何れの教門に於ても所謂正統派なるものは多く教義教乃至戒律教の風味を帶べり。

戒律教は進んで精神遵奉の態度となるを普通の順序となす、是れ一段の進歩なり。精神遵奉にして其機緣を得んには、終に教祖の眞精神を體得するに至るべし。果して能く爰に達せんか、祖法遵守は確に得道の一路たり。たゞ此に至りては、教祖教の外的特質は既に自ら脫落せるなり。

行動模倣の發足點は戒律格守の其よりも一層教祖の本意に近きものならん。此より分登りて教祖の精神性格の模倣に進まんか、其前途眞に多望なり。若し夫れ教祖の性格の根底となれるものに尋入り、此を自家の有となすに及ばんか、彼信者は爰に始めて教祖の天地に歩を着けたるなり。模倣教の進路正に斯くの如く、其歸着又斯くの如し。是れ確に向上の一路なり。たゞ一とたび此新天地に遊ばんか、教祖教の外的弊衣は既に〳〵其肩上に存せざるなり。彼の下根が末事に拘泥して其糟粕のみを嘗むるは、戒律遵守、行動模倣何れにも在り、悲しむべきなり。傍觀者或は、模倣の進歩を以て不遜なりとなし、教祖禮拜、戒律遵奉は行動模倣よりも猶一層敬虔の美德に富みて宗教らしき態度なりと評し、「教祖神のお眞似など思ひもよらず、たゞ歸依遵奉せんのみ」の心狀を以て最美なりとなすあり。されど說者果して自ら此に滿足し得る否。宗教事は人の眞劍勝負なり、單に詩美として眺むるよりも今一入眞摯なる取扱を要す。

教祖神祝にも樣々の程度あり。幼稚なる人々のなす處は一神として奉祀するの類にして、此は偉人の屢々遭遇せる愛嬌事なり。神人とせられ、或は然か自稱するは史上に珍らしからざる處。至上絕對者の權化出現となすこと、佛陀基督に於て其適例を見る。蓋し教祖證得到達の境涯は非凡絕妙なるにより、是れ到底吾人人類の企及すべから

ざる處なりとなし、其解釋を求めて終に權化天降りの結論に達するは、寧ろ自然の事たり。殊に吾人の情感は此等異常の人物に接しては、直ちに『神』てふ叫聲を發するなり。理智の可なり發達したる人々にても、教祖は卽ち人間至極の境涯に到達したる唯一聖者なりと斷じ、以て之に歸依するは有りがちの事なり。斯くて教祖は、御福授與者としてより靈的救主としてまでの、多種多樣の救濟者として渴仰せらるゝなり。祖名團體の起因爰に在り。

世代と共に人間情智の發達するにつれ、幼稚なる神視は次第に棄てられ、神視其物實に幾多の進化變遷を經たり。而して高尙なる神視は常に其以下のものを以て迷信となす。蓋し廣濶なる意義より云はゞ何れの神視も皆是にして、高低諸級の眞理を包藏すれども、若し嚴正なる判斷を下さんか、何れの神視も悉く非なり。唯一救濟者てふ事亦然り。神視の事の眞意義眞効果は別に他にあり。

此教祖神視の見解よりして正當に開け來る一結果は、吾人亦皆神子たり、佛性を具せりどの思想なり。神視の一事が其發展をなすによりて、人類をして其自性を正覺せしめ、其自愛自重を增さしめ、以て一般の人事に鴻益を與へたると共に、人類の宗教的天地を拓出せること如何に大なりしぞ。而して他の一効果は神觀の闡明にあり。此正

路に進來れる神視は宗教界の新風雲を起せし一大原動力にして、人類向上の一大機緣たりしなり。神視の一事は、其が模倣遵守の根底となりて間接に人類の宗教事を向進せしめたる以外、自覺の醒起と神觀の闡明との誘因順路として確に向上の一路たりし。遵奉、摸倣、神視の三路は皆其々の意義を有する須走り大宮口たり。同じ高峰の月は果して何物か。

世の宗教家及宗教學者中、教祖摸倣の態度の甚だ少なきに驚き、且は他教祖の併信が教祖教の外的特質の致命傷なるを怖れ、加之世公平なる態度が宗教的舊情熱を冷却すれども毫も新情熱新生命を釀生し來らざるに興醒め、爰に歩を回らして、『教祖神視、一救濟者の眞味を解せずんば所詮宗教たるに足らず』とか、或は『宗教は必ず三位一體信仰にまで達せざれば其精髓を得たるものにあらず』などと唱ふるあり。此等人士の信ずる處、若し宗教なる語に代ふるに『教祖教』てふ辭を以てせば、全然眞理なれども、『宗教』が絕對に然るものなぞゝ思はんは笑止なり。自教教祖をば如何にもして普通人類は勿論、他の教祖聖哲よりも異なれる意味の神人となさんとするは、實に人情の自然にして、同情の至りなりと雖も、しかも到底教祖教の皮殼に囚へられたるものたるを免れず。若し又卑しき黨派心を外にし、眞乎の性格に觸れ其風神に接して、是

れ絶對者の出現なり、活ける神たる外なしと斷ずるならんか。然り人は然か尊き者なり、しかも大宇宙乃至絶對者と同一視せんは嗚呼なり、吾人周圍の此小天地すら猶此等靈的偉人よりも精神的に偉大なり。主觀的評價者は未だ全一體の皮殼にだも觸れず。よし斯かる事を措くも、說者は基督と佛陀との關係を如何に斷ぜんとするか。神視の事や要するに吾人の曩に述べたる意義を外にしては迷妄たるを免れず。其見解は云ふまでもなく、其宗教的經驗としての價値亦至深至大なるものにあらず　此事眞乎の實驗者は必ず首肯するならん。況して此を教義的に頑守して以て他を異端視惡魔視するなどは、斷じて非なり。

教義教が人類の思想方面を開拓せし功績や實に著大なり、しかも教祖中心の思想系は到底一時的使命のものたるべく、宗教的生命及び思想の両者にとりて所詮謬妄有害たるを免れざるべし。教祖等懷抱の思想には、基督の神父觀、佛陀の解脫成佛觀等の如く千古を貫く大哲理を藏すれども、此を移して以て自家思想の骨子となさんとするが如きは、其事自身既に宗教の本義に戻れり。教義教の主たる使命は人々をして自家特有の思想系を作らしむる其豫備たるにあり。此點に於て是又向上の一路たるを失はず。一教の教義が實際に於て發展變更の跡あるは蔽ふべからざる事實なり。されど此は教

祖教の外的特質の忌嫌ふ處にして、不變更は教祖教成立の根本義なり。教祖教中に於て教義改變の活路を開くべしと說く者あり、若し論者の意にして、斯くして以て教祖教の外的特質を破らんとするにあらば是又可なり。されど若し眞に教義變更の可能を公然表向のものとなし得べく、此によりて以て教祖教を復活せしめ得べしなどゝ想ふならんか、此はあまにも短見なり、教祖教の本義に關し今一段の考慮を要す。

今人が宗教の思想的方面は當代までの知識經驗を材料とせる各自の宇宙觀乃至神觀及び人生觀、即ち各自の不成文哲學なるべし。最も進步變移し易き思想方面に於て、既に劣敗せる成立教の教義を借來らんなどゝは、寧ろ滑稽なり。教義系成立以前の教義教、即ち教祖高僧たちの思想意識が人間の宗教的向上の一路たりしこと、否むべからず、是れ祖法遵法の條下に於て既に述べたる處なり。しかも教祖中心の教義系に至りては、教祖教の惡產物の一にして、人類思想の發展を妨げ、宗教的眞經驗を虐げ、史上慘たらしくも無辜の血を流したる所以のものなり。此種の教義教は是れ教祖教の外的特質の遺憾なく發揮したるものなれども、既に行過ぎて邪路に陷れり。

如上四種の態度即ち向上の四路は、其何れより進まんにも若し踏誤らずば以て彼の高峯に到るを得べし。而して其の何れよりするに拘はらず、高峯に登りて見れば外的特

質は既に離落せるなり。

第三節　内外の兩特質

以上教祖教につき小觀察を施したるに當り、慧眼なる讀者は既に其が二大特質を有せることを看取せしならん、内的特質及び外的特質是なり。

摸倣、遵奉、神視の何れにせよ、其原始的幼稚なる程度より發足したる者にして精進以て怠ることなからんには、彼は其一路の幾階級を經由して終に自家の妙境に達し、教祖の呼吸に參するを得べし。是れ信奉の諸態度が古今を通じて實驗したる處。然らば教祖教の眞意義は卽ち人をして低度の宗教的經驗よりして次第に高度の經驗卽生活に向進せしむるにあり。内的特質とは此謂なり。

教祖は曉を告ぐる山上の鐘聲、凡夫は此に覺まされ此に引着けられて己がじゝ阪路をたどる旅人。摸倣の極は無摸倣に至り、遵奉の果は獨立に達し、神視の終は自覺と融入とに入り、教義の末は自家思想系の定立に及ぶ。是れ一生の發達と二千年の歷史とが贏得たる經驗なり。此内的特質より云へば、教祖教の使命は卽ち人をして最早教祖教てふ梯子を要せざる高樓に上らしむるにあり。此は梯子なり、保姆なり、準備なり。

教祖教期以前よりの人類の宗教的經驗卽ち眞生命を繼承し、靈的偉人の感化によりて此を涵養上進し、以て獨力能く宗教的生活を營むに耐へしむ。爰に於てか、四路皆意義を發し、進化の妙用寔に吾人をして讃嘆せしむるに足る。

外的特質は全く此と異なり、人を捕へて飽くまで教祖の服從者模倣者小作人たらしめんとし、昧者弱者又此に罹り却りて得々たり。頑迷は千百の辯解を生みて、爰に人間の眞生命を束縛せんとすれども、自然の大法に逆らふもの如何でか世に榮ゆるを得ん。現に此種特質は既に弊履の如く世人の棄却する處となりつゝあるにあらずや。

此内外の兩特質につき、吾人は其何れを以て教祖教の眞意義眞使命を具有せるものなりとなすべきか。爰に至りて遲疑する者復一人もなかるべし。

内的特質は古來幾多の得道者を擧げ、外的特質は無數の人を沈溺せしめたり。義人を殺したるもの、文明を閉塞せんとしたるもの、唯一勝法と唯一救世主とを以て自任するもの、現未の主權者と僭稱するもの、自ら改悛を肯んぜざるもの、『宗教』をして第二義に墜ちしむるもの、老廢物となりて社會に厄介視せらるゝもの、現代の『宗教』を蔽へるもの、並に一切の害毒を流すものは實に此外的特質たり。

第四節　教祖教大觀

無量時間人類の宗教的生命が發展し來りたる後を承け、靈的偉人は絶代の高調に達せり。彼等教祖たちの本願は一切衆生が亦皆此妙境に到ちんことにあり、其最卓越せる者にありては人類各自が其天禀に應じて自家相應の眞生命を發展せんことをすら堅めり。自己證得の境を以て唯一の眞道となし、或は其教法を遵守せしめんとするが如きは、寧ろ第二流者の業なりき。是れ實に靈界の東天紅なり。されど一般人類の精神は未だ此を其のまゝ領會受納するまでに發達せず、或は此を精神的立法者となして其訓戒に拘泥し、或は天神の出現なりとして此を禮拜し、或は此を模倣し、或は直ちに其師の經驗に參入し、以て終に教祖教てふ一團體を成せり。上根下根各々其器に應じて得る處ありたりと雖ども、此等の態度は教祖の志望に劣ること萬々なり。しかも是れ發達の徑路にして、此階段を經由したればこそ人類の宗教は今日にまで進展し得たるなれ。則ち人類宗教の發展には此等の先達者と此に歸依傾倒するの信奉態度とを要したるにて、屈したるはやがて伸びんため、變則に出でたるは後正則に回らんがためなりき。

抑々今日より見れば、教祖教てふ宗教形態は奇怪至極のものたるなり。第一義生活、本來生活、極致生活てふ、萬古に通せる『宗教』の本面目に反し、當初よりして沒自、追從、同類禮拜、思想摸寫等の徑路に入り、一偉人に對する歸依が宗教事の至大本領となるなどゝは、一見不可思議なるが如し。しかも是れ當時社會の諸他方面に普く現はれたる事相にして、多數民衆が一貴族の奴隸となりて以て、沒自己の間おのづから此貴族者をして心身両面の高地位に達せしめ、後やがて自己等も又其跡を攀づる、無意識絶好の進化作用に外ならざりき。看よ人類史は、一切の人事が皆此徑路をたどりし事を歴々吾人に指示するにあらずや。變象は卽ち正象にして、人類進化の途は極めて迂曲錯雜なると共に亦極めて妙巧なり。現に一個人の宗教的進化に於ても又此跡の現はるゝにあらずや。今日に於て、教祖教てふ形態が所詮一變象に過ぎざる事に心附かざるなどは餘りに盲なり。しかも此變象は卽ち宗教進化の必須形態にして、偉人の崛起も祖名團體も神祠も寺院も皆大生命進化中の事相に外ならず。

過去幾千萬年の宗教史は此を原始期及教祖教期の二大期に別つを得べし。其餘の細別は學者に一任し、民族教期などは爰に看過せん。原始期の末尾、奉祀祭儀の特に重要視せられ、心性其物未だ宗教の注目點とならざる時に當り、大小の先覺は爰に心性の

上に至上生活即ち宗教を發見し初めたり。是れ實に諸他文明に於けると同じく、宗教が第二期を劃するに至れる特異點なり。しかも民衆が此を爲すや、其初め先づ先覺者其人の精神上に於てし、特に政權奇跡筋力等と精神との混同上に於てせり。此發展の趨勢を了解したらんには、教祖の奉祀、神祝、屈從、遵守等の態度中極めて原始的なるものも皆吾人の首肯し得る處たらずや。況して各路上の向上の極めて有意義なることと更に領解すべきにあらずや。

然らば教祖教は是れ畢竟準備的代辨的假攝的性質の者にして、人類をして自家精神中に第一義生活即ち宗教を樹立せしめんため、暫く先づ在外の卓越精神に對して以て其修練をなさしめたる所以のものに外ならず。至上者との感交此間に養はれ、見性此間に試みられ、宗教的生活と他方面生活との交渉益々此間に密接順正となりしなり。斯くて教祖教期修練の結果は當然個人教期を產出すべく、宗教は將に第三期に入らんとしつゝあり。然り教祖教期は所詮其當代に過ぎざりしなり。基督や佛陀やマホメットは愚か、ゾロアストル教も猶太教も波羅門教も佛教も基督教も黑住教も、否一切の教祖教期其物も畢竟時代の子に外ならずして、其性質は皆當時の諸他現象を彩りしものに過ぎず。

げに教祖教は其最も發達せるものにても、其が教祖教たるかぎり、到底封建諸侯たるを免れず。教祖教期は即ち封建時代にして、佛耶回波黑等が割據耽視しつゝあるは即ち教界の封建制度なり。封建の意義は領主の利益が一切施設の先決中心問題たるにあり、而して現時の各宗教は正しく此原則によりて起り、此によりて發達し、此によりて教門個人共に現に苦しみつゝあるにあらずや。一切の文明は殆んど封建の舊衣を脫せるに、獨り宗教事のみ此に困じはて、而も其當に爲すべき處を知らざるなり。教界の不振は此に起因し、宗教厄介視と無宗教との現況も此より來れるなり。近代文明が未だ殺風景たるを免れずして、且怪物の觀ある、是又主として未だ其中心問題即ち宗教を始末し得ざるに因る。

第四章　現代の宗教問題

混沌たる現代の宗教問題を解決せんため、吾人は先づ教界の現況を觀察し、併せて此に對する今人の解釋と處置とを顧みたり。然るに現況及其解釋とも両つながら混沌曖昧の間にありて、何等の光明と活路とを吾人に與ふる能はざりき。茲に於てか吾人は去りて大膽にも教祖教其物の特質を撿したり。是れ現代文明國の主要なる、然り殆んど唯一なる宗教現象は卽ち所詮教祖教に外ならざれば、其綜括的觀禁は或は吾人に何等解決の暗示を與ふるならんかと嘱望したればなり。果然、此特質觀察は吾人を益し、啓示闡明する處多大なりき。吾人は現代迄の諸教が教祖教てふ特殊現象なることを知り、而して是れ全く人類及個人の某期間を蔽ひ、其使命を果たすや否や解體離脱して以て新形體に讓歩すべき、一時的特質のものなることを看たり。斯くて吾人は、現時宗教界の萎靡不振なる所以は畢竟、人類の宗教事が第二期の教祖教期よりして第三期の個人教期に移る其過渡期昏睡期に在るが故なることを悟れり。吾人は此よりして更に、今人の宗教的戸惑の現況は要するに、此根本事を看破し得ざるに由來し、宗教家及學

者の識見言議の甚しく不徹底なるも、亦其眼光教祖教の臼巣外に出づる能はずして、『宗教卽教祖教』てふ陋見に捕へられ、其腦中別に『教祖教』てふ特殊觀念すら未だ明確ならざるに因ることを識れり。

げに『教祖教』てふ綜括的觀念は現代の宗教問題を解釋するに要する第一の鍵鑰にして、聰慧なる讀者は第三章を讀みて既に釋然たる處ありしならん。然り此鍵鑰の須要なるや、此を握らざれば啻に迷宮の扉を排して以て宗教的新天地新時期に移り得ざるのみならず、更に吾人の宗教的現天地が果して迷宮なるや否やをすら解し得ざる程なり。換言せば、今人は啻に其宗教問題を解決し得ざるのみならず、未だ其宗教問題の果して如何なるものなるかをも充分に摸索し得ざるなり。

今や幸に迷宮外に立ち、諸々の教祖教其物を一括して小觀察を施したれば、現代人類の當に解決すべき宗教問題の果して如何なる種類のものなるべきやは吾人の會得し得る處となれり。故に歩を回らして先づ吾人當面の宗教問題其物を檢せん、而して其主要なるものは蓋し左の數者なるべし。

一、今日諸教の等しく衰微し來れる原因如何。

二、諸教が甚しく弊害に富み、自他共に此がため惱みつゝある其故如何。

三、諸教は果して復活すべきや否、其の千百の積弊は如何にして刈除清掃せらるべきか。

四、人類將來の宗教は果して如何に成りゆくべき者なるか。

五、宗教の要否如何。

六、宗教にして若し今後益々必要となり、又益々發展すべきものならんには、其は果して如何なる徑路と變化とを經由すべきなるか。

七、今日に於て教界窒息の姿あるは、今人の宗教觀に於て何等か非常なる迷誤存し、そのため局面の開展を妨げつゝあるなきか。

八、近世文明の不具なるには、宗教は果して如何なる關係を有せるにや。

九、人心其物並に社會文明其物に對する宗教の地位果して如何。

十、宗教と道德との關係如何。

十一、宗教と教育との關係如何。

十二、宗教と經濟との關係如何。

十三、宗教と社會の諸制度諸現象との關係各々如何。

若し夫れ一教一派に限りたる問題に至りては其數何ぞ計ふるに暇あらん。將又所謂教

學問題乃至神學問題なるものに至りては、純粹科學的歴史的研究に委すべき部分を除くほか、多く各個人の宗教の思想方面に屬すべく、隨つて各人宗教の内容として別に思議すべきものなり。されど要するに、此等瑣末の問題は多く如上の基本的問題の解決と共に飛散すべき性質のものにして、今日猶此等末事に齟齬たるは、恰も王政維新の期を覺らずして　依然一小藩内の政爭に熱中し、やがて無臺其物の崩壞に駭くの類のみ。或は又、吾人が宗教の形體を云々するに懸らずして、是れ畢竟宗教問題の精髓を逸せるものなりと斷ずるが如きことあらんか、此はあまりに性急なり。

第五章　一段の解決

一とたび教祖教の朽皮外に脱出するや、現代當面の宗教問題の果して如何なるものなるか、將又其解答の略々如何樣にして與へらるべきものなるかも、稍々吾人の領會し得る處となれり。今『教祖教』てふ第一鍵鑰を握り、一段の高處に上りて、現代の宗教問題に若干程度の解決を試みんか。僭越の罪は固より免るべからざる處。

（一）今日の宗教的論爭は敵味方共に多く『教祖教』の特質に欺かれたり。彼等は教祖教以外の宗教形相をば夢想だにする能はず、彼等にとりては宗教とは即ち教祖教のことなり。斯くて各教信徒は教祖教の特質に伴なふ凡百の弊毒を受けて毫も悟る處なく、局外者亦此を以て宗教の常態となす、共に謬れるかな。自教是れ即ち唯一眞教なりとの觀念、幷に此より生ずる無數の害毒殺戮は即ち教祖教の特質より來るなり。自教教祖は即ち無比の神人にして、現未両界を支配すとの思想、幷に此より叢生する幾多の教義、及び大教義系は是れ教祖教に特有の迷信なり。教祖中心の教義系など、此を過去のものとして視んは可なり、しかも此を以て自家思想系の基礎となす

んなどゝは愚の極にして、精神的自殺なり。況して爰に自家の眞宗教を建立せんなどゝは非宗教の極なり。而して今日の所謂宗教信者なるものは此狂妄を敢てし、且つ却りて他を蔑視し、他を救はんとする者なり。三位一體の教義を今日猶由庇せんとする陋劣頑迷の宗教家あり。其が佛耶等優等宗教に通ぜるを見て、是れ宗教の極致又必須資格なりと斷言して憚らず、却りて己れ又教祖教の特質に致されたるを悟らざる、淺薄なる宗教學者あり。三位一體の教義の時代後れなるを喋々するは其人却りて時代後れなりと唱へて、盲學者の後塵を拜する盲信者あり。此等に對して又一方には宗教無用論を唱ふるあり、無宗教を誇るあり、宗教を蔑視して得々たるあり。前なる者が教祖教の特質に欺かれたる如く、此等の人々も亦教祖教に蔽はれて以て『宗教』を認知する能はず、相率ゐて邪路に陷れるなり、悲しむべきかな。諸教の利弊を較量して以て其の今日に無用なるを認むるは可ならんも、『宗教』其物の無用を唱ふるなどゝは思はざるの甚しきなり。何れの教派にも屬せざるは寧ろ今人相應の態度ならんも、此を以て自己の眞宗教を忽にし、無宗教を誇り、宗教を蔑視するなどゝは沙汰の限りなり。

（二）人類宗教の三轉。

人類の宗教は第一期の祭祀期よりして第二期の教祖教期に移り、今や第二期の終末に

際して弊衣は既に肩を辷りたれど、人々未だ新衣の果して如何なるものなるべきやをすら夢想し得ざれば、或は徒らに襤褸を繕はんとし、或は其無用有害を罵り、或は其の破れ衣なることをすら覺らず、或は自家の綴錦を他にも强ひんとするなり。されど大勢は定まり、趨向また自ら明なり。吾人人類は既に宗教の第三期に歩を進めたるなり。今は唯速に其の然る事を自覺し、以て正々堂々第三期の妙好天地に驀進し此を開拓すべきの一事あるのみ。今後の宗教事が常に個人教期なるべき事は、恰も第一期の祭祀期たり第二期の教祖教期たりし、過去の事實の的確なるが如くに的確なり。吾人は明治てふ面白き時期に生れあはせたる如く、亦實に人類宗教が千古未曾有の一大飛躍をなすべき回轉期、所謂近世文明てふ一大花輪が其最後の一瓣を展へて以て徐ろに花の姿を整へんとする其刹那に逢着せるなり。快絶、しかも多幸の兒等は亦最責任重く苦勞多きなり。希くは共に宗教の第三轉の後押しせんかな。

（三）諸教衰頽の眞因。

佛教の頽廢を見ては僧侶の罪に歸し、歐米に於ける基督教のだれ氣味を見ては此れ物質主義科學主義横行の影響となし、やがて寶冠再び教會上に輝くの黄金時代來るべしと空頼みし、我邦に於ける基教受容の遲々たるを見ては是れ愛國心及偏智性の妨ぐる

處、且つは歐米人の如く精神的罪惡の觀念が深からざるためなりとなすは、今人普通の解釋なるものゝ如し。爰に於てか僧侶を醒まして軍隊慰問、日曜學校、青年會、諸種の演說會などゝ彼此經營奔走せしむ。佛典の時文譯を迫るあり、妻帶を勸告するあり、諸派の聯合協同を謀るあり、人材養成を叫ぶあり、教義變更の要を說くあり、當局刷新の急を迫るあり。此等皆可なり、しかも此等一切を擧げ得たればとて此を以て佛教衰頽の大勢を挽回し得べしと想ふならんか、此はあまりに樂觀に過ぎ、あまりに短見なり。基教の事亦然り。佛と云はず耶といはず、波羅門教も回々教も皆一齊に衰運に赴き、皆共に筍皮の如く脫落しつゝあるなり。是れ豈一教一派に適するが如く見ゆる小解釋と小手術との能く解決し得る處の大勢なるべけんや。吾人が屢に第三章に於て此を見たる如く、佛教の衰勢の眞因は其が佛教たるにあり、基督教退轉の主一原因は其が基督教たるにあり。即ち一切諸教は其が教祖教たるかぎりに於て、教祖教たる基本性質を脫し得ざる限りに於て、必然衰頽すべき運命を有せるなり、而して今や特に其外的特質の瓦解すべき時機に際せり。

人類の宗教的生命が教祖教てふ形相下に發育成長せること爰に二千年、蛹は化して將に蛾とならんとしつゝあり。蛹たるの特質が漸次其勢を失するも、其のため惰眠期に

入るも、其が轉化の際の苦痛を感ずるも、皆是れ自然の大勢にして、盲目的解釋と小施設との如何ともすべからざる處なり。然らば即ち諸教の衰頽は是れ人類の宗教的大生命が一大發展をなさんとするの徵候にして、極めて悅ぶべく又視すべき現象たり。諸教總懸りの二千年間の覆育養護は即ち人類をして此丁年期に達せしめんがためなりしにあらずや。諸教の全使命は此に集中せしにあらざるか。諸教自ら此大使命のために起り、そのために勞し、そのために斃え、而して其勤勞の結果として愛兒は獨立獨行し得るに至りたるに、老婆自ら其頽齡を嘆き、再び親權を回復せんとし、事の成らざるを見て末世澆季を唱つ。こは餘りに愚癡なり。何ぞ大勢を達觀し、自家の本質と使命とを顧み、其志成り功遂げたるを歡び、潔く勇退高蹈せざる。

加之、廢るものは諸教の外的特質にして、其內容經驗に至りては是れ人類の至寶、永遠に發達成長すべきものなり。則ち諸教の衰頽は、其が教祖教てふ特殊形相下に死して、個人教てふ新形相下に復活すべき事を催告しつゝあるなり。天下の宗教家中果して一人の、此大勢を看破し此大命に應じ、以て宗教の眞發展を助け、宗教家の本分を盡す者なきか。當代に於ける豫言者の業は此にして、宗教家の眞使命亦爰に在り。若し夫れ當然行詰まりたる諸教の彼此點を捕へて此と情死するが如きことあらんか、是

れ畢竟皆殊勝なる賣僧の班に墮つる者、其教の眞義に反し、卿等の信ずる神佛に背く所以にして、畢此より大なるはなし。

（四）諸教の不可改變の性質。

（五）諸教が弊害に富む所以。

諸教の通性は吾人の既に第三章に於て視たる處にして、此によれば不可改變は其成立の根本義より生ずる先天的性質たるなり。遵奉、摸倣、神視、教義信受の四態、何れか是れ不可改變の異名にあらざる。げに教祖教は其教祖教たるの特質よりして、即ち教祖中心の宗教態度よりして既に不可改變を前提豫告せるなり。これ恰も上中世を通ぜる僧長制度封建制度が又宗教界に現出せるに外ならざるなり。諸態度の緩嚴の程度こそ異なれ、又諸態度間の轉移こそあれ、不可改變は諸教の必至條件にして、其變更は皆外間の壓迫に強ひられ幾多頑抗の後始めて遂行せしめられたる處なり。故に若し不可改變の頑態を咎めんと欲せば、先づ諸教が教祖教たる事其物よりして咎めざるべからず。また不可改變の特性を改めんと試むる者あらば、その教義上經驗上何れに於てするに拘はらず、是れ直ちに教祖教の根本義に斧を揷む者にして、徒勞か、其教の破壞か、乃至其教の大死一番的復活即ち個人教化かゞ其報酬なるべし。

既に不可改變を以て其本性となす、諸教が千百の積弊に富み、自他共にそれがために苦惱するは當然のみ。祖法乃至原始的生命が次第に發展して、諸枝諸葉を現出し、一轉また一轉、諸種の方面を發揮し來る事はあり。是れ一教祖教當然の發展成長にして、佛教は殊に其摸標たるに足れり。しかも其幾發展も到底教祖乃至祖法の外に出づる能はず、自縄自縛、徒らに古人所達の範圍内を彷徨す。將又必迫に促されて教義思想の變化し、以て僅に窮地より逃出づる事はあり、歐洲に於ける天禮觀進化論生命觀等と基督教との折衝は此適例なり。基教の神觀また現に宇宙神觀に轉ずべくして今猶最後の死守をなし、一方に陋態を現すると共に、該教信徒自ら其神の甚しく力弱きに困じ、此よりして生命を亨くること甚少なし。一二の事例に就いて看るも斯くの如し。諸教が其の先天的特質よりして既に自覺せる凡百の弊害をすら矯正改善する能はず、しかも又其究竟原因に想到する能はずして、みす〳〵人類の大生命に後れ、此を阻害控束するは固より其處なり。西洋文明の輸入に反抗せんとし、事、爲政者の直接經營なるが故に僅に其の鋒を收めたる者は漢學者と佛發家と神道者なり。人類をして今日猶太神話をば、然も宗教的敬度を以て信奉せしめんとする者は舊派の基督教なり。歐洲の新思想と新文化と新施設とを壓伏せんと試みし者は常に基督教なり。埃及と印度とは

宗教的泥海に沈溺し、西藏は其宗教的皮殼によりて美伊乃とならんとす。看よ社會の諸現象中、宗教界ほど大古以來の廢物を蓄藏せるはなし。最も精神的にてありながら最も虛儀空文に拘泥するものは諸宗教なり。其他千百の弊風陋態は現に吾人の眼前にあり、一とたび寺院と教會とに詣らんか、爰は固陋陳腐其物の陳列場なり。而して此等百弊掃清の困難なる因由は吾人既に此を領會せり。

人或は云ふ、科學は進歩的にして宗教は保守的なりと。されど是れ未だ肯綮に中れるものにあらず、此は既に近世式となれる科學と依然上古式中世式なる教祖教的宗教とを比較せるの言にして、說者も又未だ宗教の眞相を看破せざるなり。上古中世に於ては科學も又保守的なりしにあらずや。但だ說者の言も又教祖教の特質と其餘弊とを道破せる點に於ては、其當を得たり。

（六）諸教の思想方面即ち教義の常に世に後るゝ所以。

是れ古人の宇宙觀人生觀を以て今人を律せんとするもの、甚しきは神話的物語を以て各人の思想系の骨子となさんとするもの、極端なるは教祖中心の思想系を以て不條理にも人を欺かんとするもの、其が到底日進の人智に後るゝは當然の事なり。教祖教てふ根本義既に停滯不進を意味し、その思想方面に現はれたる教義系亦固より進歩漸明の理に反せり。故に今日に於て諸教の所說が多く陳腐滑稽の感ある、素より其處なり。若し教祖教の根本義に反して、獨り教理をのみ改善進歩せしめんと夢想する人あらば、彼は先づ教祖教の教祖教たる根底よりして改造革新せざるべからず。彼は先づ自家の主張其物の意義を反省再思し、併せて教祖教の特質を精察するを要す。

今日よりして見れば、最近三四十年間に於て基督教の組織神學の興らざる所以も明瞭にして、教祖中心の組織神學の、以て人を滿足せしむるに足るものゝ未來永劫復起るべからざる事も亦吾人の保證し得る處なり。教祖教の假攝時代は永しなへに逝きつゝあり、其假攝の變象をば萬古の眞理として證明せんとする辨證の到底益々不條理不成立となること、自明の理にあらずや。

（七）大小の卒業者。

今日に於て教會寺院よりの脫落者の甚多き事は世人の須らく注目すべき處なり。生意氣者流が生嚙ぢりにして諸教を去る、是れ固より不可なり。しかも此にすら猶諸教の側に於て責むべき處甚多し。斯かる輕佻者流を措き、眞面目なる修業者に就いて見るも、彼等が某々教を卒業すべきは寧ろ當然本來の事にして、吾人が曩に見たる如く、是れ教祖教の特質の然らしむる處、又人心自然の發展の豫期する處なり。教祖教の本

質及び其意義使命にして既に、摸倣よりして創始に至らしめ、遵奉よりして獨立に進せしめ、神祝よりして自覺と融入とに導き、教義信受よりして自家思想系の定立に進化せしむるにあらば、眞面目なる修業者が某々教を卒業するは至當の事にして、一切の教祖教は此卒業生を以て其誇となすべきにあらずや。然り眞乎の修業は此卒業後に始まるべく、個人にとりても又人類總躰にとりても、一切の教祖教は宗教の幼稚園に外ならざるなり。然るに今日猶一教祖教内の小天地に離離して宗教の眞天地に想到する能はざる者は憐むべきかな。

（八）今日の諸教は既に其至力を盡せり。

佛教の諸分派が極めて摸本的の開展を遂げたる、基督教の傳道法が有らゆる手段を講じ盡したるを始めとし、諸々の教祖教は殆んど其資質長所を發揮し盡したり。諸教は既に其稟賦使命に應じて爲しべきを爲し、遂ぐべきを遂げたるなり。しかも其結果や今日に於て諸教の凝固沈滯頽廢を來たせるなり。既に教祖教の意義及使命を解せる人々より見れば、弊衣の脱離、爰に何等の不思議存せざるなり。今更死骨に肉づけんとする物好き者は其意のまゝをなして自ら慰むべきのみ。

（九）他教併取と教祖教の本義との矛盾。

既住の諸教が他教を蛇蝎視したるは勿論、今日に於ても猶他教兼攝は宗教家の忌嫌ふ處なり。最も寛大忍辱なるべき諸教が最も偏狹猜介にして、互に嫉視敵對し、却りて世間の光明に照らされて僅に諸教間の寛容を認知せるが、教界の現狀なり。此事一見不思議なるが如きも、諸教成立の根本義は其封建精神に存するなれば、現代に於て獨り中世文明の紀念物たる諸教が近世文明の精神に説諭受けつゝ僅に其敵視の陋態を慎むの變象も、又毫も怪むに足らざるなり。基督教徒が今猶他教兼修を忌み、また清澤氏の如き人にてすら猶一言基督教の長所に及ぶなき、是れ皆教祖教の特質に囚へられたるものにして、一教祖教の立場より見れば純正なるものと評すべく、『宗教』の立場より見れば卑陋迷妄なりと評すべきなり。此際諸教信者の執るべき途は唯一あるのみ、即ち教祖教の形骸を捨てゝ以て自己特有の宗教を展來るにあり。

（十）宗教機關が世の厄介物となり、輕侮せうれつゝある所以。

我國の實例を顧みるに、賣卜、巫祝、神主、御籤、狐落し、方位、お守札等は是れ第一期の宗教機關の遺物にして、第一期相應の愚民間に用ゐらるゝのみ。此等のものが今人の尊敬を繫ぐ能はずして、迷信視厄介視せらるゝは當然なり。此と同じく、既に今人の宗教性に對して不適當となれる第二期教祖教期の某々機關が無用の長物とな

り、しかも強ゐて存在せんとするため遂に種々の迷惑厄介を國民に及ぼし、爰に厄介呼ばりゝと乞兒視とを買ふに至るも又自然の數なり。十萬の僧侶が概して長袖の乞兒となり、僅に葬送讀經によりて其命を繋ぎ、存在の理由の甚弱さよりして終に迎合媚諛以て辛間の地位に墜ちたるも、是がためなりき。今日の牧師傳道師が既に我邦に於ては最苦しき地位に陷れるもの、又不適者の強ゐて生存せんとするがためなるに外ならず。此を以て單に草創の際資給意の如くならざるの普通原因にのみ歸せんとするは、謬見たるを免れず。

（十一）新宗派及び新宗敎。

幾多の新分派新運動が基督敎内に簇生すること、幷に其所以如何は吾人既に第壹章に於て此を見たり。而して如何に此等が新出するも、其の敎祖敎の特質を脱せざるかぎり、到底敎界を振興刷新するに足らざること、既に〳〵讀者の諒知せる處ならん。つら〳〵近代に於ける基督敎界の趨勢を顧みるに、其諸種の新運動の間自ら二種の傾向あり、一は復古的活動的にして、他は進歩的思想的なり。前者は吾人が曩に評して以て『神經過敏』『運動宗敎』と云ひし處のもの、後者は即ち所謂進歩派、新神學等の名稱が代表せる處にして、主として經驗に於て基督の意識に參せんとする者と、敎義に於

て唯一神の信條のみに據らんとするユニテリアン一派とは其極端の代表者なるべし。主として基督の意識に參せんとする者に至りては、經驗的敎祖敎の至上態度に達せるものなるべけれど、意識經驗の追從摸倣はやがて自覺のみの摸倣となるべく、更に進んで聖者の摸倣すら猶既に宗敎の本義に反せることを悟るに至るべし。神父との靈交狀態に倣はんと云へども、此は本來各人の宇宙觀と至上絶對者に對する交通狀態との異なるによりて各自異なるべきものなり。加之、今日の基督信者の神交は概して薄弱無力となれること、恰も其神觀の曖昧不的確となれるに比例し、寧ろ敎外の輩の靈的生活に及ばざるもの多し。ユニテリアン一派に至りては是れ敎祖敎の特質の最も稀薄となれるものなれど、其が猶敎祖敎たるによりて、敎祖敎的信仰力の活躍することなく、さればとて個人敎的新活力の出でんやうもなく、最も弊害少なきと共に最も無力なるものなり。是れ敎義的敎祖敎の改善進化の行詰まりにして、宗敎事に心を潛むる者の細心留意すべき、極めて面白き現象たるなり。『唯一神』との唯一つの信仰個條のみを立て、敎祖敎の一要件たる『同一信仰』をば極度まで減少せり。しかも其が猶同一信仰の上に成立せるにより、よし基督をば殆んど冷遇するに拘らず、依然一敎祖敎たるなり。既に敎祖敎にてありながら敎祖敎の特質をば成るべく減少し、僅に一個の信

餘上に立たんとす、其の力なく生命なきは當然の事のみ。是れ吾人の注意すべき點なり。

基督の經驗意識に參加する事と唯一神のみの信條とが、その弊害極少なるに拘はらず、甚しく活力に乏しきに驚き、人々は又飜然舊巣に回りて極度なる獨斷的唯信的態度に立戻らんとす。是れ畢にニウマン一派の徒の行跡たるのみならず、實に現教會内一方の潮流たるなり。此等の人々の裏裡には眞に同情すべき處存し、又彼等の執るべきところ此他に方途なきに似たれども、要するに今の時、今の人に對して不相當なる古人の經驗を反復せんとするもの、成熟よりして幼稚に立戻らんとするものにして、到底今人の宗教性を滿足せしめ得ざる事明白なり。若し夫れ宗教にして教祖教の外なく、教祖教は卽ち人間の宗教的經驗の全天地ならんには、唯一神及び意識參加の極端にまで達し、而かも其無爲無力なることを發見したる者の就くべき道は復古的反動的唯信的のもの丶外なからん。されど此等は所詮宗教を誤解せるもの、教祖教の特質と其使命とを悟らざるもの、當に卒業すべくして又後戻りせるものにして、隨つて其執れる方針の全然誤れるも無理ならじ。

意識參加と唯一神の唯一信條とは是れ卽ち教祖教の行詰りなり。若し教祖教の諸弊を

脫せんとして爰に進み、しかも其無力殺風景なるに驚かんか、吾人の當に執るべき途は、其意識參加と唯一神信條とをも徹去するの一事あるのみ、卽ち教祖教の殘壘を去りて本來の宗教的天地に逍遙するの一事あるのみ。是れ教祖教の舊天地廢たる丶處に個人教の新天地の自然に具はれる、其妙配劑に循ふ所以の順正行動たるなり。

教祖教内の新宗派新運動なるもの丶意義性質と其運命とを窺知せんため、特に基教内に於ける近時の趨向に就いて觀察したるに、其結論誠に以上の如し。此は直ちに移して以て佛教近時の新趨勢上にも當つるを得べく、殊に其過去を說明するに足れり。然らば吾人の觀察の豐富となれば成るほど益々、吾人が前に云へる概論——如何に新宗派新運動躍出せんとも其が教祖教の特質を脫せざるかぎり到底、教界刷新復興の大業をなし得ざるべしと云へる言の益々精確なるを證するなり。

所謂新宗教なるものに於ても亦同じ。人或は天理教の勃興を見て其組織制度の側に於ける特長を喋々するあり、或は近世科學の結論を以て新宗教の思想方面を摹成せんと夢想するあり、自ら神佛神人を以て居らざる輩と雖ども猶新基督新佛陀の降臨を希ひ以て新宗教を切望するあり。されど此等一切の夢想家ももはや皆、教祖教としての新宗教を期待する事の甚愚なるを發見すべきにあらずや。彼等の宗教觀の誤れるため、其

嘱望は皆有られもなき方に走りつゝある事、既に判明せるにあらずや。げに今日の宗教問題は、日蓮宗と眞宗、天主教と組合教會の優劣如何にあらず、佛耶黒の何れを撰むべきかにもあらず、新宗派にあらず、新宗教にあらずして、其主要唯一の大問題は實に『教祖教かはた個人教か』の一事にあるなり。此の現代主一の重要問題に比すれば、前數者は皆皮相的にして蝸牛角上の小詮義に過ぎず。彼等は皆過去の問題なり、中世紀の餘響のみ、決して今日の活問題にあらず。

（十二）『宗教』は益々發展すべし、されど其形態は一變せん。

以上諸問題のほか尚『教祖教』てふ第一鍵論によりて自然に解決せらるべき問題多々あらん。されど其多くは讀者諸君の解釋に任せ、爾餘の諸問題は更に『個人教』てふ第二鍵論を握りたる上に於て此に就くべし。たゞ爰に吾人の斷言し得る事は、人類の宗教とは卽ち其大生命の異名に外ならざれば、是は未來永劫衰微することなく、世代と共に益々發展向上すべき事是なり。以上諸々の教祖教の衰運を示せる徴候と理由とは是れ單に教祖教てふ特殊形相の廢頽を告ぐるのみにして、毫も宗教其物の退轉を意味するものにあらず。否、第二期の此特殊形相の解體脱離する其事自身こそ眞に宗教進化の一大徴候たるなれ。

（十三）自覺教か。

教祖教の本質を精査したる者は、諸教の內的目的の一は畢竟人々の自覺を醒起し、此より出發して以て大自在の生活に入らしむるに在る事を看破すべし。故に概觀したる處にては、諸教の極は自覺教たるにあるものゝ如し。尤も自覺教の語は決して自力教の義にあらず。若し自覺の曉、其微力爲すなきを悟りて上帝彌陀乃至大宇宙に全然依信せんか是れ他力教にして、若し又自覺の結果、自我と大宇宙との一如なることに想到し、爰に精進自修の途に上らんか、是れ卽ち自力教なり。諸教の眞意が自覺教たるに在りと云ふは所詮、第一期が主として權威を外界に認め此を發足點となしたるに次ぎて、第二期は人間の心性上に留意するに至り、此を立脚地として以て內外に開展するに至る、其準備期修練期なりと云ふに外ならず。第三章に於て見たる處の教祖教の諸特質は、歷歷此義を證明するにあらずや。

然らば今後の宗教は果して自覺教なるべきか。是れ未だ單に其發足點を明にしたるまでにして、其性質の全豹を蔽へるものにあらず。たゞ教祖教期と第三期との間が特に自覺の鬱勃生動すべき時期なることは吾人の首肯し得る處にして、近時の自稱神佛者及び見神者流は卽ち時代精神の泡沫として、好個教表徴たるにあらずや。されど若し

自覺教たるに止まらんか、是れ未だ現代の宗教問題を解決し得たるものにあらず、此は所詮一個の停留場たるに過ぎず。

第六章　宗教の新時期——個人教期

個人教の形態一班

今後第三期の宗教は第二期のものとは殆んど其形態及面目を一新せるものなるべし。而して個人教てふ語は最此に適當なる名稱ならんか。尤も吾人の所謂個人教なるものは、國家教乃至國立教に對して言ふ處の個人教なるものにあらず、又社會的公共的なるものに對して特に個人主義を皷吹するものにあらざる事勿論なり。はた又或種の學者が成立教 positive religion を大別して、歴史的宗教 historical religion 及び個人的宗教 personal religion の二となせる、其の所謂 personal religion にもあらざる事無論なり。所謂 personal reli ion は吾人が爰に教祖教と呼べる處のものに該當し、吾人の言ふ處の個人教とは全く其趣を異にせり。言語の類似上よりして誤解を招かんことを恐れ、特に一言す。さて吾人の所謂個人教なるものゝ性質は以下の筋書により、其面影を偲ぶことを得んか。

一、宗教てふ語をば祖法若くは祖名團體に歸することなく、各人の某樣の心性若くは境涯其物に宛つべし。

二、各人の宗教は其境涯に於ても其思想方面、感味方面、幷に性格及實行の方面に於ても、全然各自の本來特有のものたるべく、決して他借のものなるべからず。

三、古今の宗教的經驗は皆吾人の好資料なれども、此は所詮他人のものにして、我宗教たるを得ず。況して此に沒入し、此が門徒となるなどゝは非宗教の甚しきものなり。

四、人々は皆一樣に『我宗教』の熱愛者ならざるべからず、爰に一の例外あるべき筈なし。從來の諸教が自教を世界萬民に薦めんとせしもの、此眞理の先驅前影と見るを得べし。

五、各人の宗教は其の有らゆる方面に於て進歩發展すべく、決して絶對の極致なるものゝ存すべき筈なし。

六、各人皆其宗教を有すべしと云ふは、人間の生活は決して道義的社會的たるに止まるべからず、更に一歩を進めて此大宇宙乃至神明と呼吸を共にする處なかるべからずとの義なり。此意に於て宗教は萬人必須のものなり。世の宗教家が、人は皆宗教を

有せざる可からずと唱ふるは眞理にかなへども、若し何等かの教祖教に歸依せざるべからずとの義を含むならんには、今人にとりては寧ろ滑稽なり。

七、人間一切の云爲行動は如上の根本的境涯卽ち其宗教より來らざるべからず、更に一切の云爲行動其物が此境涯に達せざる可からず。此意ようせば、人間の云爲行動卽ち生活其物が宗教たるなり。但だ人の生活にして眞に宗教たらんには其が或程度の境涯に達せるものならざる可からず、卽ち一切生活が對人間以上の意義を有せるものならざる可からず。

八、以上の意よりして、人の宗教の成立及其發達には概して心物双方に亘れる素地修練を要す。故に今後の宗教は從來の如く徒らに唯心的、退隱的、形而上的、個人的を以て其本領となす可きにあらず。心身一切を籠め、社會一切を含みたる意味の生活其物にして、大宇宙を貫き或は神明に通じ或は全一體と一となる底のものならざる可からず。卽ち人の宗教は其學習經濟交際等云爲一切に貫通せるものなる可し。尤も此意は、從來諸教の見做されたる如く、一切生活に道義を輸入するの警察官たる義とは全然別物なり。

九、各人の宗教を養育するため、衆人の交通團結を要す。而して今後の宗教團體は

もはや一切宗教現象中の第一要義たるものにあらざれば、教祖教期に於けるが如く、其が特に宗教の名を借有することなかる可し。

十、今後の宗教團體は同一信仰のもの丶集合にあらずして、自他特有の宗教を熱愛する同志の徒の結合たる可し。これ第二期と第三期とに於ける宗教團體の相違する一特異點たり。

十一、個人と云はず團體と云はず、人は同胞の宗教性の醒覺上に責任を有すべし。而して今後の傳道なるものは自家の信仰を他に勸むるが如きものにあらずして、專ら同胞の宗教性を覺醒涵養し、此をして一個の宗教たらしむる事に勉む可きなり。教祖教と個人教とに於ける傳道法の主眼は大に異なる處あり、彼の主として傳寫なるに反し、此は培養成長を專とす。尤も傳道者聽聞者共に此培養成長の根本義を會得して、もはや單なる摸寫傳習に陷ることなきに至らば、傳道者は充分に自家宗教の內容を說く可きなり。

十二、第八項の趣意よりして、今後の宗教團體は同胞の心物両方面を顧慮するを要す。蓋し人の宗教性の覺醒涵養にも又其宗教の成長發達にも、心身両面の境遇は決して看過す可からざるものなればなり。

十三、故に各人及宗教團體は社會の諸方面に對する革新家たらざる可らず。今後の宗教團體の用務は、修養及傳道の半面を有すると同時に亦社會事業の半面を有せざる可からず。但だ此社會事業の語や所謂慈善事業の如き狹義枝葉的のものにあらずして、人間の境遇卽ち社會其物の改善全體を意味す。

十四、此によりて今後の宗教及び宗教團體は社會諸般の制度及現象と新規なる交涉關係を生ず可く、一切の制度及現象を其協同者又助手となす可く、又一切の制度現象の宗教化卽ち聖化向上に勉む可きなり。尤も此の宗教化及聖化の意は從來のものとは頗る其撰を異にし、決して奚に懲りたる連中の厭がるが如き所謂宗教的臭味のものにあらざる可し。蓋し從來諸教の內容は道義に偏し過ぎたり、是れ人類進化の某過程の產物なれば又是非もなし。たゞ今後の宗教化乃至聖化なるものは、道義化卽善化をも忽にせざる可けれど、更に美化眞化に主力を注ぐ可し、是れ宗教の本質上當に然る可き處。

十五、今後の宗教團體は從來の教祖教の如く、主として一二偉人の後影に從ふものにあらずして、其創始者は單に發起者たるに止まり、己れら埋め草となりて其上々に自家以上の人物を招請すべきなり。是れ教祖教と個人教との性質根本的に異なるより

して來る、自然の態度なり。世人は皆新宗教を翼望しながらも、今日相應の新佛陀新基督の果して生出し得べきや否やを懸念し、多くは教界刷新に失望しつゝありしが、新宗教以上の大革命は斯くの如くして遂行せらるべきなり。是れ近世文明の一大特徴にして、教界又此例に漏るゝ能はず。是れ偉人の業の平凡化せるにあらずして、凡人の偉人化し得る時期に達したるなり。尤も今後の宗教團體に於ても、偉大なる人物はど一層必要なること云ふまでもなし。但だ如何なる偉人も自教門徒を作るべからず、是れ反宗教の甚しきものなればなり。

十六、此正當公平なる地位より見れば、從來諸教の妙味珍肴は皆祖先の遺産にして、何れを賞翫するも吾人の意のまゝ。又此公平無碍の地に立ちてこそ始めて諸教の長所短所をも洞察し得べく、其眞味をも味はひ得るなれ。

十七、教祖教の純信徒は到底個人教的新團躰の仲間となるを得ざるべし。両者は是れ全然たる別天地なればなり。尤も一教祖教の信徒は其教を卒業して新團體の一員となるべき運命を有せり。是れ最正當なる發達方なり。

十八、若し從來の如く、一團體を以て某教と呼ばんには、此種の新團體も或は個人教とも稱せらるべし。されど宗教の語が今後は主として個人の生命若くは生活に轉ず

べき事は、後段此を明にする處の如く、斯くて宗教團體は何教の名を帶ぶるに至らざるべく、又然かせざるを可なりとす。予が第三期を以て特に個人教期と稱する所以のものは單に第二期を教祖教期と呼べるに對するまでにして、両期に於ては宗教てゝ觀念上に於て大なる相違あり。尚此事に關しては後更に述ぶる處あるべし。此邊の事、自任教祖連の再考を要す。

十九、今後の宗教團體は、其組織制度及運用の側に於ては近世式の帝國主義、軍隊主義、分業主義、實務主義の精神及運用に則るべく、其修養靜思研究の部分に於ては益々山中無暦日の悠悠を發揮すべきなり。此靜と動、世間と出世間とが両々益益發展して、相補ひ相助け、遂には複雜至極なること諸他の制度機關にも讓らず、急激繁忙なること雷電にも勝る處の、制度其物、運用其物が直ちに修養靜思其物となるまでに進まざるべからず。

第七章　個人教の論據（上）

第三期の宗教が略々如何なる基礎上に立ち、如何なる形態をとる可きかは、前章の筋書よりして讀者諸君の既に看取せられたる處ならん。各細目に至りては人々の所見必ずしも一致せざるべけれど、其大綱は蓋し識者の是認する處なる可し。人類の宗教が今後必ず個人教の形をとる可きことは、幾多の現象趨勢幷に理趣此を指示せり。今其重なるもの若干を擧げんか、(甲)人間の生命其物の性質此を保證し、(乙)一切教祖教の本性皆之を豫想し、(丙)教祖たちの眞意亦爰にあり、(丁)諸教の眞修業者此を首肯し、(戊)教界近時の趨勢又此に向ひ、(己)諸教以外の得道者此を證明し、(庚)宗教の本義此を促し、(辛)爰に大宇宙乃至神明の保證あり、(壬)人類進化の大勢此を要求し、(癸)併せて狹義且强義の『宗教』てふ觀念此を需むるなり。

第一節　人間の生命其物の性質此を保證す

教祖教の發足點が教祖なるに對し、個人教の立脚地は個人の生命其物なり。古人が看

て以て、基督特占の救濟、佛陀專有の解脫、宗忠一手の生々大道と做せし處のものも、今はより見れば是れ畢竟各人の生命其物の發展に外ならざること判明し、基督も佛陀も達磨もフランシスも所詮教師乃至機緣に外ならざる事また疑ふ可くもあらず。古人をして然か自教祖專有の如く想はしめたる所以は、一教一派の經驗のほか比較の對手なかりしためにも因るべけれど、其主因は寧ろ人心其物の性質に通せず、此に對する見解が根底に於て誤りしより來れるなり。此各自精神の發展向上よりしてぞ一切の境涯も思想も情感も救濟も解脫も皆得來らるゝにて、此等は皆各自精神の潛勢的に有するものが發育につれて實現せるに外ならざる事、今日はもはや常識の知了する處となれり。精神上の所得所達に關する古今の見解、斯く根本的に轉變し來りたれば、人類宗教は爰に其第二期形態よりして第三期形態に推移するに至れるなり。則ち教祖中心よりして個人中心の教勢に轉し來り、爰に主從本末を顚倒するに至れるなり。此見解の相異、是れ勿論唯一の原因にあちざるべきも、また一大動機たるに相違なし。更に吾人の注意す可き一事あり。各人の宗教的內容は人々の天賦と境遇と開拓と證得とにより各自特有の面目を呈すべき筈なり。則ち各自の宗教の思想方面は其經驗思索の結果によりて彼の得たる宇宙觀乃至神觀及び人生觀なるべく、其が人々によりて千

樣萬態なるべき事は、實際と理論との共に示す處なり。然るに教祖教は何れも皆之を同一思想系中に鑄込まんとするが故に、此間既に無理と虛僞とを豫想せり。況して最も日進月歩すべき思想方面に於て、二三千年前の古人の幼稚なる思想系を振翳し、此を今人に當候めんとするに於をや。現に諸教の教義と今人の宇宙觀乃至神觀及び人生觀とは、其懸隔齟齬あまりに甚しきにあらずや。其他情味方面并に性格實行の方面に於ても、又境涯其物に於ても理論及實際は其が百人百樣なるべきことを告げ、其の然る事が最も本來的即ち宗教的の現象なる所以を示すにも拘はらず、あらゆる教祖教は此を歸一せしめざれば止まざらんとす。此一事既に生命其物の本性が求むる處の宗教形態は個人教に外ならずして、畫一を原則となす處の教祖教は畢竟個人教期を準備するの入門に過ぎざる事を示し、且つ教祖教其物の懷ける宗教觀即ち古人の宗教觀の甚しく粗野なることを證するにあらずや。之を要するに、各自の生命が本來其れ〴〵特異の面目を有すとの一事は又、吾人を促して教祖教期を去りて個人教期に入らしむるなり。

第二節　一切教祖教の本性此を豫想す

一切の教祖教は其の如何なる形相態度をとるものにせよ、其本性及使命は畢竟人をして先覺者の崇拜神祝の間に於て、摸倣よりして自覺獨創に至らしめ、思想教義の假借よりして自家思想系の定立に及ばしめ、仲介者による接神よりして自家直接の感通靈交に達せしむるに在ること、既に第三章に於て吾人の認知したる處の如くなれば、一切教祖教の意義は所詮個人教を生出するの處に存すること、復疑ふべくもあらず。たゞ其外的特質が極力此に反抗し、世人又多く其内外両特質の存する所以を知らずして、其両極性間に彷徨逡巡すれども、今日はもはや迷より醒むるの時なるべし。吾人は一切教祖教の内的特質に循ひ、此に示され此に乘りて以て第三期に移るべきあるのみ。

第三節　諸教祖先覺の眞意又爰にあり

諸教祖たちが吾人をして稱嘆に耐へざらしむる一事は、彼等が多く個人教の思想を抱きし事是なり。『我姿また尋ぬるに及ぶまじ、たゞ天地に照渡るもの』と詠せし宗忠は、人々が皆其本來の面目を發見發揮して爰に到らんことを希ひしなり。『天照す神の御心人心、一つになれば生通しなり』と道破せる彼は、人々が自然の御道を修業せんことを望みしにて、左京は單に瀬踏み者を以て自任せしのみ。親鸞は衆人を遇するに常に

『御同行』を以てし、決して已が聖にはめこまんとはせざりき。釋尊の冀ひし處は衆人皆佛位に達せん事にして、人間固有の性能の靈妙なることを發見し、爰に自家教法の出發點を定めし點に於て其識見のほどを覗ふに足る。宜なり、佛教殊に其大乘教が諸教中最も教祖教の外的特質を蟬脱して個人教的天地に頭を出せる事の多き。とりわけ禪一派に至りては、佛に陷らず祖に媚びず、各自本來の眞面目を拈出することを主一の目的となし、以て最も多く個人教の領域に蹈込めり。

神人基督に至りては、『神の國は爾曹のうちに在り』と喝破して、宗教の眞義を明にせり。殊に『我が往く(死する)は爾曹の益なり』とまで斷言して、弟子共の直接神交を鼓吹し、その一年有半教養の曉、十二使徒すら猶摸倣崇敬をのみ事として自覺の眞諦に到らず、國人はホザナを謠ひて反羅馬の首領となさんとし、異邦の希臘人は單に其風貌に接せんことをのみ求むるを見ては、流石に自家の眞意即ち人々厠みて其の天國を取れとの個人教的願望の毫も會得せられざるに耐へずやありけん、『一粒の麥若し地に落ちて死なずば唯一つにて在らん、若し死なば多くの實を結ぶべし』と叫んで、弟子たちの摸倣を絶ち其自覺を醒ますためには已が死せざるべからざる事を漏らし、此を以て十字架に上る一理由となせり。世の基督信徒果して此眞意を解せりや。彼のソク

ラテスに至りては精神的產婆を以て自ら居り、孔夫子は諸弟子從遊の間各々其器に應じて此を大成せしめんと勉めたり。其他、各人の工夫鍛錬を主とする陽明、不言不語の間の體得修業を促す武士道等、一々列擧するにも反ぶまじ。

然らば知るべし、大聖等の主眼とせし處は各人の特自本來的の發達にありて、自家の尊信摸倣神祝などは寧ろ勉めて避けし處なる事を。若し眞に教祖教の產出を望みし者あらば、是れ既に第二流者以下の業なり。故に若し教祖たちの眞意にして幸に其儘行はれたらんには、世は直ちに個人教の代となり、世間また教祖教なるもの生れざりしなるべし。されど既に曩にも觀たる如く、當時の民衆は未だ大聖等の本願を領し、此に則ごり得るほどのものにあらずして、自家精神の程度相應に此をあしらひ、以て教祖教てふ現象を呈出せるなり。則ち教祖教なるものは何れも皆教祖の眞意本願の其儘實現せるものにあらずして、其人格及教法が一般民衆の寸法通りに取扱はれて生出せるものなれば、其發動者は一般民衆にして、其宗教的程度又當時の民衆の標準にかなへり。此れを人類史上に觀んか、民衆は教祖たちの宗教的本願を解し此に循ふに至るまでに二千年間の準備期を要せしなり、而して此間の宗教現象は即ち教祖教なり。二十世紀の吾人は、大聖等の素懷に循ひて個人教的宗教生活を營むべきか、將又此に

背きて教祖教てふ襁褓内に閉居すべきなるか。必ずしも諸教祖を以て究竟の典據となすにはあらざれども、しかも大聖等は緯度の通則を破るかの如くに四時皚雪を頂ける富岳にして、北漸の寒氣を豫告せるにあらずや。はた又諸教信徒、とりわけ其外質固執者は乃祖等の此本願に對して如何に處せんとするか。

第四節　諸教の眞修業者是を首肯す

何れの教門たるを問はず、眞乎に宗教的修業を積める者は殆んど皆自教の眞意が個人教たるにあり、隨つて今後の宗教事が將に個人教的新形態をとるべき事を首肯す。即ち彼れの修業の進むと共に何時とはなしに教祖教的形骸は脫落して、彼自身の宗教となり、更に彼自身が宗教と成るに至るなり。修業其物の性質よりいふも、人の生命よりいふも、又教祖教の本質より云ふも、此事は當然期待せらるゝ處たり。事の眞相を直言せば、――浮游者流が轉々變化するの非なると同じく、一教の外的特質に囚へられて頑信是れ事とする輩は、實は眞面目に其教の修業經驗をなさゞる懶惰者にして、彼が此眞劍の修業經驗を躬行せざればこそ何等の心覺手答なく、其のため僅に信條態度等の形骸を生命とし、此を頑守せるなり。然らば此種頑冥懶惰僞善の徒が自ら諸教

の弊毒中に彷徨する事も、又眞面目なる修業者等が漸次個人教的態度に進み、此を是認するに至る事も、吾人は皆其所以を領會し得るなり。

第五節　教界近時の趨勢また此を指せり

教界近時の傾向中先づ吾人の眼につく處のものは、諸教信徒多くみな人心本具の性能を認來り、自教も畢竟其啓發の一具に外ならざることを自識し來れる事是なり。是れ尋常一樣の事なれども、此を以て諸教が自教祖をば唯一の救濟神となし、自教を信せざれば到底淨土天國に入る能はずと主張せし舊態と比較せば如何。自教が主にして個人は從、教祖の恵福が本にして人々の成長は末なりとの教祖教氣質は、既に爰に頭殺せるにあらずや。

諸教間の寛容てふ事は又諸教の獨占主張を放擲せしものにして、此と同時に、人類生命が主にして自教又其一從者に過ぎざる事を自白せるなり。

昔は金刀比羅大權現を拜せんためには讃岐に詣らざる可らず、エホバ神を拜まんには エルサレムに上らざるべからざりし。然るに人類精神の進歩と共に神々は次第に抽象的一般的となりて、諸教信奉の神々も畢竟同一神の種々なる面影に外ならざる事次第

に承認せられ、更に啻に諸教の神々が同一物を指せるのみならず、此神や畢竟諸教無くとも吾人の交通し得る處のものなること明となり來りたれば、爰に諸教の根據著しく動搖せるなり。而して此傾向は即ち人々須らく自家の神を拜すべしとの個人教の新天地を拓成する一動力たるなり。

諸教信徒が經驗上よりして、信仰は自分のものと成らざれば駄目なりと唱へ、此を奬勵するに徵するも、教祖教的經驗の精髓が直ちに個人教を胚胎すること明かなり。基督教内に於ける權威の所在地問題は單なる空論にあらずして、實際長年月の間該教徒の頭を煩はせし活問題たるなり。羅馬法王は其が正統教會内に存することを說いて己自ら此を掌握せんとし、新教徒は聖書を以て其坐となす。近時特に頭を擡げたるは史的基督其人を以て此權威の所有主となすの見解なり。諸說皆一理あり、而して此等に對して近來又各信徒の經驗及生活其物を以て權威の所在地となし、斯くて教會即ち權威者なりとの舊見を正解せんとする說、次第に勢力を得來れり。今は此等の諸說を批評するにあらざるも、最後の說は即ち教界に於ける個人教的氣運を示す表徵にはあらざるなきか。

近頃教育思想の勃興するにつれ各教また人類の教化を以て自任し來り、此によりて以

て自家存在の必要を立證せんとするあり。既に自教を以て一個の機緣方法となす、是れ其事自身もはや自教の絶對的價値を唱へし昔時の信仰の顚覆を表示するものたると同時に、諸教にして若し眞に教化者として今日に立働かんと欲せば先づ自家の具足調べをなし用意萬端を整頓するの必至に立迫らしめ、爰に各教祖教其物の改善の氣運を促し、其外的特質及び此より生ずる千百の積弊を掃清して、其內的特質のまゝに進み、終に個人教を產出するに至らしむるなり。

今日諸教の信者は多く其教の教義及經驗中につき不都合なりと認むる處をば不問に附し、唯其の良好なりと認むる部分をのみ採用しつゝあり。是れ所謂教權なるものゝ甚しく忌嫌ふ處なれども、教祖教の範圍內にては又詮方なき處置なるべし。此一事の告ぐる處は何ぞや、他なし、世人は既に事實上個人教的生活に入りつゝあり、たゞ教祖教的以外の宗教生活を明確に認知し得ざるにより、全信條を信受するの正則なるに對し、自家は取捨撰擇てふ變則を實行せるなりと自認し、以て聊か憚る處あるまでなり。何んぞ知らん、彼の遠慮する其取捨撰擇こそ却りて正則當然の宗教態度にして、外教信受の態度こそ今日にとりては寧ろ豫備的變則のものなる事を。ともあれ此の自由取捨の現態度は即ち大勢推移中の一事相にして、其流勢の方向を示すに足るなり。

近頃宗教をば主觀客觀の双方に觀る傾向生じ來れり。從來我宗教と云へば直ちに耶佛黑等在外の宗教を指せしに對し、近時は此等の成立教をば別にして眞乎我內に成れる某物を以て我宗教なりと見做すに至れり。黑住宗忠の宗教と云ひて、所謂黑住教を指さず、宗忠其人の內なる宗教を意味するが如き、此一例なり。

此事や先づ識者間に行はれ、次第に一般の習俗となりつゝあり。佛教殊に禪一派にありては此事今更珍らしくもわらざれど、近頃特に此傾向の增し來りつゝあるは注意すべき現象なり。此現象は抑々何を意味するか。是れ宗教の正解が次第に得られつゝあるを示すと共に、其態樣の次第に變化しつゝある事を表はし、併せて吾人が速に個人教的新態度に出でんことを催告するにあらずや。

其他諸教の比較研究と云ひ、一教教義の變更の希望といひ、教門心の霽らざたる事と、いひ、宗教の眞髓を握れば足れりてふ多數の態度と云ひ、諸教が面目を一新して以て復興せんとするの切望といひ、教界を蔽へる一般悶々の情といひ、此等は皆人類の眞生命が教祖教てふ舊衣を脫して個人教てふ新衣を纏ひつゝあるの表徵ならざるはなし。

第六節　諸教以外の得道者此を證明す

所謂宗教界以外に於て、諸教の望む處の如き成道者甚多し。ソクラテス、プラト、二宮尊德、松尾芭蕉、王陽明、諸葛孔明、西郷南洲、中村正直、福澤諭吉、エピクテタス、大石良雄、スピノザ、老子、莊子、――數へ來らば殆んど際涯なかるべし。殊に近來此傾向益々甚し。蓋し宗教界の衰微によりて、其所產物が他の社會の產物に劣るに因るか。今日に於ては一般信者は勿論、其教師僧侶たる者の多くは外界の人物に比して優越せる處少なく、人格に於ても悟道自覺に於ても、將又宗教的生命の諸點に於てすら猶大概、外界の傑物に見下さるほどの懸隔を生せり。而して此等外界の傑物、必ずしも天禀の卓越せるものゝみにあらずして、實に教界以外に於て諸教の目指す處の目標に達する、修養の方途備はれるなり。しかも宗教界は其峻成に於て續々失敗し、其教師中にすら眞乎得道の士甚少なきに引きかへ、以外の修業者は着々成効して以て、遙かに宗教家を拔けるなり。

吾人は此現象をば果して如何樣に觀ずべきなるか。爰に吾人の看取し得る平明なる事實は、――

（一）、現在諸教の目的が世俗の目的ほども高尙判明ならざる事是なり。佛教諸派の教化目的が卑陋なる野心の上にある事は今日歷然たる事實なり。露骨に云はゞ現佛教は目的らしき目的、理想らしき理想をすら有せざるなり。基督教の宣教の目的が實際上、深き靈的人物を作るよりも單に信徒の頭數を得るに忙しきことは、又教門內外の具眼者の夙に認むる處なり。耶佛を問はず、よし眞乎に目的及使命を確認し、そのため盡瘁する者にても、其主眼とする處は、所謂熱信家を作り、戒律に觸れざるもの即所謂罪を犯さゞる者、祖法を尊信する者、其教門に忠なるもの、集會に精勤する者を作る等畢竟、至極の目的實果よりも其方便を目的とせるもの、上に彷徨しつゝあるなり。此に反して外界は何事によらず、其目的を明知して、直截に此に馳せつゝあり。篤道の士は其眞目的のため眞劍勝負の修業をなしつゝあるなり。故に眞人物を打出すこと、宗教界の能く及ぶ處にあらず。宗教界の混沌は、人をして徒らに其途上數歩の間に往還反復して以て日を暮らし、而も猶恰も大事をなしつゝあるかの如き謬想を抱かしめつゝあり。此眞僞両樣の修業、宗教界が甚しく劣敗する所以の一大原因たり。然り、今日の宗教家は其眞摯なる者にても多くは空を辯ちつゝあり、其業蹟の擧らざるは當然の事なり。

（二）、今一つ吾人の看取し得る事實は、現在諸教の教養方法が世俗の方法ほども適切ならず、迂遠極まる事是なり。その目的の甚しく下劣不明瞭なることは前既に此を

云へり、而してよし其目的の判明確定せるものと雖も、其の此に達する方法手段の甚しく拙劣迂遠なること、到底社會の他方面に比ぶべくもあらず。人間精神中最内的なるものなれば、勿論諸他現象の如く容易に其目的を達し得べくもあらざれど、さりとて現宗教家中の殊勝者にして眞面目に其教養法について熟慮研究したるもの、果して幾人かある。勿論宗教の教養法については他日此を論ずべく、爰には別に彼此云ふべき限りにあらざれど、單に其一例を擧ぐれば、――醫師は人身の解剖及生理を基礎學として其研究に浮身をやつすにあらずや、然るに宗教家は其最上なるものにして猶僅かに自教の要綱を會得し、此に若干の補助學科と他宗教一通りの素讀とを加へ修むるに過ぎずして、其眞乎の對象たる人心と世事とに至りては殆んど注意線以外にあり。是れ恰も傷寒論は愚か、若干の草根木皮の効能を知得して直ちに治療に取りかゝるが如き類にあらずや。廿世紀精神界の醫師は斯く不眞面目なり。此輩が人間精神を立派になし得んなどゝは、抑々期待する者の間違なり。此一事にて、宗教界の果して如何なる形勢にあるかを推測し得るにあらずや。一言に云へば、宗教界の教養法は全然中世式たるを免れず、爰に何等近世的の切實なる處を認むる能はず。而して此方法手段の事を考ふるにつけても、吾人は又今更の如く、諸教の目的其物が甚しく謬れること、

然り是れ太古中古の目的を其儘に踏襲せるものなることを回想せずんばあらず。

されど吾人が、教門外の成道者てふ事相よりして看取し得る處は、單に現在宗教の目的及方法の曖昧拙劣なる事のみにあらずして、此他に吾人の必ず看過すべからざる一大事實あり。何ぞや、既に諸教以外に於て諸教の眞効果以上の成績を收め得べしとせば、此に適する資格ある者は諸教以外に於て、諸教の弊害餘毒を蒙らずして以て、自家の眞修業を遂ぐべき事是なり。換言せば此一事は卽ち、個人教の可能なること、然り今日に於ては各自奮つて個人教に出でざるべからざる事を警告するにあらずや。

宗教は實に人生の必要事なり、吾人は所謂宗教家の誰人よりも一層切に此必要を感ず。されど宗教必要なりとの眞義は、吾人の既に見たる如く、各人必ず宗教的の生活に出で、以て眞人たるの責を全うせざるべからずとの意にして、必ずしも某々教に加入して以て其餘毒に與らざるべからずとの義にあらざるや明けし。斯く解してこそ吾人の宗教的要求は始めて首肯し得るにあらずや。宗教必要てふ要求と諸教加入との二事の間には天淵の相違あり。よし假に讓歩して、自家宗教の完成のためには悉く諸教の何れかに加入せざるべからずとするも、猶此両者は全然別物にして、目的と方法との區

別截然たり。然るに現宗教家は此懸隔を無視し、宗教必要論と云へば必ず成形教加入と同一事なりとなす、迷へるも亦甚しからずや。世人亦多く爰に誤れる處あり、宗教云々と云へば忽ち某々教加入の事となす、されど今や最早此夢より醒むべきの時來れり、醒めて吾人の當に取るべき活路發見せられたり。吾人は沈思正念、須らく吾人の眞方向に出でざる可らず。諸教内の修業者よりも教門外の修業者の方遙かに高所美所優所大所に達しつゝありとの事實は、修業の本位を各個人に移すべきこと、即ち宗教の本位をば各個人中に移すべく、諸教は畢竟其方便に過ぎずとの事を判然明瞭になし、以て一切宗教現象中に於て宗教的閉體乃至祖法を以て其の中心至要事となせし時代より、個人の成道を以て宗教現象中の中心至要事となす新時代に移るべきことを催告するにあらずや。換言せば、個人教を以て宗教現象中の中心となし、此に狹義宗教の座を與へ、以て宗教事の目的を明確にし、其修業の方法を適切有効にすべき事を促すにあらずや。是れ即ち宗教が第三期に入れるに外ならず。

由來宗教の革新は常に教門外より起來り、在來の諸教は此に敵對して暴横を極め、しかも眞理の新勝利、終に如何ともすべからざるに及びて、爰に始めて自ら開悟して轉移するか、或は劣敗者として排除せらるゝかを常とせり。今や教門外成道者の竣功は

即ち是れ當に現在諸教の變轉を促す處の東天紅にあらずして何ぞや。

今や、ソクラテスはよし聖人たりとも基督を信せざる故に地獄に墜つる外なし、故に吾人は必ず基督教を信ぜざるべからずと云ふ時代は過去に葬られたり。吾人は佛教によらず其弊を受くることなくして正覺に達し得るなり、基督教の害を蒙ることなくして神子たるを得るなり。世間には佛徒基徒よりも優れたる成道者即ち佛子神子の多きにあらずや。然らばよし佛教基督教又必要なりとの事を、其教自身の弊害自改の制約附にて許すとするも、必ず諸教に歸依せざれば修業する能はずとの主張は全然顚覆し了れるなり。況して教外成道者の優等なるの一事は、此制約附の許容をすら甚しく狹むるにあらずや。

吾人をして更に轉じて暫らく、諸教自身の主張の古來幾變遷を經來りし、其跡を觀察せしめよ。諸教最強の主張は、――自教若くは自教祖に依賴せざれば、以て眞人となる能はず、以て正覺を得る能はず、以て未來の樂境に轉生する能はずと云ふにあり。然れども斯かる主張の倒れたる事は今日もはや萬人の認むる處。將又斯かる主張の顚覆よりして大に諸教の鼎の輕くなれること、乃至少く

も一教内にて斯かる主張をなす頑陋分子は既に世外の閑所に追ひやられたることは、顯著たる事實なり。是れ諸教第一次の退却なり。

此に次ぐ處の主張は、自教は人類をして能く至上狀態に達せしめ得べしと云ふにあり。然るに此主張の虛僞なること又既に世の普く認むる處となれり。是れ諸教第二次の退却なり。

第三の主張は、――自教はよし人類運命の唯一支配者にあらず、又至上神明の唯一代辯者にあらずとするも、少くも諸教中第一等の教化者なりと云ふにあり。基教が佛教の欠點を數へ、佛教が基教の短處を擧げしは、正しく此主張をなす所以なり。而して回々教黑住教等亦齊しく斯かる主張をなして止まず。されど諸教が總躰に千百の弊毒を包藏し、等しく古物視せらるゝに至りては、斯かる主張は恰も村娘野孃が其研醜を爭ふに似て、會々以て自家の醜を露はし、自家の愚を告白する所以に過ぎず。今日はもはや斯かる主張競爭其物こそ力りて世人嗤笑の料となれり。是れ諸教第三次の退却なり。

是に於てか諸教又主張して曰く、――爾餘の諸教皆世の教化機關として必要なり、而して自教亦其一たるを失はず、とにかく諸教は世間必須の教化者なれば、此を忽諸に

附すべきにあらずと。されど顧みよ、教界第一の急要事は、諸教先づ自らを教化せざるべからざる事にあらずや。自らを救ふ能はざるもの如何でか他を救ひ得んや。然らば此最後の主張も、諸教現狀のまゝにては殆んど何等の請求權を有せざるにあらずや。現に世人は諸教によりして如何に教化せられつゝありや。此點に於ては、諸教中最も活氣に富める基督教すら既に檜舞臺の外に墜ちて、老廢を自覺せざるべからざるにあらずや。是れ諸教第四次の退却なり。

以上諸教自身の主張が次第に退却せるの事實は、恰も教門外の得道者の次第に增加し、且つ次第に優越となれる其事實と正比例をなせり。此事や卽ち吾人が教界の大勢を察し、其推移の趨向を鑑むるに當り、逸すべからざる好資料たるにあらずや。而して其の告示する處は云ふまでもなく、教祖教期の漸次過往さて個人教的天地が益々拓け來りつゝありとの一事に外ならず。

（一）、宗教とは即ち根底ある生活、深き生活の謂なり。

宗教とは根のある、一つかりせる生活なり、即ち深き生活なり。諸教を通じて浮游を厭ふも、また宗教信者より見れば世人が何やら根無草の如き感あるも、宗教事が特に多く典據教權を生ずるも、又最遲くまで封建制即ち教祖教制を保留するも、皆此による。其の根底の果して何處に存するにせよ、其が單に御都合主義、世渡り上手にあらざるは明なり。山河の神に依信するも、見性證得の修業に出づるも、共に一層深き根底を得んがためなり。或は彌陀の救濟に信賴し、或は八卦の開示に身を委ぬるも皆、此等をば人力以上の根底乃至勢力なりと認むるに因る。

深入りし、且つ深く生活せんとする此性向は人をして益々優等者たらしむる一衝動にして、人間に宗教的生活を營ましむる一動機たると共に、此性向其物既に一ヶの宗教性たるなり。此性向に循ひて營む生活が深遠なる意義と價値とを有し、宗教的尊敬を博するに足るは當然の事なり。而して斯く益々深入りする性向と、最深なりと信ずる處に樹立する生活とが、假攝代辨の性質を有する教祖教的態度よりも、直接自辨の性を帶べる個人教的態度を一入愛好するは勿論なり。即ち後者は前者よりも一層、根底

欠

MISSING

（一）、宗教とは即ち根底ある生活、深き生活の謂なり。

宗教とは根のある、一つかりせる生活なり、即ち深き生活なり。諸教を通じて浮薄を厭ふも、また宗教信者より見れば世人が何やら根無草の如き感あるも、宗教事が特に多く典據教權を生ずるも、又最遲くまで封建制即ち教祖教制を保留するも、皆此による。其の根底の果して何處に存するにせよ、其が單に御都合主義、世渡り上手にあらざるは明なり。山河の神に依信するも、見性證得の修業に出づるも、共に一層深き根底を得んがためなり。或は彌陀の救濟に信賴し、或は八卦の開示に身を委ぬるも皆、此等をば人力以上の根底乃至勢力なりと認むるに因る。

深入りし、且つ深く生活せんとする此性向は人をして益々優等者たらしむる一衝動にして、人間に宗教的生活を營ましむる一動機たると共に、此性向其物既に一ヶの宗教性たるなり。此性向に循ひて營む生活が深遠なる意義と價値とを有し、宗教的尊敬を博するに足るは當然の事なり。而して斯く益々深入りする性向と、最深なりと信ずる處に樹立する生活とが、假攝代辨の性質を有する教祖教的態度よりも、直接自辨の性を帶べる個人教的態度を一入愛好するは勿論なり。即ち後者は前者よりも一層、根底

生活即ち宗教の本旨にかなへるなり。

（二）、宗教とは本來の生活、
　　衷情に忠なるの生活、即ち眞摯なる生活の謂なり。

本來の面目が見性的宗教によりて尊重せらるゝは夙に人々の知悉せる處。虛僞假作が教界に蛇蝎視せらるゝに徵するも、また熊野の烏紙が人をして黑血を吐かしむるを見るも、宗教が眞摯なる生活たる事勿論なり。『神憑けて』眞實を保證し、大事は神前に誓ふ。而して根底ある生活と眞摯なる生活とは畢竟栖の両面たるなり。

本來的の生活を以て放縱なるものとなし、眞摯なる生活を以て律義偏固なる器械的生活となすの謬見よりして、世人往々此両者の背馳を云ふ。されど此は本來と眞摯、両つながら此を誤解せるものなり。本來とは劣情劣能の謂にあらずして、益々發展して益々優等となれる自我、益々清新なる自我の謂なり。此事、一切の生物即ち發展體にありては常に然り。眞摯にして若し器械的に外則に則とるの謂ならんか、此は眞摯の形骸、また死せる眞摯なり。眞乎の眞面目てふものは自我に忠なるの義にして、本來の面目を發揮し、衷情によりて進退す。故に本來と眞摯との合致したる處に於てこそ始めて両者の眞義は發見せらるゝなれ。

斯かる眞摯本來の生活が、不條理をも強ひて信せしめんとし、他人の經驗を傳習反復するを以て最上の能事となし、何やら甕中に入りたるが如き感ある處の教祖教的生活よりも、赤裸々にして自感自得、清新なる呼吸をなす處の個人教的生活を撰むは勿論の事なり。げに後者は前者よりも一層眞摯、一層本來なる生活にして、宗教の本義にかなふ事一層切實なり。

（三）、宗教とは確信ある生活の謂なり。

宗教と云へば直ちに信仰を聯想するほどなれば、宗教が確信ある生活なること云ふまでもなし。根底ある深き生活は一面より見れば確信の生活なり。確信ありといひ、本來なりと云ひ、また眞摯なりと云ふ、皆共に腹の底から出づる生活に外ならず、名の異なるは畢竟見方の異なるがためのみ。

抑々信念てふものは的確にして偉大なる物に對するほど益々強きものなれば、確信ある生活を營まんには先づ人生と其周圍とに對して確と見極めたる處なかるべからず。而して人生を繫留むる背景は大宇宙乃至神明に外ならざれば、吾人は内觀外察何れよりするにせよ此大背景と深く契合する處なかるべからず。彼の倫理を旨とし國家社會を主とする生活に確信乏しき所以は、其背景微弱にして根底淺きによるなり。此と同

時に宇宙乃至神明を把捉すること弱く、其神明にして漠然たるものならんには、信念また薄弱にして、常に動搖を免れず。諸教は多く斯かる神佛を示しながら無闇に信仰々々と騷立て、催眠的鼓舞信仰にあらざれば即ち化石的頑信を得せしめんとす、其徒爾なるはまだしも多くは有害なり。今の世は確信乏しき時代なり、是れ人心發達して其撿覈力は強大となれるにも拘はらず、諸教が上よりして抽象的に示す處の神明は甚しく確實性を缺き、また科學が下より積上ぐる處の宇宙觀は未だ總括的眞意義を發揮するに足らず、爰に人々の總體觀甚しく茫漠薄弱なればなり。故に現代は實に其立教信奉の態度即ち宗教の形態上に於て混沌たるのみならず、實に其內容に於ても又混沌期過渡期たるなり。

確信ある生活を營ましめんとせば、先づ確信するに足る背景を示し、此を充分味はしめざるべからず。人は確信せんとするもの、確信ある生活を營まんとする者なり。爰に確信せんとする者あり、又一方には確信するに足る自我と背景との存しながら、しかも猶今日の如く、人をして確信ある生活を營ましむること能はざるは、確に先覺者の罪なり。諸教と科學とは其責任者にして、科學が其筆法を領分外にまで振舞ふは丕事なれども、また科學が折角に積上げたる材料を咀嚼する能はず、却りて非理なる粕

粕を以て人間確信の材料となさんとする諸教の罪は更に大なり。諸教は確信の當面材料の果して何たるべきかをすら解せず。是れ教祖教の特質よりして、今人の思想系には間にもあはざる舊說瑣事を猶後生大事と墨守せざるべからず、斯くて人間主要の思想問題に後るゝ事甚しく、直言せば諸教自ら確信の背景を會得體認し居らざるが故なり。

人をして背景に對する確信を得せしめんと欲せば、背景卽ち大宇宙乃至神明に直接親炙せしめよ。日進の智識卽ち科學の供する斷片的暗示を材料とし參考として以て、此大背景を玩味體認せしめよ。科學未だ幼稚にして供給する處甚少なく、且つ全然背景の神趣を解し得ざれども、しかも昔時の科學、卽ち諸教の思想方面に材料を供せし處のものに優ること萬々なり。一言にして云へば、今人をして眞乎に確信ある生活を營ましめんと欲せば、先づ教祖教的舊思想の羈絆を解き、彼をして思ふ存分に此大背景と交通契合せしむべきなり。諸教が此背景を舊式に拙解して、人の靈交を妨ぐること夥し。

確信生活てふ宗教の本義は斯くの如く、人々の背景玩味が自由直接にして深厚ならんことを要求す、即ち人々の接神が個人教的態度ならんことを促すなり。

又自我觀即ち人觀に於ても諸教の見解所説が概して粗野にして、今人を滿足せしめ得ざるは寧ろ理の當然なり。輪回轉生、原罪、末世澆季等の思想、幷に身躰蔑如、現世厭離、情感虐待等の態度は多く皆諸教の通有する處にして、此を今人に確信實行せしめんとするなどゝは暴戾殘忍の至りなり。事の眞相は、これ古人の人觀をば强ひて今人に信受せしめんとするに在るのみ。舊説にかぎり特に何等宗教的權威神明的保證の添ふべき謂れ毫もあるなし。然るに靈魂の不滅、來世の實在等の事は神佛の事と等しく特に宗教即ち神明の代表者が天啓すべき事にして、宗教は普通人智及科學などの企及すべからざる別種の智泉なりと信ずる輩世に多し。靈魂滅否、來世有無の論其物は爰に云々するかぎりにあらず、たゞ宗教を以て別種の智泉となす見解に至りては是れ畢竟教祖神視の餘弊の一にして、今や一笑に附する外なかるべし。古人の生命觀にして若し宗教的眞理たらんには、今人の新生命觀また宗教的眞理たるべく、其優劣如何は單に何れか果して客觀的眞實に近きやの一事上に懸るなり。また他方面に於ては頗る事理に通ぜる處の識者先進にして猶、諸教が今人の心力以外更に別種の智泉たる事を主張する者あり。斯かる人々も畢竟、教祖教即全宗教なりとの陋見に囚へられたるため此種の僻説を出だすにて、其眞意を正述すれば蓋し、――天地間の眞理は獨り智

見のみの能く闡明する處にあらず、吾人胸裏の情的直感また實に好個の啓示者たるなり、故に主として後者を重んずる處の各自宗教（諸教祖教の意にあらず）は實に一種奥妙の智泉たるなりと云ふにあるべし。然らば即ち今日正當の處置は、進歩せる今人の智見を重んずると共に亦今人の情的直感にも依憑する外なく、此等に代ふるに古人即ち諸教の所説殊に其幼稚なる智見を以てすべき理由何處にありや。故に諸教即ち古人の人觀中、粗野且非理にして信受すべからざるものあらば、强ひて猶此を確信せんなどゝ反宗教的舉動に出づることなく、今人は眞面目に自家の進歩せる精神作用に相應はしき人觀を得て以て、此を自家宗教の思想方面幷に自覺安立の一要素となすべきなり。人をして、非理なれども猶信ぜざるべからずと云ふが如き窮地に陷らしむる處の其事實自身既に、人類宗教事の久しく停滯腐敗せる事を表示せる所以のものなれば、吾人は速に自ら疏通の法を講じ以て、教祖教の舊天地を去り個人教の新態度に出づべきなり。確信てふ宗教の本義が吾人に教ふる處正に斯くの如し。

（四）、宗教とは實感深き生活、情味の生活、充實せる生活の謂なり。

宗教とは潤ひのある生活の謂なり。内容豐富にして趣味津々、實感ありて他滿せる生

活、之を宗教と云ふ。宗教信者より見れば世人が恰も夢を追ふ者の如くに見ゆるも、世人がまた宗教家はシツコクて困ると云ふも、皆是がためなり。根底ある生活は即ち深き實感のある生活にして、眞摯本來は即ち實感を欺かざる所以、はた又確信は實感の裏に發成せらる。

實感の本軍は情味にして、理智此が先驅をなし、性格實行此が後殿たり。人生の本領は情味にありて、理智意行の用は此が骨格となり指導となるにあり。此情味や活動修練の結果、卑近なるものより次第に高尚なるものとなり、益々情味深きものとなる、則ち情味の發展進化は益々情味化するにあり。斯かる高尚幽邃なる情味生活、此を宗教と云ふ。

吾人の生命は益々情味化し得る可能性を本具し、吾人の棲める此天地また定に吾人の情味を刺戟し、啓發し、涵養し、同化し、感染し、教養して猶餘りある處のものなり。此妙好天地と妙好人生、小我より云へば內外全分の區別あれども、此を大觀すれば爰に神趣あり情味あるのみ。吾人の情味生活には無限の前途ありて、吾人の宗教は際涯なく發展すべし。

洒れたる諸教よりも美術文藝は一層情味深くして一層宗教的なり。百般の人事、吾人

が其處に神味を味はひ得る處、悉く是れ宗教事なり。あゝ此大天地、到る處に神事宗教事の溢れざるはなく、大天地其物即ち一大宗教たるなり。爰に至りては最早存するもの唯だ我と大天地即神とあるのみ、即ち個人直接教の存するのみ、其他何々教などいふ包皮は疾く脱落せるなり。

（五）、宗教とは明智に循ふ生活なり。

人生の本領たる情味を導き其方途を拓くものは明智なり。確信が認識明智と情的實感とによりて起るは無論の事にして、人生の根底を示すものは實に識見なり。眞摯衷情の本來生活をして誤らしめざるもの、又明智に外ならず。

諸教の教義なるものは由來其當時に於ける至上明智、即ち宇宙觀乃至神觀と人生觀たるべき性質のものなり。其起因より見るも、其本性より見るも、此事實に然り。然らば此と同一理由によりて、今人の教義即ち思想方面は當代の最良明智なるべき筈なり。然るに斯く常に磨澄せして在るべき明鏡に代ふるに、古人の破れ瓦を以てせんとする諸教は、明智てふ宗教の本義に戻ること甚しく、非宗教背神の甚しきものなり。若し又今日に於て當代の明智よりも一歩優れたる識見を以て世を導かんとする者あらんか、彼は教祖教てふ形式をなして後年世間一般の進歩に後るゝの種を蒔かんよりも、

單に人々の宗教の思想方面を開拓すてふ個人教的範圍内に於て之を爲すべきなり。此と同じく、各人の宗教の思想方面は亦常に文學科學及哲學等よりして得らるゝ當代までの最良思想を參考とし材料とし、此に自家の經驗玩味を加へて以て、自家一流の宇宙觀乃至神觀及人生觀を形成すべきなり。是れ宗教の本義たる明智の要求する處なり。

（六）、宗教とは統一ある生活の謂なり。

吾人は我生の統一を欲す、我生にして衷情の統一する處とならんか、是れ即ち宗教なり。宗教事に統一的傾向の強きも、教義即ち思想上の統一系の存するも、典據てふものゝ必在するも、皆是がためなり。根底を求むるは統一を得んとすると殆んど同義に近かるべく、眞摯は即ち不統一の防腐劑なるべく、統一の存する處爰に始めて確信起り得べし。人生眞乎の統一者は所詮情味なるべく、統一の斥候は明智なるべし。故に以上六種の定義は殆んど皆、同一事を諸方面より見たるものならんか。

統一ある生活てふ本義の要求する處は無論個人教の外なかるべし。若し夫れ在外某教を奉すると云ふ問は、彼は獨立せるものにあらざるべく、隨つて其主權立たず、統一完からず、況して衷情情味の統一などいふ事は僞物となるべし。教祖教は所詮統一の苗代なり。

（七）、宗教とは敬虔なる生活の謂なり。

世人多くは敬虔を以て宗教の眞髓となし、此によりて以て人の宗教の有無を判ず。禪の如く外見磊落不羈なるやう見ゆるものも、其實如何に謹嚴敬虔なるぞ。前に述來りたる諸種の生活は多く敬虔の因たるか果なるか、乃至同一事たるかなり。

敬虔其物の進化するや、先づ外貌擧動よりして次第に其心内に進入り、内心の敬虔熟して後始めて自づと起居動作に現出づるなり。故に敬虔は其初め多く身寄の長上に對するより始まり、次第に高遠なるものに及び、又人生全般に行渡るなり。敬虔の情の源泉に二つあり、一は神明にして他は自我なり、是れ此念を起すに足る究竟物にして、爰に根ざせる敬虔は涸るゝの憂なし。此両者より出でゝ此情が人間萬事に及ぶは當然にして、又望ましき處なれども、始めよりして両者以外の中途物を敬虔の據所となし、教祖、經典、教義、團體、典禮、建築物、表號等の上に此を懸くるは、本末眞僞を顚倒するものにして、やがて褪せ易く毀れ易き恐れあり。よし又然らざるも此は人心を萎縮せしむる所以なり。幼稚なる人心には此種の假設方便も致方なしとするも、其發達成長とともに眞泉源に溯らしむべきなり。然らざれば宗教事其物屢々虛僞不敬虔に陷ることあり。此を約言すれば、敬虔なる生活てふ事は教祖教的態度よりして次第に

個人教的立場に移るべき事を催告するなり。

（八）、宗教とは至上生活、

第一義生活、極致生活の義なり。

印度埃及に於て僧侶を第一階級の者となすも、此義の餘響にして、宗教事が多く獨斷絶對の色彩を帶ぶるも此がためなり。確信、深邃、本來、眞摯、敬虔、實感、統一、充實等以上の諸定義は皆第一義生活の諸性質なりと見るを得べし。

宗教が人生の一部分のみを指せる間は、人々が認めて以て至上生活となせるものゝみ卽ち神事佛事のみ、彼れの宗教たるべし。されど人生の統一化次第に進み、一切生活が神事佛事となるに及びては、生活全體其儘に宗教卽ち至上極致の生活となるなり。

蓋し人類の大歷史も又個人の一生も畢竟、人生の一部分が神佛事卽ち極致生活たるよりして、一切生活が此極致生活に同化統一せられ、以て終に全生活其物が第一義生活たるに至るの變遷史なりと見るを得べし。則ち人類史は宗教化史、聖化史なり。而して此聖化史上に於ては各教祖教は大立物となり、聖化の稍進むるにつれ自家の皮囊先づ破れて、生活其物を第一義となすに至るなり、卽ち第二期よりして第三期に移りゆくなり。

（九）、宗教とは美はしき生活の謂なり。

神殿は其時代の美の精粹にして、偶像は美感聖感の投射出現なり。先づ神事に於て美を盡し、やがて一切生活を美化す、是れ人類發達の經路にして、宗教とはげに美はしき生活の謂なり。宗教が美術を保護し來れるも是がためにして、清淨、端正、圓滿、森嚴等が神事佛事の特色となれるも又此がためなり。極致、確信、情味幽邃、眞摯、統一等の生活は皆是れ美はしきものならずや。美はしきを求むる生活が美はしき生活の一要素また一動力たること云ふまでもなし。

眞は冷たく、善は堅くるし、人生眞乎の理想標準は美なるべし。此によりて批判してこそ、一切人事は穩健なる裁定按排を得るなれ。此事は、情味が人生の本領基本たりとの事實に照應し、人をして宇宙及人間の眞髓本體の果して何物たるかを揣摩せしむるに足る。眞も善も共に聖に達するの途にして、又其物やがて聖なるに相違なけれども、しかも聖に到るの大道は美なるべし。美よりして聖に入り、爰に一切の人事庶物始めて復活聖化し得るなり。今人の美と情味とが未だ其眞面目を發揮し得ざるは、此等が實有の奥秘にして又人心至奥のものなると、人類の發達未だ幼稚なるとによる。

美はしき生活の第一要索卽基地は各自生命の發展其物にして、生命は好く發展するは

ど益々美はし。故に此點に於ては、人々の生命を一種の定型に入れんとする教祖教的態度よりも、直截に發展其物の上に出發點を置き、發展教養を主要事となす處の個人教的態度の方、遙かに切實合理なるなり。次に美はしき生活の第二要素即ち誘因は大自然其物にして、其深奥絶美なる風韻の感染涵養を好く受くるほど生活は益々美はし。故に此點に於ても又、多くの仲介者代用者障碍物を擁して以て直接接神を疎からしむる處の教祖教よりも、直ちに大宇宙の神韻に投入し以て此に他かんとする處の個人教の方、遙かに適切なるを覺ゆ。則ち美はしき生活てふ本義より見るも、教祖教は、各人獨自に神美を呼吸して以て我情味乃至全生命を發達せしむるに至るまでの豫備たり、家内者たるべき性質を有せるを知るなり。

（十）、宗教とは發展する生活の謂なり。

宗教と云へば直ちに渴仰向上の聯想せらるゝに徵するも、宗教が景慕追跡のあまり展びゆく生活なること明なり。克己奮進、精進不退等、教界の常用語は何れも進步發展上の警語ならざるはなし。修業が教界の半面を代表せるは即ち宗教が發展の生活なればなり。根底、確信、明智、眞摯、統一、情味、美等の諸性は何れも皆其性の方に益々發達深入りする事を希望せざるはなし。げに宗教は發展ある生活の謂なり。

此本義が、發展てふ觀念の乏しき諸教の態度よりも、其觀念上に立脚せる處の個人教の行き方を撰むは、今更云ふまでもなし。

以上のほか猶宗教の本義を計へんには、自知の生活、權威ある生活、愛の生活、超然餘裕のある生活、安立の生活、感恩の生活、神聖なる生活等と擧來るを得べく、而して此等は何れも皆個人教を促すなり。されど今は悉く此等を省き、神明の事を述べて以て本義上よりの根據論を結ばん。

（十一）、宗教とは神明と交はる生活の謂なり。

此は人々の知悉せる處。よし一時は絶對者よりも教祖其人を尊重するが如く見ゆる處の教祖教の或時期に於すら猶、教祖は絶對者其物か乃至其權化代表として然か勢力を有せるにて、教祖偏重の事其物既に、絶對者の裏書の存せることを表示せるなり。又自家の生命其物の見證に偏せるが如く見ゆる態度に至りても、爰に『神』なるもの聖なるものを發見し、內觀よりして神明に達せるなり。庶物禮拜も又固より神を拜し此に祈るなり。故に宗教事とは即ち神事に外ならずして、其の相互に異なる處はたゞ其『神』なるものゝ意義如何に過ぎず。以上掲來れる諸々の本義は皆神明を得て始めて能く滿足し得らるゝ處のものなれば、宗教とは即ち神事なりとの定義は最もよく其實を現は

せるものならん。

人は『神』なくして滿足し得るものにあらず、また『神』は儼乎として在ますなり。たゞ吾人々類が神を認め得る樣と程度とは時代によりて異なれり、――土產神あり、子安神あり、雷神あり建國神あり、山神あり海上保護神あり、創造神あり攝理神あり、救濟神あり所罰神あり、超越神あり內在神あり、又宇宙神あり。何れの神觀も皆此大天地の偉大絕妙なるに感じて起れるものにして、大天地は確に人をして『神』てふ感に打たれしむるに足るなり。天地を感知すること益々深く益々精緻なれば、『神』てふ感は益々深まさりゆき、人々の神觀は愈々精確となるなり。人々の神てふ觀念の薄き時はあらん、されど此は從來認知せし通りの神が存在し難くなりしまでにして、從前の神の存在を危くする處の其智識經驗は、實は一層精確切實なる新神を吾人に提供しつゝあるなり。吾人の進步發達は益々好く神に觸れ神を知らしむるなり。自敎專有の神ありと思ひ、或は自敎開示の神を以て最優なりと唱ふるは愚なり、此と同時に無神論など信ずるも亦愚なり。一例を擧ぐれば、大工神、攝理神、奇蹟神、超越神、內在神等の觀念中に非理なる處發見せられたればとて、直ちに無神論を唱へんは卒爾なり。此は基督敎會の說來りし如き神の存立覺束なく成りしまでにして、斯かる際は卽ち神の一

層精確に會得せらるべき準備期過渡期たるまでなり。又一方に於て、自敎の神の敗れんとするを見て、神は到底吾人の感知の能く認め得る處にあらずなどゝ、見苦しき逃げをはるが如きは滑稽至極なり。兩者共に神に觸れ神を會得せること極めて淺し、宜なり其神の或は無くなり、或は敗るゝ事。

科學の敎ふる處を正當に解する能はず、又神とし云へば直ちに諸敎に敎ふる處の如きものとのみ思ひこみて、眞に神を解し能く神と共に活くる能はざる現代は不幸なるかな。何ぞ惰眠より醒めて汝の神、眞の神を求めざる。神を以て過去のものと想ふが如きは、宗敎を以て過去のものと念ふと等しく、淺薄なる迷信なり。過去に想倣せしが如き神は勿論過去のものたるべきも、神は永遠に儼存し、吾人々類の發展と共に益々親近密接となるなり。若し此種の人々の筆法に從はんには、人間も地球も太陽も亦過去のものなるべきにあらずや。

無神論者の憐むべきと同時に、彼等に向つて、――成るほど自敎が從來說來りし神は辻褄のあはぬ處ありて、情感理智共に發達し來れる今人が此を納得し得ざるは尤なり、されど此は自敎の神觀の幼稚なりしにて、其のため卿等の接神を妨げたるは幾重にも相濟まぬ處、謹んで爰に詫ぶ。しかも神は儼存す、卿等は其れ相應に神を求め此に接

せざるべからず、――と深く能び且つ新に神に導くこと能はざる現宗教は禍なるかな。事神明事に關するだけに其罪最も大なり。斯く先づ自らの蒙昧離神を悟り、自教の愚を自白し、以て自他兵に一段の神に進むこと能はざる其原因果して何處に存せりや。諸教の現觀が一般人文の進歩に伴なふ能はざる眞因如何。嗚呼一切の教祖教は速に開悟進化して以て個人教と成るべきにあらざるか。げに個人教の天地の速に開けんことは神明の切望する處たるなり。

（十二）、宗教とは神人同調なる生活の謂なり。

神と一つになるといひ、自我本來の面目を發揮すといひ、又活物を捉へるといふ、共に是れ神明と同調になる事に外ならず。げに神明と同調同感の生活を營むことは一切宗教事の本領にして、人生の目的また此に外ならず。神明に交はるも所詮此のために、根底、確信、衷情、美、明智、實感、統一、本來、敬虔、發展等の諸性質は皆神人同調生活の諸色彩たるなり。げに此等の諸性が神明との交通上に必要にして、又其間に養成せらるゝのみならず、然か必要なる所以、又然か養成せらるゝ所以も畢竟、此等の諸性が卽ち神明其物の性質たるによるにはあらざるか。

同調の意や實に多義多方面にして、爰に至る途また樣々あれども、諸路諸方面は決して偏廢すべきものにあらず。人間一切の經驗知得は畢竟神明の眞相と態度とを躬認せんがためのものにして、作動折衝等一切の意行は神明の意行を知り且是に深はんがために外ならず。情味てふ本軍は神明の本領本體を呼吸し、此によりて生息し、此に同化感染せられて以て同調を大成せんがためなり。眦々の聲よりして既に同調の第一着歩たると同時に、又同調化の第一着歩たるなり。故に一切生活は卽ち宗教性の發動なりと見るを得べく、また直ちに宗教的生活たりと云ふを得べきも、同調と同調化とに背けるものは其例外たるべし。殊に一人の生命中には特に同調の略成する時、卽ち一括りの入る時期あれば、斯く粗成したる生活を宗教と呼ばんは宜しきにかなへり。同調の修練が先驅によりて助けらるゝは無論にして、殊に優秀の同調者たる諸教祖たちは好個の案內者たり。しかも若し此等に偏賴するが如きことあらんか、此は當を失せり。蓋し吾人の神明は吾人の前にあり、基督や佛陀ほどに遠からずして、此と日夜折衝往復する處の日常生活は卽ち同調の修練に外ならず。要は自ら此事を意識して其効果を收むるにあり。近き本物を捨てゝ遠き寫眞に偏賴せんとするは本末輕重を顚倒せり。無闇に飛込みて水に溺るゝは愚なれども、畠水練の永續も誤りなり。卽ち教祖教は所詮一時の輔助に過ぎず。

第九章　個人教の論據（下）

第八節　爰に大宇宙乃至神明の保証あり

つら〳〵古今の宗教事を通覽するに、其中心となれるもの二あり、自我及び神明是なり。一切の宗教現象は畢竟此二大中心を圍繞せる楕圓形に外ならず。而して其中心の一なる人間の生命其物の性質が個人教を要求し且之を保證する事は、吾人既に此を見たり。然るに他の一中心たる神明亦個人教の可能を保證し、且つ此を促すなり。

人或は、個人教の立場にては宗教内容を悉く各個人のものとなし、以て別に神明を提唱し一定の禮拜祈願を共にすることを要求せざる故、接神の事甚覺束なく、ために宗教たる事困難なるべしと憂ふる者もあらん。されど此は未だ教界の舊態に馴れて、新天地の事を正當に想像領會し得ざるより起れるなり。抑々神明なるものは諸教の開示を待たずして自然本來に存在せるものにして、諸教の先覺が其啓示に與りて力ありしは勿論なれども、しかも諸教にして現存せずとも吾人は當然此と交渉感通すべく、又然か爲し得る處のものたるなり。況んや今日の實況を云へば、神の内容を示し吾人接

神の案内となるべき科學及哲學は未だ幼稚にして、殊に其領分外への推及結論に躊躇し、又一方に於て吾人の接神の媒介者を以て自任せる諸教は其自身の神觀甚幼稚にして、今日までに發達し來れる吾人人類の認神、信神、接神をば却りて妨げつゝあるなり。是れ科學及諸教の性質としては固より然るべき處。科學にして若し一朝現方法と現態度とを捨て、突然類推法よりして一足飛に神明の事など彼此思議するに至らんか、是れ科學の發狂なり。しかも吾人は精確の探究者たる科學が着々開示する處の智識のみにて滿足する能はず、此等をも材料の基礎となして以て總括的に自家一流の思想を得、總括的に感味經驗すべき必要あるなり。是れ人心自然の要求にして、又大宇宙の催告する處たり。此を要するに、科學が下より着々積上げて以て吾人に啓示する處は悉く皆知神接神の材料暗示たれども、未だ以て吾人をして直ちに神明に入らしむるに足らず、又諸教開示の神明は是れ古人の粗野なる神觀にして、他方の科學及日常經驗より來る材料暗示を滿足せしむに足らず、爰に一大缺陷儼存して、近世の人類は知神接神に甚だ不都合なる地位に立てるなり。此大欠陷は果して如何にして補はるべきものなるか、將又缺陷の存する事は抑々何を意味するか。

吾人をして直言せしめば、――此缺陷の起るは當然のことにして、此軒輊缺陷は即ち人類の宗教的態度の一變すべきことを催告せるなり。則ち人々は其の發達して豐富となれる智識情味を以て大に神を求め神を知り神と交はるべく、自家は自家一流の宗教事を勵むべきなり。即ち人々は速かに個人教的態度に出づべきなり。人々が此事を勉めてこそ、科學の供する精確なる智識も始めて其眞意義を發揮し、又他方の諸教も爰に其完成を得るなれ。斯くて第三期の接神は面目を一新して活潑深厚切實幽遠のものとなり、人類はために一層力ある、一層意味深き者となるを得ん。惟へば宮殿内に神を拜したる人類は一進歩をなして諸教内に神と交はるに至り、爰に諸教、學術、文藝等に助けられて日夜に經驗修練したる曉、今や更に又一歩を進めて、諸生活の滿足保證し得る處の直接神交をなし始めたるなり。故に個人教期は、過去累代の修練により て發展成長し來れる宗教内容が爰に始めて丁年期に達し、獨立自營をなすに至れるなり。此事や啻に諸教の本性が此を豫期するのみならず、又科學の眞使命が此を希望するのみに止まらず、實に文學藝術並に諸他生活の此に始めて自覺を得る所以の途たるなり。げに第三期は神人共生の最も盛んに行はるべく、神事が一層其眞面目を發揮すべき時たるなり。

世には或は神明を以て諸教の提示するものゝ如く想ひ、そのため宗教團體が一定の内

容神觀を提供せざる事を賴少なく感ずる者もあるべけれど、此は未だ神の觀念の生起發達する理由來歴を知らず、接神の經驗甚弱く、ために爰に人をして『神』の感を抱かしむる所以の一大物が本來存在せる事を悟らざるよりして起る一杞憂に過ぎざるなり。抑々一切の神明てふ觀念は此大宇宙の偉大靈妙なるに感じて起れる物に外ならず、又大宇宙は實に然か感せしむるに足る以上のものたるなり。水の妙用は水神の觀念を起さしむるに足り、高峯巨嶽は『山神』の感を催さしむるに足る。滄海に神住み給ふとの觀念、又は神此を司り給ふとの念、乃至神此を造り給ひしとの思想、これら三樣に異なれども、何れも滄海の偉力に打たれて起りしものにあらざるはなし。斯くて人類經驗の擴大と共に神々の數も次第に增し、雜多の神を生ずるなり。而して人類の智力の進歩と共に諸神の間に種々の關係生じ、又其概括力の進むにつれ小群神は次第に合併せられ、領域弘大にして勢力絶偉なる少數の大神と化しゆくなり。斯くて氏神は族神となり、族神は國神となり、國神は世界神となりゆく、其樣恰も社會範圍の擴大に似、また此と伴なへり。しかも何れの神も皆其起るに充分なる根底因緣を有せざるはなし。人類の概括力頗る高度に達し、世界現象の秩序統一てふことを深く感ずるに至れば、單一神の思想は進んで唯一神となり、又群神間に組織秩序行なはれて神國或は神

國成立し、其大首領たる大御神定まるなり。若し夫れ唯一神にまで達せんか、人類の神觀は頗る發達せるものにて、其精神作用と社會生活との亦可なり進歩して博大豐富となれるを知るに足る。

唯一神の思想中にも創造神、支配神、超越神、內在神等樣々あり。神は此世界を作りたれども爾後超然として何等干涉する處なしとの超越神にまで至れば、是れ神と世界との距離の最遠くなれる時なり。抑々吾人四圍の光景は神此を爲し給ふか或は神爰に住み給ふとかの觀念を起さしむるに足り、此際に於ける諸神は天地の現象を去ること極めて近く、某地某事には皆其々の神在ますなり。山野の跋涉往復漸く頻繁となるに及び、神々は多く遠ざかりて深山大海に赴くものなるが、若し夫れ終に天上を其住家となし給ふに至りては、神と世界との距離頗る遠きを致す。殊に心靈的抽象的の神と成るに至りては、神と世界との對立は判然明白となり、其より神の觀念の宏大となるほど益々世界と相離るゝなり。作動神、住神が支配神となれば既に分離上一段の進歩にして、支配神が創造神となれば更に一層の懸絶、若し更に造、放しの超絶神となるに及びては、是れ隔離の極度なること、前既に云へるが如し。而して神と世界との分離の進むほど尊神卑世の情益々其度を增し、超越神の時代は卽ち厭世の念の最盛なる

時期なり。神と世界とが斯く次第に分離しゆく樣は實に興味ある一現象ならずや。神の次第に抽象的心靈的となりて世界と別離し、其極遂に超越神となるや、人類の神觀は爰に一大方向轉換を起し、再び世界と近接し始むるなり。蓋し此極度に達しては吾人の神はもはや緣遠くして賴少なきものとなり、神無くとも猶宇宙を說明し得べく、且此神なくして猶生活し得べければなり。神と世界との別離の益々進捗すると同時に、世界其物に對する吾人の關係は益々密接となり、其覺知經驗する處益々多く、其感味する處益繁く且濃くなり、其施設する勞工作業益々多大精巧となるなり。而して人類にして此天地を感知すること多ければ多きほど益々其壯大巧妙深遠なることを覺り、殊に其の精確にして積上げ的なる研究即ち科學が着々啓示する處によれば、天地の精妙なることは到底吾人の思議憶測を絕し、此を蔑視遠離するなどゝは以ての外なることと明かとなり、斯くて超越神の觀念の强き頃は恰も一方には天地に關する智識興味既に大に豐富となれる時なり。斯くて殆んど空虛となれる神觀即超越神は爰に垂下し、豐富となれる世界の智識及情味をとりて其內容となし始むるなり、即ち內在神の觀念、爰に頭を擡ぐ。曩に神と世との別離の益々進行中にあるや、物質や現象やは常に輕蔑、冷遇せられて絕えず防禦の地位に立ち、神事は世事を壓し、神權は世俗權を抑制せしが、今や爰に神觀の下向し始むるや形勢やがて一轉し、神は常に消極の地位に立ち、屢々無神を叫ばれ、神事は每々冷笑諷刺の標的となり、教權は敬遠よりして終に蹂躙廢棄せらるゝに至るなり。現代は正に此に近し。

然らば神の觀念は到底排除せらるべきなるか、古人の抱きし處は畢竟迷信なりしか。神觀の變遷の示す處は『然り』と云ふにあるものゝ如く、輕卒なる論者は又喜んで『勿論』と答ふるならん。しかも吾人の潛心熟慮すべき處は實に爰に在り。古人が諸神に附けし處の諸性は即ち天也の現示する處にして、一として根據なきはなし。今日の如く神の觀念の極めて漠然空虛となれる時は即ち他方には宇宙其物に關する研鑽探究幷に感味頗る進みて內容豐富となり、宇宙其物實に吾人をして『神』の感を起し、『神』と叫ばしむるにあらずや。創造神にあらず、支配神にあらず、內在神にあらずして、宇宙其物眞に神たるの資格を具備せること次第に首肯せらるゝにあらずや。必ずしも意識神といはず、又人格神といはず、とにかく『神』と呼ぶほかなきほど絕大奧妙精緻なるものなること啓示せられたるにあらずや。げに今人が觀ぜる宇宙は古人の抱きし神よりも、其力偉大に、其組織秩序精緻嚴正に、其風趣幽邃深遠に、其歸趣進行絕妙にして其內容豐富なるなり、即ち古人が神について感せし處よりも今人が宇宙について

感ずる處遙かに神々しきなり、換言せば今人の宇宙は古人の神よりも一層の神たるなり。若し此を主觀上より云へば神觀の進歩なり、若し此を主客の對應上より云へば宇宙の『神々しさ』即ち『神』は益々多く愈々切實に吾人々類の感知體認する處となれるなり。則ち此を感知の順序より云へば、宇宙の性質の益々闡明せらるゝにつれ、其某點某事が神々しきのみに止まらずして全宇宙其物一大神明なること次第に會得たられたるにて、人類の主觀的變遷より云へば宇宙其物の神化せるなり。但し過去の或時代の幼稚なる宇宙神觀に懲りて、今日に相當なる宇宙神の觀念に進むことを恐るゝは、此は餘りに卑怯にして、活神を握る所以にあらず。由來本論は各人の宗教の內容に論及せんとするものにあらざれば、神觀について深入することを避けんも、今日相當なる新宇宙神觀を得て活々せる神交に入る事を恐るゝ人々は須らく、諸教祖の神が諸教信徒の神よりも概して多く宇宙神的なるの一事を反省して以て、勇を鼓すべきなり。吾人より見れば、此一事の所以も極めて明白なり、蓋し富岳は箱根足柄よりも寒ければなり。

宇宙が如何に神たるかの內容論をば爰に一切省略せんも、神てふ觀念につき古今を通せる根據斯くの如く、又全宇宙其物既に一大神たるの資格を具へて餘りありとせば、

神てふ觀念は即ち宇宙の眞性質を示せる最良觀念なるにあらずや。故に此絕好靈妙なる大宇宙の存するかぎり吾人は神てふ叫を絕つ能はず、又然かなし此によりて生を營むの最も穩健正當的確高尙なる生活たることを斷言し得るなり。神觀の變遷を視て忽ち、神が人を造れるにあらずして人が神を造れるなりと誇顏に言はんは寧ろ淺薄なる僻事なり。大工神乃至內在神等の神觀が無意味となりたればとて直ちに無神を信ぜんとするは、一時の反動としては怨すべき處あれど、所詮大天地を感知すること極めて淺きことを自白するに過ぎず。古今神觀の變遷進化を一言にいへば、大宇宙てふ一大神が次第に確認親交せられ來りたる跡に外ならず。加之、此進歩は即ち吾人人類の精神乃至全生命の進化發展と始終するものなれば、人類の文明史を評して以て是れ即ち神を知ることの進化史なりと斷ずるを得るなり。

大宇宙の神性の覺知體認せられ來りたること斯くの如し、此時もはや何教の神なるもの存せんや、將又何々教の神觀てふ舊見に逆戻りするの要あらんや。吾人は直接我神を仰いで此と交はり、此と同調同味の生活を營むほか方途あることなし。則ち神觀と接神との進歩は個人教の可能と必要とを立證し、且つ此新時期を畫出せるなり。

第九節　狹義且强義の『宗教』てふ觀念また此を需む

人或は云はん、――吾人が指して以て第三期の宗教なりと云へるものは是れ即ち宗教心に外ならずして、宗教なる語は依然教法若くは宗教團體に宛てらるべきなり。然るを吾人が殊更に、今後は個人所達の境涯、精神若くは生活其物を以て宗教と倣すべくして、團體若くは祖法が此名稱を冒すことを廢すべしと唱ふるは、故なくして改變を企つるもの、名辭の歷史的慣用を無視するもの、徒らに事を好むものにして、此種の兒戲は到底他の承認を得ること難からんかと。此言如何にも穩健にして半面の眞理を含み、今日に於ては多數人士の意を得たるものなるべし。

又一方には吾人の屢に見たる如く、宗教てふ語は今日に於て既に主觀客觀の兩義に用ひられつゝあり、等しく太耶の宗教と云ふ内にも彼自身所達の境涯乃至生活を指す場合と彼の屬する某成立教を指す場合と兩樣あり。現時の慣例既に此處まで進來れるに、吾人は何を苦むでか特に前者をのみ宗教と稱し、後者をば宗教團體若くは祖法と稱せんとするやと。これ又極めて穩當なる見解にして、吾人も又決して此を看過せるにあ

らず。

されど吾人の細心留意すべきもの實に爰にあり。古今の宗教事を通觀するに、何れの時代に於ても一切の宗教現象中特に其時代の重要視する處のものを指して特に宗教と稱し、或は然か取扱ふなり。換言せば、何れの時代に於ても其宗教てふ意義に廣狹兩種あり。第一期に於ても其宗教現象中訓戒的教法的のもの存せざりしにあらず、又此に宗教的尊敬を致さゞりしにあらず、しかも其の特に重要視したる處は祭祀にありて、後者は宗教中の宗教とも稱すべかりしなり。第二期の人々とて稱荷下げ御籤などを以て宗教的現象となさゞるにあらず、又所謂宗教心其物をも亦宗教と呼ぶなり。しかも第二期の人々は殊に祖法若くは宗教團體を以て宗教と稱し、斯くて知らず〳〵の間自家所用の宗教てふ言語に廣狹兩義を生じ、其の重要視する處のものをば特に宗教と呼べるなり。而して各代の人々が不知不識斯く兩樣に用來れる跡を顧みるに、其が最も重要視せる處を指して特に宗教と呼ぶ場合には、特に狹義且强義の意味に於て然か唱ふるなり。現に等しく教祖教なる耶佛兩教に於ても其教を特質上よりして、佛教に於ては寧ろ祖法其物を以て狹義且强義の宗教と見做すに對し、耶教に於ては『教會は即ち基督の體なり』風の思想よりして多くは團體を以て强義の宗教となせり。

狹義且强義の宗教の事は、宗教の觀念に關して云々するかぎり吾人の必ず記憶せざるべからざる處なり。說者が祖法若くは團體を以て特に宗教と稱するも卽ち此狹義且强義の意にして、吾人が特に個人の境涯乃至生活其物を以て宗教なりと唱るも亦此狹且强き意義に於てするに外ならず。然らば如上の說者幷に世の宗教に就て云々する者は、其言議主張の前先づ自家の宗教觀念を反省檢閲すべき必要あり。彼等の宗教觀は、祖法乃至團體を最重要視し此を狹義且强義の宗教と做し、境涯乃至精神をば求道心などゝ同じく入門に必要なる宗教心と見做す處の第二期の習慣に制せられたるなり。故に若し彼等にして眞に得道其物、境涯其物を以て一切宗教現象中の至要事なりと考ふるならば、彼等は先づ此考に循ひて自家の宗教觀を修正するの必要あるなり。又宗教てふ言語を主觀客觀兩樣に使別け、客觀の祖法乃至團體と主觀の境涯と双方に共通せしめ、其間別に甲乙輕重を設けざるまでに進來れる人々は、更に自家及當代の眞に主要視し、又主要視すべき宗教現象果して何たるやを視定め、此に狹義且强義の『宗教』てふ稱呼を附すべきなり。

さて一切の宗教事中今人が最重要視する處のものは果して何なりや。此は云ふまでもなく各人の境涯其物、第一義生活其物にして、此に比すれば祖法も團體も教祖も皆從

屬的のもの、第二義以下のものに過ぎず。此事や、教祖先覺の素懷にして、教祖教期中にも常に眞乎悟道得道の士の既に〳〵是認したる處なれとも、近世に及びて特に一般の承認を得來れるを見る。然らば說者等が狹義且强義の宗教呼ばはりをなす事實其物よりして直に、今日及今後に於ては各人所達の境涯其物の上に狹義且强義の宗教てふ名稱を附せざるべからざる事の必然なるにあらずや。則ち第一期に於て特に祭祀事を宗教視し、又第二期に於て團體及祖法を以て特に宗教と稱し來り、今人の宗教觀今猶此に制せられて如上の立說をなすてふ、事實其物が吾人をして今後は各人の境涯乃至生活其物を以て特に宗教と呼ばしむるなり。又今日に於て宗教てふ言語に主觀客觀兩樣の意義の生じ來りたる事、卽ち第二期の特徵として客觀現象を特に强義の宗教視したる傍よりして、此と同じく境涯其物をも宗教視することの次第に强く成りゆく事實其物も又、實際上先づ各人の經驗乃至生活其物が主要視せられ、此につぎて宗教觀も又次第に變移し、今や强義の宗教の指處が客觀現象上よりして次第に一方の主觀現象上に轉じつゝある趨勢を示すに足るなり。故に此等異說者の反對論の根據其物實に、彼等の見解の將に更正せらるべき事を促すなり。

爰に於てか吾人が最に第六節に於て個人教の形態を述ぶるにあたり、其第一項に於て

宗教てふ語をば祖法若くは祖名團體に歸することなく、各人の某樣の心性乃至生活若くは境涯其物に宛つべしと云ひし時、一見奇怪なるが如く想はれしものも、其が決して物好きにあらず、又專檀にもあらざりし事、明白となりしならん。はた又同上第九項に於て、今後の宗教團體はもはや特に宗教の名を僭有することなかるべしと言へる、其眞意と所以をも亦明なるべし。統一團の綱領中に言ふ處の『各自特有の宗教』なるものも又以上の意に外ならずして、此を『各自信奉の宗教』とのやうに解して以て、佛教徒も來れ基督教徒も來れとの合同團體なるが如く想ふは誤れり。げに『特有』と『信奉』とは第二期と第三期とに於ける特異點の主なるものなり。

吾人をして今一歩深く蹈込みて、各時代に於て狹義且强義の宗教視せしもの、即ち一切の宗教事中最も重要視せし處のもの、則ち第一期の祭祀と第二期の祖法若くは祖名團體とは、如何なれば斯く最重要視せらるゝかを檢せしめよ。祭祀の尊き所以は其が神事なればなり、當時に於ける至上生活たればなり、則ち最尊貴神聖なる神明に交はる心事行動なればなり。教祖が尊崇渴仰敬禮せらるゝ所以は彼が神明其物の出現か、或は其代表者かと想はれたればなり。斯くて祖法は即ち神明の聖旨、至上の摸範生活にして、祖名團躰は即ち其實現成果なりとせられ、以て强義の宗教と視做されたるなり。然らば第一期第二期を通じて、宗教中最も重要視せられたるものは所詮、尊貴神聖なる神明と最も切實に交渉する人事現象に外ならざるなり。さて此基本的習慣に循ひて現代の吾人が嚴重要視すべきもの、即ち强義の宗教視すべきものは何なるや。漸く丁年に達したる二十世紀の民が特に宗教呼ばはりすべきものは云ふまでもなく、寫眞や通辯やを捨てゝ眞接赤裸々に『神明と最も切實に交渉する生活』其物に外ならざるなり。

世には又、吾人が呼んで以て宗教となす處の至上境涯乃至生活其物は、是れ宗教と云はずして、寧ろ道德とか性格とか或は境涯とか生活とかと、其儘に稱ふべきなりと說く人あり。是れ又一理なきにあらず、現に斯く爲しつゝある人すらわり。されど上文既に之を見たる如く、吾人々類は一切の人事中、其の是も重要視し且つ最も尊敬する處のものに對しては、是に宗教的熱情を注ぎ、之を宗教的に取扱ふなり。彼の或民族が某時期に於て其君主酋長を現神視し、之を宗教的に取扱はんとするが如き、即き其一例なり。然り、彼等にとりては其君主酋長は薄弱ながらも神明の一種にして、その此に奉仕する心事及態度はやがて宗教事たるなり。その樣や、彼の教祖教信徒がその教祖に對する姿にさも似たり。而して斯く　視する處のものは即ち彼れの宗教的對物

にして、又斯かる動作生活は是れ彼れの宗教なるにあらずや。更に換言せば、――人々が看て以て至上生活乃至最尊貴なる人事と做す處のものは卽ち彼れの宗教たるに外ならざること、前文既に之を明にせるが如し。故に若し、今日に於て人々が至上生活を以て人生の最要事となし、之に宗教的情熱と尊信とを拂ひつゝあらんには、此至上生活は當然、宗教と稱せらるべきなり。蓋し、宗教てふ名辭は必ずしも某事某物に固着すべきものにあらずして、其人と其時代とが一切の人事中にて最高事、至上事と見做す處のものに宛てらるべく、隨つて恰も『最優事』てふ名辭の異名たるが如きものなればなり。其が時代の宗教觀の推移とゝもに亦上進しゆく樣は、恰も『神』若くは『君主』てふ言語の向上しゆく態に似たり。

然らば今假りに說者の言に隨ひて、此宗教的生活卽ち至上生活其物をばよし道德とか境涯とかと呼ばんとも、吾人にして是に宗教的尊信と情熱とを注がんには、此物や則ち宗教となるほかなきなり。又一時假りに『宗教』てふ名を惜むとするも、實の存する處、やがて名も亦之に隨伴しゆかんのみ。人々の宗教眼が教法若くは團體上より離るゝくして暫し猶此に留まれる、今の過渡期の現象を視て以て立論する處の、說者の所謂穩健なる所說は是れやがて一個の頑舊說たるなり。此は恰も一個の佐幕說の如きものか。

以上個人教の根據につき、諸方面よりして觀察したる處によれば、今後の宗教が個人教の形態をとるべきことは、最早何等の疑を挿む餘地なきものゝ如し。此以上に至りては只管、世の先覺が熟慮精察、以て大勢の趨向を直感體認せられんことを切望するほかなし。

今や、教祖教てふ第一鍵子に加ふるに、個人教てふ第二鍵子を得たれば、更に一歩を進めて、現未の宗教事上に若干の小解決を試み、以て此第二鍵子の果して正を得たるものなるや否やを驗せん。

第十章　今一層の解決（上）

今日に至るまでの宗教現象が特に教祖教てふ一様式のものなることを會得するは即ち、現代の宗教問題を解決する第一着手たるなり。然り今日の宗教界の沈滞萎靡せる所以は、其が教祖てふ一種の特殊形相たる所以に心づかず、其の特質意義及び使命を理解する能はず、隨つて疏通解決の途を發見し得ざりしによるなり。故に一とたび此事に心附くや、教界の紛糾はもはや其大半を解決し得らるべきにして、此心附きは實に解決の第一鍵鑰たると同時に、心附き其物既に最大解決たるなり。吾人は先づ此第一解決を得たれば、此鍵子によりて更に幾多の小解決を試みたり、第五章は即ち其れ。此に次ぎて吾人は更に個人教てふ第二の大解決を得たれば、教界の前途稍見込附きたるものゝ如く、一道の光明は確に吾人の進路を照らせり。げに『教祖教』と『個人教』とは現未の宗教界を代表すべき二大様式にして、此双語は現代の宗教事を正當に傾會せしむべき二大標語、宗教的謎語を解釋する二大符號、また人類の宗教的生命を促進して解體廢弛沈滞せる教界を刷新復活蘇起せしむべき二大處方箋たるなり。今や吾人は

既に第二鍵子の略々如何なるものなるべきかを見たれば、此より進んで爾餘若干の問題上に解決を試みんとす。但だ以下の諸問題は多く皆細密なる研究思議を要すべきものなれば、爰に爲す處の解決なるものは要するに梗概を擧げ方針を語り、以て今日の宗教問題なるものが大體如何樣にして疏通解決せらるべきかの筋途を告ぐるに過ぎず。その精細なる思議と實行とに至りては、世の先哲に俟つの外なく、吾人また題を更めて卑見を述ぶるの時もあらん。

第壹節　今人の宗教觀の多く誤れる所以。

今日の宗教的論爭は、諸教の愛着者も無用論者輕視者も、又一般世人も共に教祖教の特質に欺かれ居る事、即ち其宗教觀の誤れるため議論行動多くは的外れとなり居る事は、第五章に於て之を云へり。然らば諸他誤迷の源となれる其宗教觀は何故に斯くは誤謬に陷りしぞ。教祖教の外的特質に致されたるもあらん、教祖教以外の宗教形態を想浮かべ得ざるにもよらん、又教的教の內的特質を確認し得ざりしにも因らん。しかも其最も手近なるものを求むれば、吾人々類の宗教的生命は既に着々新形態をとりつゝあるに、世人が忠實に其趨勢を看取綜合して以て此間より眞乎の疏通解決を得んと苦心すること少なく、ために宗教上の觀念は實際の宗教事よりも立後れたるに由るならん。由來趨勢の實相よりも此に對する觀念思想の常に多少後るゝは自然の數にして、詮方なき事にはあれど、此宗教觀の未開なるよりして今日の宗教事に禍せること實に多大なり。今日に於て宗教觀を更正するも敢て早きに失せず、冷淡者も無用論者も共に其見解と態度とを改むべきと同時に、諸教の固執者も亦速かに其過を悟り、大生命に相應はしき新天地に移住すべきなり。

第二節　宗教心、幷に宗教の成立。

宗教てふ觀念にして既に偏倚せるあり、所謂宗教心若くは宗教性なるものが亦正當なる領會を得ずして、幾多の滑稽事を演出する、固より其處なり。高僧傳中の人々が多くは幼にして無常觀を懷きたる記事は卽ち、宗教心てふ語を以て出家入門の動機を指せる、佛教一流の見解を表はせるなり。悔改を以て主一の宗教心となす基督教的見解も亦、歸神入門に最必要なるものを宗教心となせるなり。げに教祖教期に於ては祖法乃至祖名團躰が狹義且强義の宗教なる故、所謂宗教心なるものが求道心殊に入門の發心たること、尤の次第なり。斯かる常見よりして、愛美家は多く宗教心に乏しとせら

れ、又宗教心は多く老後衰弱の餘に起るものとせられ、宗教心無しと云ふことは一種剛健なるものゝ符號として誇られ、理智の勝てる者は宗教心を缺くとせられ、婦人は男子よりも宗教性多しとせられ、寺院教會に出入せざるは卽ち宗教性の薄き表徵とせられ、終には宗教心を以て一種の弱點迷謬なるが如くに想ひ、硬派の人は概して宗教性薄く、易信迷信の傾向は卽ち好個の宗教性なりと斷ずるに至れり。

更に原始的宗教狀態を見聞せる輩に至りては、恐怖こそ屈强の宗教性にして、無智暗弱より來る迷信性こそ此に次ぐものなりと想ひ、今人の宗教事を考ふるにも猶常に此筆法を以てする者すらあり。斯かる人々にとりては、基督教の會堂に影像神躰の無きは何やら物足らぬ心地し、空想多き熱帶人は堅實なる寒帶人よりも宗教性に富み、優等なる成立教りよも幼稚なるものゝ方遙かに宗教的分子多く、理性の進歩は宗教性の減縮を意味し、隨つて宗教は文明の開進と共に漸次退却すべきものとせられ、宗教性なるものは人生の一耻辱なりとせられ、今日に於て宗教を云々するは甚しく時勢後れの如き感あるなり。

第一期及第二期に於ける宗教心なるものは略以上の如く、今人が宗教性と呼ぶ處のものも多くは入門求道の動機若くは其種の傾向たるなり。しかも此は畢竟宗教てふ觀念

の幼稚なるよりして來れるなれば、其觀念の當に更正せらるべき今日に於て宗教心に關する思想も亦改造せらるべく、吾人は何時までも斯かる稚見に拘泥すべきにあらざること明白となりたれば、もはや宗教心に對する舊式觀念を是非するも無益なるべし。

既に宗教を以て個人の某程度某樣の境涯乃至生活其物となすからは、人の心性全體卽ち宗教性なるべし。そは此某樣の生活乃至境涯は二三の性情の結果にあらずして、畢竟人間の一切性能の發展成熟したるものに外ならざればなり。蓋し宗教とは若干少數の性能の成果にあらずして、實に知悟意一切の心力の活動發育して以て到達せる某高度に過ぎず、其が宗教たるを得る主要點は寧ろ諸心力全生活の統一せる邊に存するなれば、恐怖無智はおろか、悔改發心が宗教性の名を專にするすら猶非倫の甚しきものにして、人間何種の精神作用も決して獨り宗教性を以て自任すること能はざるべし。

是れ宗教心の廣義の解釋にして、宗教なるものゝ眞義又主要點が果して何邊に宿れるかを知了せるものは決して、此見の廣漠に失せることを咎めざるべし。

更に進んで一切性能中特に宗教心と稱すべきもの、卽ち狹義の宗教性擇出せんか、最に宗教本義論中に於て擧げたる處の諸性向は先づ其撰に入るならん。就中左の數者は其最たるものなるべし。

情味。　諸性能中情感的のものが特に生命の本領にして又宗教の本軍なることは前既に之をいへり。情感中にも取りわけ情味的のものが又宗教の内陣なることも蓋に一言せり。げに情味は人心の最内部的のものと形容するを得べく、又最も優等なる性能なりとも見るを得べく、又最複雑なる素地修練を要する最發達せる性能たるなり。人の生命にして此の最本來にして最優秀なる性能によりて豊富潤澤となり、又此により て自然的の統一を得んか、是れ宗教の成立せるなれば、此性能を以て特に宗教性と稱するは蓋し宜しきにかなへるものなるべし。況して、情味は大天地の最奥深き處に通じ得るものなるに於てをや。

統一性。　知的方面、意的方面、情的方面の何れより見るも人心は統一の性向を有するものにして、何れの精神作用も直接間接に統一に趨かざるはなし。此性向は各人の宗教を成立せしむる一原動力にして、重要なる宗教性と目すべきなり。情味の統一性は云ふまでもなく、意的統括力と知的概括力とは顯著なる宗教性なり。故に知力優秀なる人、意志鞏固なる人が反宗教的傾向を有せりと做す從來の見解は全く謬妄にして、知意の統一性また好個の宗教心なり。

反省自知の性向。　自我にして宗教の一中心たる以上は、見性自覺の性能は即ち重

要なる宗教性たるべし。『己を知れ』とは明智の要件たると等しく亦宗教の一大要素たるなり。自知は單に處世社交の秘訣たるのみならず、眞乎の自知は又得道接神の大道たるなり。實在の神靈に融入する途二つあり、一は眼前の諸象より進み、他は内省自覺の法による。加之、實は此内外の両道の相助け相合致したる處に於て始めて實有の眞相を躰認し得るなり。故に反省自知の性向は、接神の一法としても又必須の宗教性たるなり。

接神の性能。　現代の人が接神てふ語を以て恰も魔術の一種なるが如く感じ、荒誕不稽の怪事となすは是れ畢竟、空漠たる抽象的神觀に馴れたると、唯物觀に溺れたるとよりして來れるなり。接神は日常平易の的確なる事實なり。鬱蒼たる老杉を仰いで神氣に感じ、星漢限りなく並び大秩序の悠々運行する樣にうたれて『神』を想ひ、渾然玉の如き大聖に逢ひて『神』と叫ぶ、是れ皆接神の一種なり。人には皆接神の性能と願望と實驗とあり、問題はたゞ其接神が如何に厚く、如何にゆかしく、如何に味深く、如何に常住に、又如何に體得せるやにあるなり。吾人の感知の順序より云へば、先づ物質なり物力なり生命なり情趣なり秩序なりに觸れて爰に始めて『神』を感ずるなれど、一切實有者の側より云へば、吾人が先づ其『神』の物質性に觸れ、物力性に觸れ、

秩序性に觸れ、個々分岐性に觸れ、情趣に觸れ、生命に觸れ、以て僅に斷片的に「神」に觸れつゝあるなり。而して吾人の觸神、解神、接神は吾人の精神作用の發達と共に益々適切確實となり行く。故に接神の經驗乏しきか、甚しきは此事を訝りなどするかに至りては、未熟なる生命また陋見たると共に、不幸の極たるなり。

接神の事にして既に見たる如く既に宗教の根本要義たる以上は、此性能が主要の宗教性たること言を俟たず。げに接神の性能とは人間諸性能の總稱と云ふを得べく、一切の性能は其低度幼稚なるものも又微弱なるものも猶皆、接神の一部をなし居らざるものなく、其の材料を供せざるはなく、此等諸性能の作動の結果、人は神を認め神を知るにて、爾後一視一聽毎に神に接するなり。

以上の四者は人間の宗教性中特に顯著なるものを掲げたるまでにして、其他一切の心性悉く宗教性ならざるはなきこと、前にも此を云へり。まことや人心其物、否寧ろ生命全躰は甚しく宗教的なるものなり。此等四種の宗教性を以て世人が以前宗教性と想ひし處の恐怖、易信、無常觀、厭世心、罪惡感、悔改等の諸性情と比較せよ、何れが果して眞に宗教心と稱するに足るや、其答は必ずしも智者を待つにも及ぶまじ。以下少しく、人心が如何に發育して以て宗教と成るに至るやの其跡方を見ん。

宗教の成立。

吾人類の此世に生出で其の幼時よりして四圍の事物を感覺するや、其得る處の印象も、又斯くして以て强壯となる處の心力も共に、此實在を認知會得するの方途たらざるはなし。そが進むで知覺となり、斷定となり、想像となり、概括となり、推理となるや、實在の認知會得は益々上進して愈々豐富となり、益々其眞相に穿入り、益々時處因果の實狀を明にし、以て愈々全實在と親近するなり。また心力の發達して漸次、感覺、知覺、斷定、想像、概括、推理等と上りゆく樣其物を見るに、是れ恰も認知會得の力の强壯精確となりゆく其階級を示し、併せて其收穫成蹟の如實となりゆく程度を示せるなり。家庭、小學、中學等の各時期を通じて、人の知的勉能は畢竟此全實在との知的親近を得つゝあるに外ならざるなり。特に新奇を貪る時期は即ち接觸を多方面にせんとする所以、特に記憶に强き時期は即ち印象の保留に勉むる所以、特に構想に馳する時代は即ち實在を構成的に會得せんと欲する所以、特に推理に嚴なる時代は即ち實在の諸關係を糺さんとする所以なるなり。然らば何れも皆實有の認知會得を愈々如實〳〵にと勉むの跡ならざるはなし。更に爰に注意すべき一事あり。人の知的諸心力は其物自身何れも皆統一的傾向を有し、其收得する所の印象觀念其物また統一的傾向を

有し、各心力の强壯發達てふこと亦統一化を意味し、諸心力の階級其物又畢竟統一の漸進を表するに外ならざる事是なり。斯くて材料豐富となり關係的構成的の會得次第に進むや、人は次第に綜合的思索に向ひ、爰に總括的思辨の時代を出現するなり。人生何物ぞ、我が意義如何、世間果して何を意味するか、此大天地何物ぞ、將又人の云ふ處の神とは何ぞや等の疑問を抱いて煩悶轉々するは、青年の通性にして、精神發達の順序上必至の事たるなり。若し爰に至らざるものあらば、此は其發達甚しく不完全なるなり。智性の統一化既に斯くの如く、統一的懷疑また斯くの如くにして、其苦悶思索の結果爰に粗末なりにも、我生は斯く〳〵にして世界は然々なり、故に我は然々生活せんとの一段の斷案を得、此によりて我生を導くに至る。是れ宗教の成立期なり。知的諸性能の傾向既に斯くの如く、其成果また斯くの如く、而して此成果は即ち宗教なるからは、吾人が曩に人間の諸性能は皆廣義の宗教心なりと云へるもの、少くも知的方面に於ては極めて至當の見たる事、明ならん。猶世人が丁年少し後の時期を以て特に宗教期と稱し、又宗教家が之を求道入門の季節なりと云ふも、其當を得たるものにして、此は實に此統一的解決を得んとするより來るなり。たゞ從來は、此苦悶期の結果諸教に入ることをば人間の常道と想ひし故、宗教家は多く其が求道入門の動機たる點をのみ見しなれど、此はは實各自宗教の略成期たるにて其眞義爰に在り。其の彼此教の門に趨りし所以は畢竟諸教が其解答者を以て自任し、此を呼聲となしたるに因るのみ、今は現に諸教に就く代りに、哲學文學等を叩く者多きにあらずや。

情感の方面に於ても亦等しく此統一化の大傾向を見る。受動的に於ては、感覺とて情知の區別のつきかぬるものより始まり、苦樂の感となり、愛憎好惡となり、美醜善惡の取捨となるなり。發動的に於ては、食慾、運動慾、休息睡眠慾等よりして見聞慾、求知慾、遂行慾、追與慾等となり、また所有慾、名譽慾、權勢慾、爲業慾、異性慾、學習慾、發明發見慾等となり、他愛性となり公共心となるなり。其間何れの情感と雖も大概疎より精に、野より文に、俗より雅に進歩せざるはなし。而して其の進むや多くは他の知情意と交渉調和し、發作的のものは恒常的となり、特殊的のものは普遍的となるなり。此大體の傾向既に統一的なりと稱するを得べし。肉慾、情緒、情操など、世人の認むる諸階級は即ち統一化の進歩を表せるにあらずや。

受動的情感の性質は主として排除か愛好かの形式に於て行はる、而して此二相は即ち廣義の排惡採良に外ならずして、既に統合の傾向たり。諸慾の働く處は自我より發射する攻守、同化、征服、被蔽に外ならずして、其性向特色は又統合にあり。更に諸々

の情感をば大まかに肉慾、世慾、情愛、感味の四階に別つを得べきが、其何れにしても進歩するほど益々感興深きものとなるの性質を有し、又四階の段階の上るほど愈々感興的なるなり。則ち情感の大傾向は感興化にありて、其事たるや、大天地の眞性質にして大むね最後に吾人の接觸する處となる神韻が其眞の實相たるの事實と相照應せり。ともあれ感興化の傾向は卽ち融合統一の傾向に外ならず。

情感の幼稚なるものは多くは沒趣味的なれども、皆少しづゝは感味の色彩を帶べり。感味のことは幼年よりして存する處なれども、其發達は比較的遲々として、他の諸慾諸情の盛に活動する間に自然と發はるゝなり。故に此は情感中にては最晩く頭を擡ぐるものなり。しかも斯く最晩く頭を擡ぐる感味は最もよく情感の態を得、其の精髓に協へるのにして、情感中の情感とも稱して可ならん。此未兒が盛んに其働を始むるや、彼は一切萬事を味はゝざれば止まざらんとし、爰に特に趣味の時代生じ、天地の神韻風趣は大に彼の消化吸收する處となり、一切性能又大に風韻を帶び來る。事や會々、青年が一切に對するに批評眼を以てし常に傍觀者の地位に立つの時期と大概其時を同じくし、以て內外一切の眞意眞味を體認會得せんとするなり。

賞翫感味の最なるものは蓋し、略々天地の樣を概觀し其韻致を味はひ通りたる後に於て再び受動無爲の樣にかへり、以て安立の上に於て天地の神韻をして徐ろに已れを感染同化せしむる處のものなるべし。しかも其平靜なる大感味の以前に於て特に感味の生動する時期あり、爰に盛んに天地の神韻を吸收するや、『神』『靈』『妙』などいふ感は喞々として起來るなり。殊に風趣韻致が何やら精神的意義を以て迫來り、我と感通する處あるが如きを覺ゆるなり。爰に至りては感味者たる我の一なる如く、風趣たる天地も亦一にして、情感的性能は終に自然に天地の統一を體認せるなり。況して一方の知的性能は此頃既に概括的懷疑の時代に入り居りて、常に天地の統一を告知するに於てをや。斯くて感味が天地間の或物に觸れ、神的呼吸をなし始むるや、彼れの宗敎は爰に粗成せるなり。但し人類全體としても感味の發達は最晩きものなると、現代が知意の方面に忙殺せらるゝの時なると、情感蔑如の餘習猶殘存せると、もはや感味の大に發動すべき時期に進めるに拘はらず其が尊貴にして最要の宗敎心たること未だ宗敎家の悟る處とならず、且つ其正面の對手に專心直接して此に飽くを得ざるとにより、感味は猶最幼稚にして、宗敎の略成に對し知的諸性能ほどに有力ならず。最重要なる宗敎性にして諸心力の中樞たる感味は最も後れたり、是れ感味敎養の特に今日に緊要なる所以なり。

更に又意志の方面に於ても又一括りの出來る時期あるを見る。單なる衝動慾情に過ぎざるものが、自家の意識する處となりて願望執意となり、思慮撰擇を加へて意志となり行爲となる。些たる一個の衝動すら猶境遇の自己化よりする征服的統一的傾向を有すると同時に、意的心作用の次第に向上して複雜となるや、其間の一特性は實に交渉調和統一にあり。諸々の衝動願望の生起するまゝに行動するは幼兒も猶耐へざる處、況して諸願望の矛盾衝突は其間必ず何等かの調和取捨を加ふべき必要あり。斯くて吾人の意慾的生活は次第に取捨撰擇の小原則を生じ來り、此等小原則小性向の交渉は又更に普遍的なる原則を喚起し、實生活の間自ら我生を導くに足る所以の根本方針の樹立を得ざれば已まざらんとす。其結果、此根本方針の詮索となりて以て、知的性能が『我生如何』、『此世如何』と摸索しつゝあるに更に一大原動力を加ふるなり。而して此等情意の側に於ける綜括期が知的方面の其と同じく、普通發育せる今人に於ては丁年少し後なることは人々の知悉せる處。

然らば人心が次第に發育して以て特に統括の一期を劃するに至るは、是れ生命其物の本性と此を刺戟交渉する境遇と全生活其物とより來る自然の理數にして、人の生命にして非常に不具なる發達をなさゞるかぎり必至のものたるなり。斯くて統括自主の生活を營まんとして、其處法方針の詮索樹立に苦心する處、是れ實に人生必至の一大危機にして、此を以て特に宗教期と做すは尤なることなり。殊に生理的特殊狀態の伴なふあり、又よし大方針樹立せんとも心身の實際此に服從せざるあり、家庭上よりいふも就職上よりいふも特に自己の生計を營みて以て生活狀態を激變せざるべからざる壓迫あり。此を一面よりして人生の花といへば花に相違なきも、又一面より見れば確に悲慘なる過渡期新生期たるなり。此際に於て青年が必然の難問題、『我生如何』、『此世如何』を解決するは無論彼自身の責任にして、何者も眞乎に此に代り得るものなし。彼が今日まで生活し來れる間の智識經驗は其解決の第一資料たるべく、稍々剛健となり來れる其意志は經營の當主たるべく、此を外にして諸教諸學諸人皆畢竟その參考材料となり、補助となり、指針となるまでにして取捨撰擇は彼の意のまゝになり。其智能意志の斯く稍熟し來れるに加へて、殊に解決の凍予又中樞となるものあり、感味の性能及經驗是なり。

知的苦悶の危機に際し先づ其緩和劑となるものは感味の經驗なり。若し此味なくして我心も我生も此世も共に乾燥無味ならんには、苦悶の時忽ち自殺する外なかるべし。感味の用は此に止まらずして、更に此解決の楔子となるにあり。二十餘年間感味し來

りたる結果、大天地の神韻に親しみ其處に『神』を認め、塵の飛ぶにも水の流るゝにも猶神を呼吸するに到らば、彼はもはや根底を得しなり、彼は大我と通ずるに及べるなり、彼の心的生活はもはや充實の途を知りて乏しき事わるなし。先づ知的方面よりして人天の解決を得るは勿論なれども、其啓示に從ひて感味の實驗手應へ成立するにあらずんば、此は畢竟空論にして到底永く滿足せしむる能はず。將又意慾行動に於て種々の理想に循はんとするも、此味此覺なからんには人生は所詮機械の如く、磧に車を行るが如くなるべく、彼の能く耐得る處にあらず。然り神韻感興てふ內容正味なからんには、先なる光明も空しく冷かなるべく、後なる意志性格も單なる輪廓に止まるべし。げにや統括的苦悶の難關を解決する本軍は感味にして、知意的解決をして有意義ならしむるもの、また是に外ならず。然るに今人の感味は閉却せらるゝこと甚しければ、其宗教の成立の頗る覺束なきも無理ならず。

更に吾人の憶測を逞くし得べき一事あり。人にして若し幼時よりして良く其感味を發動養育せられ來らんには、天地の『神』に觸るゝ經驗多くして、此綜括的苦悶期の經過極めて輕易なるべく、隨つて今人の如き苦惱に陷ること少なからんか。今の青年が甚深なる苦悶に陷るは、其精神作用の發達せる徵候にして、古老輩の到底想像し得ざる

處なれども、しかも偏智にして感味の內容乏しきため此苦惱一入痛激なるなり。彼等は恰も上級の婦人の餘計に分娩に苦しむが如し。後者が百姓や下女に退却する必要なきも、充分勤勞運動すべきは勿論なるが如く、彼等も古老や丁稚小僧の如く精神の發達を阻害する必要なきも、其感味を豐富ならしむべきこと無論なり。此際特に情感偏重となり肉慾隨喜となるは卽ち此缺乏の反響にあらざるなきか。ともあれ幼時よりの感味教養は卽ち人の宗教成立上の主要事たるなり。

最狹義に於ける宗教とは人の境涯其物なるが、其成立する所以を見るに、――理智常に此が先驅となれども此を體得實現して以て我天地をつくるものは感味に外ならず、執意また此を後に引締めて以て我天地の形を保てども其內容實質となるものは又感味の成果に外ならず。まことや人の境涯なるものは、彼の一切生活の成果なれども、其要旨は彼が如何に大天地を味はひ如何に此に同化せるやの一事に外ならず。然らば最狹義に於ける宗教より云ふも、其成立には感味こそ主要の原動力たるなり。感味を中堅とし、理智及執意此が先鋒殿軍となりて、生々營々また悠遊する處の心身生命は卽ち境涯なり。此境涯にして既に可なりの發達を遂げんか、彼れの宗教は爰に成立せるなり。

嘗ては祭祀事として其双葉を見せ、宗教的團體乃至祖法として其蕾を現はしたる處の人類の宗教は、今や益々其眞面目を發揮し來りて、以上略述せる如くに成立しゆくなり。

第三節　宗教心理學及び宗教哲學

今人の宗教てふ觀念にして既に正鵠を失し、隨つて宗教心なるものゝ誤解せられ居ること甚しとすれば、其研究を以て自任する處の宗教心理學が亦概して幼稚不精覈なること、毫も怪むに足らず。げに今日にては宗教心理學は未だ成立するの資格を有せざるなり、是れ宗教心なるものゝ觀念甚しく偏倚し居ればなり。

今後の宗教心理學なるものは、單に恐怖想像渇仰等の諸性能を其主題となすことなく、又徒らに發心悔改等を以て其對象となすことなく、須らく人間一切の諸性能が如何に成長して以て自ら宗教たるに至るや、又斯くして成立せる人々の宗教なるものは更に如何に發展向上するものなるや、且つ斯かる宗教心及宗教なるものは如何に諸他の現象增過と相影響するものなるかを研究し、併せて古今聖哲等所達の境涯即ち其宗教は如何なるものにして、常人の宗教の發展に對して如何なる關係を有せるものなるかを

講究すべきなり。此大系の研究にして緒に就かんには、古今の宗教的現象は皆其處を得、正當に吾人領會の範圍内に入ることを得べきなり。然るに今日の宗教心理學は未だ自家の領域を判明に自覺する能はずして多くは枝葉事に齷齪しつゝあれば、其成蹟の未だ甚しく幼稚にして、宗教研究上に貢献し併せて世人の宗教觀上に警醒を與ふる能はざる、素より其處なり。然り今日斯學の不振は單に其研究着手後日猶淺きがためのみにあらざるなり。然らば今後は須らく前述の如き新見地よりして大に宗教心理の研究を進め、以て斯學の面目を一新し、併せて實際の宗教上に稗益する處あるべきなり。

各宗教の精確なる研究すら未だ前途遼遠なる今日、比較宗教學なるものゝ心元なき、固より至當のことなり。殊に原始期と教祖教期とに通じて一般の宗教現象を概觀するが如き、今日は猶不可能なるものゝ如し。故に宗教哲學なるものが、各哲學者の抽象的議論を除きては、現時猶未製品たるを免れざる、素より其筈なり。しかも宗教哲學の進歩せざる一大原因は更に他に存せり。宗教てふ觀念が主として教祖教の形態に制せられ、人々猶、原始的宗教現象の成熟の極は教祖教と成行くほかなく、教祖教は即ち宗教の終極形相なりと想做せる今日に於ては、宗教事の組織的哲學的研究が甚しく

其方針に迷ひ、其識見所觀の不透徹にして、啻に自學の幼稚なるのみならず、實に世の宗教事に向つて正當にして條理非然たる批判と辯護と反省と疏通とを與ふる能はず宗教界をして無指針戸惑ひ落莫の觀あらしむる、又詮なき處なり。則ち今日宗教哲學不振の重大なる一因は、學者の宗教觀の誤れるにあり。先づ教祖教てふ概念を得、そが畢竟特殊現象に過ぎずして、今後の宗教は更に新發展をなすべきこと詮明せられたる今日以後に於ては、斯學又新元氣と新研究と新形相と新成蹟とを得、併せて一般宗教事に向つて寄與する處あるべきなり。宗教の哲學的研究を以て自任せる篤學諸士の反省を望むや、切なり。

第四節　宗教の形態と内容

教祖教と個人教との立教躰裁の異なることは前既に此を云へり。又個人教の形態如何も略々既に此を見たり。而して、個人教期に於ては人々の宗教内容の歸一を求むることなく、其が百人百様なるべきを豫想するなり。故に其形態上に於て何教の信徒にもあらざることを要求する外、また内容の成べく宗教的にして豊富なることを望む外、内容をば各自に放任するなり。斯かるが故に、個人教其物としては各自宗教の形態と内

容との區別略々判然たり。

此に反し教祖教に於ては形態と内容との區別然か判明なるを得ず。教祖中心の事實は單に祖法の遵守、祖名團體の重要視等、形態上の事に止まらずして、其感味方面は先覺の蹤を蹈み、其性格實行の方面は祖師の型に入り、其思想方面は古人の世界觀人生觀を受納するのみならず、某成形教上の彼此問題を以て主要なる材料となすに至るなり。則ち形態上に於て教祖教的たるのみならず、内容に於ても教祖教の特質其物を直ちに内容となし、形態と内容との區別甚不明瞭なるを免れず。更に用語を正確にして云へば、教祖教は多く其外的特質即ち形態上の事を以て其内容となし、眞乎に内容と稱すべきもの甚稀少なるなり。

各自宗教の形態といへば其成立の心懸、其對他關係、其行き方等の事にして、其内容とは主として宗教即生命其物の如何に『在る』かの様に外ならず。此間、動と靜、成と在との如く判然區劃し得べきにあらざれど、また自ら區別なきにあらず。内容とは畢竟生命其物を指し、形態とは其宗教的對他關係を曰せるなり。

最狹義の内容即宗教とは各自の境涯其物の事にして、此境涯の要素乃至方面たるものは思想、感味并に有形行動是なり。普通各自の宗教といへば此等諸方面をこめたる生

活其物の謂にして、單に境涯のみを指せるよりも其範圍廣し。

各自宗敎の思想方面即ち彼の敎義とは其宇宙乃至神觀と人生觀とに外ならざること、曩にもいへる處の如し。故に人々は佛身論とか三位一體論とか處女降誕說とか經典論とか宗派論とか典據說とか云ふが如き、閑散なる餘波事に其耳を假すことなく、直截眞率に自我と宇宙乃至神明とに關して考究沈思體得する處あるべきなり。彼に材料を供するものは諸敎よりも寧ろ科學文學及哲學等なるべく、殊に彼自ら其眞材料にして又眞對象中に生息せるなれば、多少開發せる自家能力を以て親ら此を玩味認知すべきなり。考究讀書談話の際よりして彼れの神觀人觀が常に啓示を得る如く、其新宗敎團內に於ける交通よりして思想方面の開發催進せらるゝは當然にして又望ましき事なり。第三期の宗敎團が此啓發上に貢獻し得る妙用は頗る自在にして、彼の敎祖敎團の繫りつけ的なるに比すべくもあらず。此妙好團體內の生活をなしながら強ひて自家の啓發を妨げ、また他の開發を怠るが如きは、寶の山の空手なるべし。

各人の宗敎の感味方面は彼の宗敎的生活の中樞たるものにして、日夜起臥の間に於てよく其一切境遇を味はひ、其妙趣神韻を呼吸することは、人々の生活の眞髓たるべきなり。此世界の風韻眞味は多趣多樣にして、絕えず吾人感味の性情に迫り來り、汲めど盡きず、受くれども猶餘りある處のものなり。然り進步せる今人すら猶其の能く感味し得る處は僅に其一端に過ぎず。眞乎に天地の風骨に接し人事の眞韻を握りたる人にとりては、此世界は卽ち樣々なる情波の相交涉する妙界にして、神情漂、漲るものは唯情味のみ神韻のみ。此間に生息し、此を感味し得る生靈なれば、此に醉ひ、此と離れ、此を味はひ、此と同化せんことは固より至當にして、感味のことや啻に宗敎の中心事たるのみならず、實に全生活の本旨たるなり。敎祖に對し敎門に對する情味もまた人間の一小事たるに相違なきも、此を重要視して大海を忘るゝが如きは餘りに痴なり。先輩の蹤を蹈み其小管よりして情味を呼吸するも又可なれども、此は畢竟風景直感の性能の發達するまで寫眞によりて此に馴るゝの類なるべし。何ぞ情味の大海に身を投ぜざる、何ぞはやく眼醒めて此情味の神海を認め此に飽かざる。

各自の宗敎の內容と形態との區別は略々前述の如し。此區別の事や、實に自他の宗敎を愛護し、併せて古今の宗敎事を觀察するに、必要缺くべからざる心得たるなり。また又此區別上よりして見れば、第二期の宗敎事が多くは內容を閑却して形態上に腐心し、根本を棄てゝ枝葉に陷りし事、自ら明なり。故に概論せば、人類の宗敎事が第二期よりして第三期に進むは卽ち、其內容の益々進化するもの、其宗敎事が愈々內容化

するものにして、一般生命の進化の大法に協へり。

第五節　各人の宗教事

個人教期に於て各人が宗教的生活を營むや、諸教の障害を蒙らざるかはり又諸教の如く畫一的に要請するものなきを以て、其宗教事は動もすれば散漫疎漏となるを免れざるべし。殊に其變更の當初は此患最も強し、是れ人々のよく注意警戒すべき處なり。しかも一とたび漫然となりきりたる後、やがて自然に宗教事の行はるゝやうに成りたらば、此は眞物なり。何等の外則を感せずして自づから流露し、その發展は徐々にして然も限なきものなるべし。

（一）、一般生活が宗教的生活たるべき事は勿論なれど、特に强義の宗教と稱せらるべきものあり、各人の特別接神のは其最なるものなり。而して此は多く獨りにて爲すべき處なり。不用意の際深く神に接することもあれど、また殊に心附きたるとき此を行ふべし。接神の薄き人は不幸なり、人々は此經驗に於て豐潤なるべく、又實行によりて益々進歩すべきなり。祈願、禮拜、感恩、同化、融入、思索、嘆美、渴仰、信賴、追慕等、樣は種々に異なるべけれど、接神の愈深入りすべきことは、諸態皆然り。衆と

共に其經驗を語合ふは稗益ある事なり。音樂歌謠によりて接神を共にするも又可なり、しかも一己のみの接神は更に高度に達し得るものにして、又人々は必ず其方に於て優らざるべからず、是れ接神の正態なり。何等かの神明に接せずして宗教たる事は難き故、接神の事を必然的に要求するも決して個人教の精神に戻る處なし。

人は何時までも特別有意の接神を行ふと同時に亦、平常其儘の接神自然に出來居らざるべからず。此両者は相互に因となり果となるものにして、恒常の接神を確ならしむるものは特別臨時の接神、また特別時のものを佳良ならしむるは多く平時の狀態なり。故に一方を偏重偏廢するは誤れり。

一とたび宇宙の神髓に觸れ其の神たることを握りたる人にとりては、所謂物質も單なる物質ならず、所謂現象も又單なる現象ならず、一葉の動くも一虫の鳴くも是れ皆彼に神興を與へ、神情に染ましめ、神理を想はしめ、神意を解せしむる所以、卽ち全神に接せしむる所以のものとなり、神人の一致合調常に爰に存して、其味や門外漢の能く窺知る處にあらず。古來人類の經驗し來れる神感神興は皆此より來れるにて、其の多くには各根底あり客觀的的確性あるなり。名號神も抽象神も超越神も偶像神も教神祖も部分神も自我神も皆畢竟此的確なる神感神興の保證裏書あるがため有力なりしに

て、此を代表せるかぎりに於ては的確なる客觀的眞理たるなり。人類の進歩と共に神を知り神に接するの經驗亦次第に優秀となり來れり、斯くて今人が其程度相應に知り得、接し得る處にては、此大天地は卽ち一大神靈にして、神の國、神の世、神の懷等の思想は卽ち此事實の幾分を捉へたるものに外ならず。故に第三期に於ける吾人は此神人同感同味同調の生活に於て優秀なるもののならざるべからず、又此事に於て常に大に努力する處なかるべからず。醒めたる人にとりては炎々たる夏日も、山路の草も、衣食の事も、雪の旦も、深山も大海も、蘚々なる雷鳴も、讀書も行樂も、石飛ばす颶風も、茫漠として際涯なく而も神韻滴下する星漢の世も、はた又靜々として時間的に進行する姿も、皆是れ神自身の妙相にして、感興無限のものたるにあらずや。あゝ面白の世や、嬉しの神や。

(二)、自我の理解明認は各人の宗教事中、接神に次いで必要なるものなり。蓋にも云へる如く、古來人類の宗教事の一中心は實に自知にあり。但だ其自知たるや、道學先生の云ふ處の如く主として謙遜自抑のためにするものにあらざれば、自他間の比較相異殊に自家の缺點短處を知るを以て其要となすが如きことなく、自我の眞相を拔本的に認知し、此によりて以て全生活を營むに足るほどのものならざるべからず。自覺とい

ひ見性といふもの皆此意に外ならずして、道學先生の自知は畢竟幼稚なるなり。道學的自知また其他何種の自知より始むるにせよ、人間の生活は必ず深き自知自覺より來れるものならざるべからず、則ち人の宗教事は必ず自知を以て其重要なる要素となさざるべからず。

古來の大宗教に大體二樣の潮流あり、一は主として客觀的現象より發足して神を求め神を知り神と交はるものにして、他は主として主觀的反省よりして自我を知り認識情感の樣を知り以て大我の風骨に悟入するものなり。大體に於て基督教は前者を代表して、佛教は後者を代表し、諸他の成立教幷に各個人の經驗も又皆両者を併有すれども、然も大要何れかの徑路を偏重せり。此事たるや、何れの徑路が果して正道なりやを爭ふべき所以のものにあらずして、畢竟各人の生命の發展は此主客内外の両道を併進して始めて宜しきに協ふの所以を暗示するものに外ならず。現に何れの成立教また個人經驗も皆一路のみを專用する能はずして、彼此共に他の一路をも副貳的に併用せるに徴するも此事は明諒なるべく、又實際上、客觀的の檢覈感味を疎略にせる内觀自證は到底深入するを得ず、此に反して又主觀的の見性證得を重んぜざる見神接神は所詮淺薄微弱たるを免れざるなり。加之、眞乎の接神、眞乎の見性悟得は此両道の合一せる

以後に於て始めて成立するものなり。此事たるや、單に自我と大我とが略々大小宇宙の關係をなせるより來るのみにあらずして、其眞因は更に深き處に存せり。自知の事豈努めずして可ならんや。

一種の宗教家の言ふ處の自我なるものは多く過大或は過小に失せり。人間皆自知の素質を有し、又多少の經驗を有せり、自我の見究め豈さほど困難なるものならんや。殊に今日は人間生命の樣を見定むるの好材料好參考たる諸科學が發達し來りたれば、自知の事は一層精確なるを得るなり。但だ諸科學の未だ幼稚なるため其幼時の道草として切りに唯物觀器械觀動物觀を振りまはし、且つ客觀的研究の常として主觀的神妙を輕視し、以て只管自我を過小視せんとすれども、此は幼兒の戲れにして以て人間の眞相を蔽ふに足らず、現に其が指して以て物質的器械的動物的なりとなす處却りて靈妙の一部なるにあらずや。判明精覈は決して靈妙を減ずる所以のものにあらず。要するに科學は自知を精確明瞭ならしむる重要の大法にして、諸教即ち古人の自我觀の空漠疎大なりしを訂正する好資料たるなり。第三期の各人は主として自我其物について精察徹底し、傍ら古今の諸見を顧みつゝ、大に自知自覺せざるべからず。

（三）接神と自知との二大事に次いでは、人々は自家の思想感味方面幷に實行方面の開拓

涵養進捗を勉むべきなり。思想方面に於ては諸學術は好個の材料供給者たるべく、人々は殊に大天地と其各部分とにつき自家一流の詮索體認を加へつゝ、常に光明の增しゆくやう勉むべきなり。接神に於ても又自知に於ても理智は重要なる使命を帶べり、然り思想の二大題目は宇宙乃至神明と自我となり。接神に於て唯々信賴をのみ偏重し、しかも見ずして信ずるの態度を要求推稱するが如きは、畢竟神明を誤解し人心を見損へるより來るにて、神明の觀念の根據が何處に存せるかを知らず、又見ずして信ずると云ふ裏面には祖師乃至經典の典據てふ證憑の存することを知らざるより起れるなり。故に盲信は所詮人間重大の罪惡たるを免れざるべく、吾人は飽くまで明智によりて先つ神と已とを確認せざるべからず。感味方面の潤澤修養には大天地こそ其の重なる泉源たるべく、此に次いでは文學藝術また好材料たるべし。實行方面は即ち自家と社會とに對する勤務奉仕にして、自家の修練また此實習場に於て成就すべく、將又實際生活は人間の本舞臺なれば、爰に至力を盡ざるべからず。現世を疎んじ實際生活を厭ふが如きは迷妄怯弱の極にして、然る輩は一種の遊治郎なるべし。人は其の勤むる處に忠なるべく、又社會の欠陷に對して革新家たるべし、是れ宗教の眞義が要求する處なり。第二期の標語が摸倣なりし如く、第三期の警語は進歩なるべし。誰かいふ宗教

は保守的のものなりと。

（四）、古來の諸教に對しては、其經驗及思想の佳良なる處をば自家の參考となすべく、殊に祖師先覺の經驗の奥妙なる處をば自家發展の資料となすべし。彼此教の經典をば活讀すべく、宗教史中には吾人の般鑑となるもの多し。諸教の宗教事中には吾人を益する處多きものなれば其集會に參席して効益のみを收むるは宜しく、其名僧智識に接するは稗益多し。獨特良好の修業法をば己れ又經驗すべく、其眞相の埋沒せるをば世に紹介すべし。個人教期にありては何等教門教派の好嫌ひなく、又其何れの純信徒となることもなければ、古來一切の宗教的經驗は皆祖先蓄積の財寶として其價値のまゝ自在に此を攝取採用すべきなり。斯く取扱はれてこそ始めて過去の宗教事も其眞意義を發揮すべく、不朽の内容も始めて不朽の途を得べきなり。想へば人類の宗教的生命を今日まで向上發展せしめ來りたる諸教内の珍寶、此を古文學古美術古制度舊跡と等しなみに取扱はんには、其恩澤の及ぶ處益し永久なるべし。たゞ此を以て吾人自身の宗教の當面事となさんとするは迷なり。

（五）、個人教的宗教團體よりして各人が能く幾干の効益を收め得べきやは全く新經驗に屬するものなれば、人々は其間よりして爲し得らるゝだけ最多最良の結果を舉ぐるやう常に心懸くべきなり、殊に其純宗教的方面の事に於て然り。一方に於て藩制廢止後の藩閥黨同といふが如きものを警戒すると同時に、接神に於ても自知に於ても衆の共にし得るかぎりの事をば凡百の方法を盡して之を爲すべきなり。とりわけ相互の經驗を語合ひ、又古今の經驗を聞くに於て然り。旅行探勝は各人の宗教的修養中最も趣味あるものなれば、衆と共に時々此を試むべし。人々が同胞の宗教の上進に責任あるは勿論にして、殊に其成立のため盡す處なかるべからず。個人教の立場に於てこそ始めて誰憚らぬ眞傳道をなし得るなれ。

（六）、日常の實際生活が宗教たるを得べく、又必ず宗教たるに至らざるべからざる事はもはや人々の領會せる處なるべし。宗教的境涯乃至精神は決して靜座祈禱禮拜の時にのみ限るものにわらずして、斯かる間より得來りたる境涯乃至精神にして日常の起居動作にまで發露浸潤し、一切生活が此境に達し此風韻を帶ぶるに至りてこそ始めて、境涯及び精神は眞乎に成就せりと稱せらるべきなり。爰に達せざる境涯乃至精神は未だ幼稚たるを免れざるのみならず、此日常生活に行渡るにあらざれば其確實なる成熟到底覺束なし。故に人々の宗教事は曾に特別の接神自知等に勉め、思想感味幷に狹義の宗教的實行の上進に注意するのみならず、實に一般生活其物の善化眞化美化聖化に

努めざるべからず。

過去の諸教が概して精神方面にのみ偏したるよりして、宗教と云へば斯かるものなりと即斷し、以て此を蔑視擯斥せんとするは誤れり。此は諸教の通弊なり。否寧ろ一層溯りて其眞相を明にせば、教祖教の時代には恰も人類の進歩が神佛を尊みて世事を卑しめ、心を重んじて身を輕んじ、來世を貴みて現世を賤しめ、隨つて宗教事を高しとして生計事を低しとし、以て爰に靈と物との間に大懸隔を認めし時期たるなり。抑々教祖教なるものは宇宙觀乃至神觀と人觀とが斯かりし際に成長すべき命數のものなれば、其が厭世的離俗的性向を帶ぶるは當然の事にして、其間又多大の眞理を含めり。然るに人間の諸他生活がもはや此觀念を脱せる時にあたり、宗教事のみ獨り舊態を保守するは卽ち、其が獨り未解決のまゝにて在るによるなり。今猶虛靈事を說きて生計問題に疎く、人をして宗教乃至宗教家とは由來然るべき筈のものなりと想はしむるは卽ち、此方面のみ猶舊思想に支配せらるればなり。然らば諸教を咎むるも或は可ならんかなれど、此にて問責足れりと思はんは非なり。人類の文明は其最深の部分に於ては猶開展を遂げ得ざるなり、故に若し眞に咎むべくんば文明其物の殘夢として此を咎めよ。切言せば、今日に於て其宗教問題の解決に努力盡瘁せざる處の世人こ　教

卽世外、宗教卽迂濶てふ現象の責任者たるなれ。然らば卽ち實生活尊重の希望よりいふも、教界沈滯の現狀は速かに疏通解決すべき筈にして、各人の宗教事が其日常生活上に成立すべきこと一入明瞭なり。

まことや人間の眞修業場は其生活場裏に在りて、其發展も大成も圓熟も皆此實戰場裏より得來らるゝなり。故に生活問題を疎外する所謂宗教家の誤れるが如く、又生活場裏を以て單に金錢收得處と心得る所謂實業家も等しく迷へり。此處は人生の本舞臺、神聖なる祭壇、人の子等が相助け相勵まして以て其生を豐にし其命を展べゆくの淨土たるなり。人は默座見性の眞摯と、奉祀献供の敬虔とを以て爰に生を營み、孜々營々の間徐ろに一切性能を進め、其境涯を高めざるべからず。

彼の實務界に入るや從來の高調も頓に消失せ、俄に卑陋醜穢を眞似るが如きは、幾多青年のため惜むべき處なり。彼等は眞生活場眞修養場に入りたる所以を忘れ、爰を單に營業場取引所のみとなす、遺憾至極なり。生馬の眼を抜くてふ敏捷事中、繁忙裏中に始めて眞乎の感味をなし得、眞乎の自知接神をなし得るなれ。然り活計場裏に於て悠々たる神韻妙趣を感味し得るに至らざれば、人の宗教事は猶未熟たるを免れざるべく、又風韻情味の洋々たるに到らざれば活計場裏其物も猶野蠻たるを免れざるべし。

今人の『世間』感は猶甚しく餘臭を帶べり、『世間』の美化聖化は確に二十世紀以後の宗教家の好事業たるべし。

第六節　新宗教團體

今後の宗教團體は教祖祖師の名を奉じ其跡に隨ふ處の、所謂同信仰の徒の團結にあらずして、自他の宗教事を熱愛する同志の輩の結合たるべし。是れ曩に形態一班中に述べたる處。此種の新團體は其事多く新經驗に屬するを以て、その行動運營上には幾多の蹉躓もあるべく、また其成長しゆく間には百千の迂餘曲折もあるべく、將又新生命其物の自然に經由し出現する處には吾人意表の外に出づるものも少なからざるべければ、團體の性質如何は事後を待たざれは詳論し難けれど、其大體の性向に至りては必ずしも吾人之を推想し得ざるにあらず。蓋し前節に述べたる處の各人の宗教事は卽ち、以て新團體の性質を豫想するに足らんかを。

我は基督の則に循はんとか、我は日蓮の門下たらんとか、豫め執着する處ある者は決して新團體に加入することなかるべし、是れ自他共に益する處なかるべければなり。

斯かる輩は未だ教祖教期の天地に棲息すべき人々なれば、その個人教期にまで發達し

來らんことな勿論望ましき處なれど、其儘にては新天地内の呼吸は困難なるべし。故に況して、新團體内に甲教風味を優勢ならしめんとか、乙教分子を多く加味せしめんとかと、教派根性に制せらるるが如き野蠻人は勿論、新團體内に竄入するを許す可らず。因に、此一事を胸にしながら、現教界が只管教派宗派の睨爭に齷齪して恬然恥づる色なく、世人又毫も之を怪む氣配なきの樣を眺むれば、宗教界の空氣が如何に一般文明に遲れ、又世人の宗教觀が如何に幼稚なるかを卜するに足らん。

新團體は時々會合を催して、人々の境涯、思想及び實行上、相互に啓發告示涵養する處ある可きなり。殊に最大の宗教教師は卽ち大天地乃至神明其者の外なければ、會員中に於て屢々旅行觀光の企をなし、以て大教師の感化涵養をうくる事に勉むべきなり。また曩にも云へる如く、人々の宗教の思想方面卽ち教義は彼れの綜括的人天觀に外ならずして、其明暗如何は直ちに其生命卽宗教の强弱大小深淺高下に影響するものなれば、此方面の研鑽開拓は新團體の一日も忽にすべからざる處たり。則ち團體は、諸教が今日まで人間の根本思想にとりては殆んど餘波事とも稱すべきものを教義などゝ命名して有難がり、其傳習講究に多大の精力と時間とを費せし、其以上の注意を以て人々の人天觀の開發進歩上に竭す處あらざるべからず。其他一切生活は到底皆宗教の範

圏内にあるものなれば、團體は其會員の一切生活上に留意補助すべきなり。

新團體は單に集會に列なる會衆の烏合隊たるが如きことなく、鞏固なる結社たるべし。是れ社會組織の進化と宗教事の本性とが要求する處なり。團體は其自身に於て生物的成長をなすべく、又斯かる深遠屈強の意義及根底を有せる團體なれば自然に發育生長を遂ぐべきなれど、しかも其世話方の注意と運用の巧拙如何とは、團體の發達にとりて忽にすべからざる緊要事たるなり。一般人文の進歩と共に大小社會の組織及び共同生活てふもの亦進歩し來りたれば、宗教的結社なればとて毫も此に後れて以て榮ゆべき筈なく、其の組織運用のことも所謂純精神事と同じく亦重視すべきなり。

新團體また其教師を要す。彼は其衆員各個の生命を發足點となして以て、此を教養發展せしむべき任務を負へるものなり。教師自家の宗教が高度に達せるものなるべきは勿論、彼は人の生命が發育しゆく狀態に通曉し、其教養法について特別の研究と經驗とを有せる者ならざるべからず。今日の普通教育の教師が其教養法について特殊修業を積むの一事は、以て宗教教師の參考たるに足らんか。斯くて更に教師の須臾も忘るべからざる事は、此大天地乃至神明が直接有力にして何人よりも優れる大教師大感化者たること是なり。同胞人類中の或者が特に至上教師となり、大天地乃至神明の代表

者取次者となりて、以て各人直接の靈交及び感染を妨ぐるが如き時代は永遠に過去れり。今日までに發達し來れる人類の其宗教教師たるものは所詮、各人が直接に大天地乃至神明を相手とし教師として以て、生活し發展しゆく、其補助者介錯者たるに過ぎず。然り最大の教師は即ち人をして大天地乃至神明てふ本來の大教師より最良く修得せしむる者に外ならず。今の所謂宗教家なるものは到底教派教師たるに過ぎざれば、自ら恥ぢて以て、其の宗教教師などと名乘ることゝを慎む可きなり。

教師が衆員の宗教を刺戟し警醒せんため、自家宗教の内容を告げ、其各方面について語るは、宜しきに協へり。たゞ其の語るや、毫も一定の教義を作るためにあらざるは勿論の事なり。

若し夫れ教師の任務を大別せば、（一）各人の宗教の世話方と、（二）幼年青年の宗教心を養ひて以て彼が一段の宗教となるに至るまでの養護方と、（三）一般民衆の荒蕪せる宗教性を拾收愛撫して以て、變より正に立回らしむる處の傳道師的教師との三者に分かつを得べし。甲者は最も正統なる教師と云ふべく、乙者は即ち宗教々育家にして、丙者は醫師の業に似たり。猶第二第三の両者については後節更に説く處あるべし。

此種の新團體は隨意各所に生起すべきものにして、各地方及び各仲間の先覺者は、時代の要求が己等の上に懸れることを悟り、奮つて瀕蹈みすべきなり。而して各所に起るべき新團體は相互に關聯を保つべく、其間の關係も又、近世の社會組織の趨勢に鑑みて、各個獨立と統一との合調せる處に出つべきなり。

團體の衆員は啻に其精神的方面に於て同行者たるのみならず、其の經濟的方面に於ても又組合制度の利益を享有す可きなり。此點に於ては近來特に頭を擡來れる產業組合及び報德會などは好個の參考となる可し。精神團體中に經濟事を交ふることを毛嫌ひするは僻事たる可く、此に伴なふ危險障碍をば又別に豫防驅除す可きなり。今後の宗教事自身が一層目醒めて以て日常生活を尊重す可きが如く、新團體また經濟事を以て其一半の要務となす可きなり。蓋し人の經濟的境遇は實に其宗教の運命に大影響を及ぼすべげればなり。

宗教團體が廣義に於ける社會革新の機關となる可きは前既に云へる處の如く、又人々の稍心附ける處にして、時勢は特に此事を要求するなり。猶是に關しては後節更に陳ぶる處ある可し。

新團體の地位が過去諸教の優所美所を鑑定採取するに最も適當なるは、言を俟たず。之を攝取繼承して以て更に個人教的に發展せしむるは即ち、新團體の上に懸れる一使命たるなり。禪の修業法中に絶妙なるもの存せんには、其精髓を捉來りて、更に近世的のものたらしめよ。單に其スパルタ的なる處に神髓の宿れるものとなし、其の近世化は即ち之を殺す所以なるが如く撫念せんは、杞憂に過ざたり。基督教が比較的に實生活教たることを認めたらんには、其長所をば遠慮なく採用せよ。若し天台の教義中に深遠なる哲理を發見せんには、其の研究復活に力を惜むなかれ。黑住教中に洋々たる生命の存せることを知りたらんには、此を以て衆員の滋養となすに憚るなかれ。天主教的の敬虔謹嚴なる風味をば、其余弊を外にして以て、傳承すべく、マホメット教的勇敢の氣風、または芭蕉翁的の幽邃をば躊躇する處なくして、咀嚼すべきなり。

新團躰は更に研究の事を以て其一任務となすべきなり。古今の宗教事は即ち先人の經驗として先づ其研究の一題目たるに足るべく、各自宗教の內容は最重要なる主題にして、殊に其思想方面は直ちに研究てふことを豫想せり。その他、實行方面に於ても猶新見地よりして研究すべき處多かるべく、取りわけ經濟と宗教との新調和如何に至り

ては吾人の講究を待つもの甚多し。今後の各人の宗教事に於ては推理研究を忌嫌ふが如き陋態に陷ることなきと等しく、新團躰また毫も理智の活動を抑壓するが如き、自殺に近づくの憂なかるべし。否寧ろ個人と其團躰との光明即ち思想方面が明晃々たるべき事こそ、宗教の本旨が要請する處たるなれ。中世よりして宗教事が理智を忌み、之を虐げし所以のものは畢竟、宗教事が既に闇黑路に外れたりしによるにて、是れ宗教の正態にあらざるなり。

新團躰は今後の宗教的結社中最も正嫡のものたるべく、又其自身に於て充分存立の價値あるものなり。加之、此種の新團躰の生出は即ち現在諸教の外的特質に向つて好個の反省劑たるに足るべく、其の從屬的効果すら猶多大なるべし。世の宗教事を憂慮するの人士は再三思を此に致さゞるべからず。

第十一章　今一層の解決（中）

第七節　諸教自身は如何に處すべきなるか。

諸教自身の現況こそ何等かの疏通解決を要する處のものなれ。頽廢の大勢は幾多の憂教者をして、苦慮悶々の後種々なる復興策を試むるに至らしめたり。我邦の佛教界に對する千百の献策と施設、また歐米の基督教界に於ける雜多の新運動と新企畫は其れなり。一切の腐心努力は皆其々の効果を以て酬ひらるれども、しかも何れも皆諸教一齊の衰頽に對する眞因を究めて應病の投藥をなすにあらざれば、未だ以て此大勢をして首肯せしめ、此を疏通復活するに足らざるなり。吾人の既に見たる如く、諸教衰頽の眞因は其が教祖教の特質を脱し得ざるにあり。然らば其疏通解決の大方針は一言にて盡すを得べし、曰く教祖教たるの特質を脱却するにありと。諸教自身の始末てふことは、其自身の立場よりすりも、又一般宗教事のためよりするも、はた又一般の文明其物の要求よりするも、必ず決行せざるべからざる緊急事たるなり。

(一)、諸教は先づ自ら其外的特質を脱却すべし、此はよし諸教自身の始末てふ事を考へ

すとも、人類社會の公益が夙に請求しつゝありし處なり。自敎こそ即ち唯一の眞道なれとの觀念を放拋すべし。自敎祖神視の愚を悔ゆべし。經典崇拜の習慣と、此ぞ唯一の神語典據なれとの迷信とを離脱すべし。自敎を信ぜざれば以て眞人たる能はず、又淨土天國に入る能はずとの迷信を唾棄すべし。自敎の敎義通りに人の思想系を形作らんとする狂妄を廢止すべし。舊來の如く服從を意味せる處の信徒を作ることを中止すべし。自敎々理は古人の宇宙觀人生觀なることを悟り、今人の上に此を强ふるが如き復古を悔改むべし。宇宙觀乃至神觀と人生觀即ち眞乎の敎義たるに足るものゝほか敎祖觀や經典觀や其他一切の事を以て敎義となすの誤謬を更正すべし。唯信的に神明に信賴するはまだしも、唯信的に自敎を信ぜしめんとするの失態を悛むべし。自敎獨り神明の代辯者たりとの虛僞を撤回すべし。自敎によらざれば神明に通ずる能はずとの頑態を恥づべし。自敎のために竭すは即ち神明に奉仕する所以にして其特別加護を得べしとの妄語を詐ぶべし。自敎は人の精神を支配するの權利ありとの妄想を脱離せよ。一言に云へば、敎祖敎の外的特質は人類の大惡疫なれば、嚴重に消毒豫防すべきなり。

（二）、斯くて先づ外的特質を削除したる後、徐ろに爾餘の刷新復興に着手すべきなり。荒掃除先づ成りて、諸敎が自敎眞正の意義と價値と使命とを悟り、自繩の繫縛解けて

其使命のため身動きの出來るやうになりたらば、爰に各宗敎團躰は二部に分岐すべし。一は自敎の說示場研究場となり、他は人類の宗敎心上に發足し其敎養を以て專任する處の敎養機關となるべし。古物と日用品との首鼠兩端、何とも動きの取れぬは尤なり。今日の閉塞の第二原因は此分岐のことに心附かずして此を遂行せざるにあり。

前者はもはや社會當面の敎養機關にあらずして、唯々自敎の如何なるものなるかを世に說明し、併せて其研究を推進する機關たるなり。此は裁判組織が社會當現の判決機關となり、陸海軍が一國の國防機關となるが如き活機關にあらずして、博物館、擊劍指南所、古學研究所等の如き性質のものなれば、もはや其信徒即ち終身奉仕服事の意義にての會員を有することを避くべし。此はもはや社會の先頭に立ちて此を導くの活機關にあらざれば、其敎義思想上に何等の變更を試むるが如き必要あることなく、斯かる事は寧ろ非なり、蓋し博物館の陳列品に加工して以て現代式のものとなすは愚ならなり。此機關にて爲すべきの極は、成るべく自敎の眞を詳かにすることゝ、成るべく良く此を人に示すことゝにあり。人々は爰に來りて隨意に其敎を研究するを得べし、されど信徒などゝなるべき謂れ更にあるなし。爰に來るは猶漢學塾に行くが如く、